

---

# タイムパラレル

結倉芯太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タイムパラレル

### 【Nコード】

N5524S

### 【作者名】

結倉芯太

### 【あらすじ】

高校2年生の湊玖狼は夏休みに入ったばかりの山中で蒼色の瞳をした和装の少女と出会う。

あちこちで首を傾げる様な彼女の行動に疑問を抱いた玖狼は少女に尋ねる。

すると少女は「1555年の世界からやってきた」と答えた……。時を越えてきた少女と少年の青春ストーリーが今開幕する。

## 挿絵置場（前書き）

タイムパラレルの素敵なイラストを描いていただきました。  
私個人で酔いしれるのも良いのですが、折角なので了承のとれた作  
品は

掲載させて頂こうと思います。

イラスト描いてもいいよ、とおっしゃられる方は  
是非お願いします。常時募集中です。

## 挿絵置場

> i 2 5 1 4 8 — 3 2 8 5 <

優しく、でも少し哀しげに微笑む凜ですね。

これは y u n e k o 様の作品です。実は y u n e k o 様の絵に虜になってしまった私がお願いして描いてもらいました。優しくふわりとしていて、どこか心が落ち着くようなイラストが私、大好きなんです。

y u n e k o さんはただ今『どこか遠くへ』という作品を連載中です。

面白い設定とストーリーはお勧めなので時間のあられる方は是非お勧めします！

## プロローグ

少年は山頂にある小さな池の辺で仰向けに寝そべる。そこからは寝ながらにして少年の住む街が一望できた。空を見ると雲一つ無い透きとおった蒼が一面に広がっている。

池の周りには所々一定の間隔で木が植えてあり、それに留まっている蝉の鳴き声が聞こえてくる。彼らは自分の人生をどんな風に感じているのだろうか？

長い間暗い土の中でほぼ冬眠に近い生活を続け、やっと出てきた眩い世界には一瞬しかいられない。その間に子孫を残すのだから彼らの生は本当に一瞬で儚いに違いない。

「まあ人も似たようなものなのかもしれない……」  
少年は独りごちる。

視線を上からやや下の方角へと移すと、大きなドーム状の建物と乱雑に立ち並んだビル群が見える。少年のいる山は町で一番高く山頂まで行くと、そこから街を一望できるこの場所に出てくる。しかしそんなに高くないこの山でも、山頂までの道程がかなり険しい。その為、山頂まで登るような物好きな人は、地元の山菜取りのお爺さんか、中腹にあるお寺の人が山の手入れの為に訪れるくらいだ。そういった事情もあって、少年はよくこの場所を独りになりたい時の逃げ場所として利用していた。嫌な事、辛い事、面倒くさい事、全てがどうにでもなれば良いと思う時に此処に来て気持ちを落ち着かせる。こんな風に気持ちの良い空を見ることで、流れる雲や視界一杯に映る蒼い世界は、まるで自分をどこか違う世界へと連れて行ってくれるような気がしていた。自分の境遇や考えがどうでもよくなるような、そんな世界。

少年がそんな想いを馳せていると、ふと近くの茂みから何かガサガサと草木を掻き分けるような音が聞こえてきた。

少年は上体を起こし、周囲を見渡す。すると背後に自分と同じく

らしい年頃の少女がポツンと立っていた。少女は辺りをキョロキョロと警戒するように目配せながら、少年の方へと恐る恐るではあるがゆっくりと歩み寄ってくる。

そんなに警戒しなくてもいいんじゃないかなあ……と心の中で呟きながらも、少年は自分から声をかけることにした。変質者とかで通報されたら堪えないし。

少年はゆっくりと腰を上げて少女へと歩み寄る。そして少女の容貌に驚いた。

少女はカラメル色の長い髪に大きくて可憐な蒼い瞳をしていた、そしてこの山の中で豪華絢爛ごうかけんらんと言っていていいほどの雅みやびな着物を着ていたのだから。

少女の口が小さく開いた。

その声はとても可愛らしく見上げた空のように澄んだ声だった。

土曜日の武道場。

場内は竹刀を打ち合う乾いた音が響いていた。近々開かれる国内有数の大会に向けて、道場にいる部員達は練習に精を出す。なにせ夏休みの間に開かれるその大会は、全国の高校や社会人チーム全てが参加可能で、いわば自分達の純粋な実力が結果として表れる貴重な大会なのだ。しかもそれが地元で開催というのだから、気合の入りが他の県とは一味違ってくる。

(全くかったるいったらありゃしない……)

そんな熱気の中、玖狼くろうは心の中で愚痴をこぼす。こんなクソ熱い中、胴着と防具一式を身につけて余計に暑苦しくなってるのが楽しいのだろうか。家でも学校でも竹刀を振って、打ち込まれて、本当に何が楽しいのだろうか。いっそ学校の部活だけでも辞めてやろうかと何度考えただろうか。

そんな事を考えているうちに、向かいに立つ同級生がこちらにむかって摺り足で間合いを詰めてくる。こちらも徐々に歩み寄る。少しの静寂と緊張が場を走る。

玖狼は上段の構えからの打ち下ろしを見舞うが、それを見越したかのように相手はあっさりとかわすと、玖狼の胴目掛けて竹刀を振り切った。

「胴あり、一本！それまで」

軽い衝撃の後に先生の声が勝負の行方を告げる。お互い礼をし、面を外す。視界が一気に明るくなり、息苦しい閉塞感から解放される。

「やりい、また俺の勝ちだな」

「まったく、何で勝てないんだろうな」

「そりゃ俺のほうが強いからだろ？」

相手は面をとると、につこりと笑いながら玖狼に言う。悪気の無い無邪気な笑顔に玖狼は苦笑しながら答える。

『何度勝負してもお前には負けないな』

多分同級生はきつとそう思っているのだろう。自分がワザと打たせていることに彼が気付かないまま、交流はもうすぐ一年になる。一緒に入部してから彼はメキメキと実力をつけて今では二年生の中では一、二を争う程の実力をつけていた。今の彼は強くなっていく過程が自分でも分かっていいるから、練習が凄く楽しいのだろう。本当に羨ましい限りである。

「なあ、今日部活が終わったらお前ん家行ってもいいか？」

「えっ、何？」

そう思いながら籠手こてを外し、頭に巻いた手拭に手をかけたところで不意に声をかけられて思わず聞き返した。

「いや、部活が終わったらお前の家で遊ばねえかって」

一年間友達としてやってきた彼は、嫌な顔一つせずにリピートしてくれる。

「だってお前ん家、二階が道場ですっげえ広いだろ。皆呼んでさ、

明日は久しぶりに部活も休みだしよ、わいわいやろうぜ」

道場の壁に貼られたカレンダーでは明日は久しぶりに部活が休みだった。七月のカレンダーに目をやると、日付の欄に一つだけ目立つ大きな赤い丸が付けられていた。

自分の中では部活は週に一、二回のはずだが、部活動のカレンダーはそうではないらしい……。両親が幼い頃に他界して姉と二人で暮らしている家は、同級生達から見れば広くて迷惑のかからない溜まり場的認識が強い。今まで何度泣いてもしつこく足を運んでくる。

まあしつかりと断らない自分も悪いし、高校に入ってから姉も遠くの大学に通うようになった為、実質今は一軒家で独り暮らしをしているようなものである。これだけの好条件が揃っているのだから友人達が足しげく通いたくなるのも無理も無い。

「なあ、いいだろ？」

快活な声で再度確認してくる友人に対して、玖狼は少し眉をひそめる。

「うーん、今日は勘弁してもらえないかな。そろそろ姉貴も帰ってくるかもしれないしさ」

玖狼の口から出た『姉貴』という単語に彼は肩をビクリと反応させた後「じゃあ仕方ないか」と後退りしながらロッカーへ引き上げていった。

少し卑怯だと思ったが、姉の名前を出すことで悪友共は即時退避行動へと移る。これは昔近所迷惑というか、むしろ姉迷惑を省みなかった彼らの代償だった。二階の騒音に怒り狂った姉による教育的指導と言う名の暴力は夜通し続き、彼らは抵抗する気力も道理も無くただ一方的に延々と言葉攻めと平手打ちをかまされ続けたのだから無理もない。今や玖狼の姉は友達グループの中では鬼女と呼ばれ恐れられている。勿論玖狼はこの後も散々説教と拳骨を落とされた。あの時のアレは、玖狼の人生の中でも五本の指に入るほど恐ろしかった。

とにかく独りになりたかった時、姉の名は良い理由になる。



ロツカーで着替え、胴着を袋に入れると足早に学校を後にする。

自転車のカゴにカバンを突っ込み、勢いよく発車させる。学校から街へと続くゆったりとした長い坂を勢い下り、商店街を突っ切る。「どうしてまじめにやっちゃいけないの？」

小さい頃玖狼は父によくこの質問をした。自分の実力はこんなものではない。だからもつと皆に自分の事を理解してもらいたかった。かけっこだって周りの子達よりも全然速かったし、鉄棒だってブランコを漕ぐのだって誰よりも上手だった。でも、両親はそれを見せびらかすような行為を全て禁止した。

幼いながらに……いや、今も少しだけ思っている。何故自分はその実力を隠し続けなければいけないのだろうか。

「人ってな、自分の思っているよりも凄い事が出来る人間を恐れちゃうもんなんだよ。だって自分にはおるか誰にも出来ないようなことを玖狼がやってみたとするだろ？そりゃ最初は凄いだのなんだの騒がれるかも知れないなあ。でもよく考えると、やっぱり怖いんだよな。人外の力ってな、それがどんなに洗練されて研ぎ澄まされてきたかも分かってねえクセによ。お前が傷つくのは俺も母ちゃんも見たくねえんだよな。だから、そうそう本気なんかだしちゃ駄目だ。喧嘩なんか絶対に禁止だぞ」

玖狼に稽古をつけながら、そう言っていた父親を思い出す。まだ幼かった玖狼はその時父親の言っている意味がよく分からなかったが、大好きな両親が言う事は玖狼にとっては絶対だった。それは今でもきっちり守っている。

……いや、一度だけ破ったことがある。

商店街を抜けると、山中にあるお寺へと続く山道に入った。少し砂利を含む荒れた道に自転車がガタガタと揺さぶられる。

両親が他界し、玖狼も小学校高学年になった頃、ようやく玖狼にも父親の言った言葉が理解できるようになった。それは唯一父の言いつけを破った時だった。母の形見のキーホルダを取られて、頭にきた玖狼はつい我を忘れ暴力に身をまかせてしまった。

相手はクラス、いや小学校全体から見ても一、二を争うほどの巨躯な体つきをした男の子だった。対する玖狼と言えば平均より少し下の体つき、周りから見れば喧嘩の勝敗は一目で判断できるような反則的な体格差だった。

「おい。それを返せっ…！」

「イヤだね、だってこの石の形かつこいいじゃんか。俺にくれよ」

「それは俺の大切な物だ。だから返してよ！」

「だからイヤだ、つってんだろぅが！いいから黙ってよこせよ。どうせどつかで拾ったんだろぅ」

拾っただと？

コイツ、本気で言っているのか？

母の形見を、そこら辺に落ちていた石ころと同じ扱いにするのか？

勝ち誇ったようにムカつく笑い顔を浮かべた少年は、母の形見を右手で軽くポンポンとお手玉をするように投げては掴んでを繰り返している。その様は、今はもういないはずである母の命を弄んでいるかのように見え、我慢の限界だった。

あの時の自分は本当に表情豊かだったと思う。自分の顔を見ていたクラスの中でも真面目な部類に入る女子の一人が、血相を変えて職員室に先生を呼びに走っていくのが見えた。でも周りが見えたのはそこまでだった。

玖狼は素早く相手の懐に入ると、少年の手にあつた石を鮮やかに奪い取る。少年はあつという間に手の中の石を奪われ、一瞬呆けていたがすぐに我に返り玖狼のその行為に激怒する。周囲の連れ数人がすぐに玖狼を囲む。

「テメエ、覚悟しろよ！」

そう言い放つ巨躯な少年とその連れがジリジリと包囲を狭めてくる。いつもの玖狼なら石を取り返したら直ぐに逃げただろう。しかし今回は違った。形見を勝手に奪われ、侮辱された事に激怒していた。玖狼を中心に円を描くように包囲した彼らは一斉に玖狼目掛けて手足を突き出してくる。女子の悲鳴と叫び声が教室に響き渡る。

しかし玖狼はこの包囲をスルリと抜け出す。彼らの攻撃は玖狼からすれば兎戯に等しかった。幼い頃から稽古してきた自分がこのような輩にリンチされるわけがない。隙だらけの相手の足元を順に足で素早く払っていく。次々に尻餅をつくように倒される少年達。そして最後にあの許されない言葉を玖狼に投げつけた少年の足首を力いっぱい払ってやろうと思った。

両膝を折り、身体を屈めて右足を地面と水平にして勢いよく払うと、大柄な少年は盛大にすっ転ぶ。

よし、やった。

「あああああつ！！！！！」

玖狼に倒された少年は、左足を抱えて喚くような叫び声をあげた。教室どころか校内に響き渡りそうな大声で玖狼は我に返る。

大柄な少年の脛すねから下の部分がありえない方向へ曲がった少年の足を見た女の子の顔が歪んでいた。眉間には女の子とは思えない程に皺がよっていて、頬は引きつり、口は小刻みに震えているのが分かった。その女の子の表情は玖狼が折った少年の足を見た所為なのだろうか、それともあの時、自分の常識の域を超えた能力を見てしまった所為なのだろうか。

今ではもう分からない。

そして玖狼の周りに人が寄る事は無くなった。皆あの時の玖狼の行動に驚き怯えたのだ。歩み寄っては離れられ、話しかけることから叶わない日々が続いた。

それは苛めではなかったが、とても辛かった。子供の世界は実に分かり易い。怖い相手には黙って従うか、近寄らないかの判断をするだけ。玖狼は力で他を従えるようなガキ大将的な気性ではない。そうなるも必然的に周囲の反応は後者に限られた。

プリントの受け渡しや班行動でどうしても会話しなければならぬときだけ、クラスメイト達は自分に話しかけてくれた。しかし、その時の彼らの怯えを含んだ目を見るのが玖狼は嫌だった。それを感じるのが苦痛で、でも人と話せないことも同じくらいに辛かった。

『ウサギは淋しいと死んでしまう』という言葉をどこかで聞いたが、それは人も同じじゃないかと本気で思った。幸い玖狼には姉がいた。独りではなかった。そのお陰で学校の孤独な生活に耐えることが出来た。

そして独りきりだった小・中学校時代を卒業し、玖狼はやつともともに話せる友達を作れた。でもやはり小さい頃のトラウマか、人の目を見る事だけは今も出来ない。顔を見て話すことはできる。でも意識して相手の目を見て喋ることは出来なくなっていた。

これが父親との約束を破った代償だった。そう思ってから、両親とした約束と姉の言いつけにはきちんと従うようにしている。

そんな過去を振り返っていると、山頂の野池が顔をのぞかせる。周囲の輪に中々踏み込めないでいる勇気のない自分と、本当の自分を見せたいと思う自分。自己のバランスが狂いそうになった時、同じような過ちを犯さないように気持ちを落ち着かせるため、よくここに来るようになっていた。優しく暖かかったこの場所へ。自転車から飛び降りるように身体を草むらへ投げ出す。心地よい初夏の香りの混じった風が玖狼を包みこむ。仰向けに寝そべると、真上で輝く太陽が挨拶してくるようだ。

『やあ、またきたのか。しよっちゆうこんなところに来て、お前友達いるのかよ？』と。

友達はいるけどあいにく親友はいないんだ。そう心の中で答えると折角持ち直した気持ちにまた萎えてきた。

## 1 - 1 出会い

「あの、失礼ですが此処はどこなのでしょう？」

少女は可愛いらしい蒼い目をしており、口元は小さく微笑んでいる。年は玖狼と同じかやや下だろうか。少し幼さを残した笑みだった。少女の着ている服は桜柄の見事な着物だったので、まるで可憐な日本人形を見ているようだ。しかし日本人形には決して見えない点が一つだけあった。腰の辺りまで伸びた彼女の髪は、日本人形のような漆黒の黒髪ではなく、流麗なカラメル色をしていたからだ。

「……あの〜？」

少女の遠慮がちな声に、全く質問に答えていなかった自分に気付く。

「あはは…、えーつとなんの用ですか？」

頬を人差し指でカリカリと掻きながら、少女に改めて内容を尋ねる。少女は少し懐疑的な表情を見せるが、小さく頷いて口を開く。

「ここはどこでしょうか？ なぜ貴方はそのような可笑しな着物を着ていらつしやるのでしょうか？」

「ここがどこだって？ 自分が可笑しな着物を着ている？」

「なんだ、この女の子は？ 可笑しいのはアンタの方じゃないのか？」

少女の質問のないように玖狼は思わず眉根が寄ってしまう。少女を疑わしい目で見ってしまう。

しかし街中で道を尋ねられる事はまああることだし、よくみると少女は日本人に見えるようで外国人のようにも見える。

そう考えると、彼女は日本文化の事を痛く勘違いした外国人観光客とも考えられる。でも何故こんな辺鄙な山頂に？ 頭の中で色々な疑問が噴出してきているが、とりあえず聞かれていることに対して答える。

「ここは日本、福岡県の片田舎。この着物はシャツで下はズボン、ジーパンって」

いいながら玖狼は言葉をとぎる。

あれ？ シャツやジーパンは外国でも一般的な着衣だ。

どういうことだろう？ 少女はこんな世界的にもオーソドックスな衣類を知らないのだ？

玖狼の頭の中がこんがらがってきたところに少女はまた不思議な言葉を呟く。

「よかった、ここは日本なんですね」

ええ日本ですが。

玖狼は心の中で独りごちる。

少女は小さく笑みを浮かべて両手を胸の前で合わせる。これは安堵の表情だろうか。

「…貴方は何処から来たのですか？ここからは私の知らない屋敷が多く見られるのですが……」

少女は直ぐに笑みを消すと、真顔を玖狼に向ける。

少女も何か不思議に思っていることは、その様子から間違いなく感じられた。ここはこちらにも素直に答えておく。玖狼は起き上がると少女の隣に立ち、自分の家の方角を指差す。

「あのでっかいドームみたいな建物があるだろ？ メロンパンみたいなやつ。あの辺りに俺の家があるんだよ。で、今の世の中の建物は全部君が見ている様な建物ばかりだよ。俺は湊玖狼、君は？」

少女は玖狼の指先の彼方を見てから不思議そうな表情を浮かべる。自分はそんなに変な事を言っているのだろうか、それとも先ほどの言葉が軟派に聞こえてしまつて警戒でもされてしまったのか。

玖狼がそう思っていると、少女は正面に向き直り軽く頭を下げる。「私は凜と申します。よろしくお願いしますね。…えーっと、みなと様」

「玖狼でいいよ。俺も凜って呼ばせてもらつていいかな？」

凜は少し玖狼の呼び名を迷つたようだ。それならこちらで指定しあげたほうがいいと思つた。それに『様』付けなんて気色悪いし柄じゃない。まあ可愛い女の子にそう言ってもらえるのは少し嬉し

いけど、やっぱり柄じゃない。なにより名前の後に『様』とは……、少女は漫画かドラマでしか御目にかかれなような金持ちの子女なのだろうか。

名前で呼び合おうと提案した玖狼の言葉に少し意外そうな顔をしたら凜だったが、直ぐに小さく微笑むように、

「はい」

そう言っただけ。その小さな笑顔は遠慮がちで控えめだったがとても鮮麗だった。そしてまだ引き気味の声で凜は言う。

「あー、それで甲斐の国にはどうやって帰ればいいのでしょうか？」

凜の言葉に玖狼は面食らってしまう。

甲斐の国？ どこだったかな、たしか山梨か長野の古い地名にそんなのがあったような気がするが。だったら普通、甲斐の国などとは言わず『山梨県の』とかの件から話すべきではないだろうか。疑心になり思わず聞き返す。

「甲斐の国はここからじゃちょっと遠いなあ。凜？ 君は一体どうやって甲斐の国からこの福岡まで来たんだ？」

「さあ？ 近くの湖にお供の者を連れて花摘みをしていましたら、いきなり深く青暗い穴に吸い込まれてしまいました……。気がつけばこの場所にいたのですが。あつ、そういえばその時にこの石が光っていたような気が……」

凜はそう言い胸元にしまっていた首飾りの石を玖狼に見せる。それを見た玖狼も思わず息を呑んだ。その石の色と輝きを玖狼は知っていた。玖狼にとっても大事な宝物であるあの石と形は違うが光沢といい色合いといい全く同じだった。

気のせいではないかと思ひ、玖狼はズボンのポケットをあさり自宅の鍵を取り出す。鍵と一緒にぶら下がってついてきたそれは、やはり凜の持っている首飾りの石と同じような材質に思えた。

「…… 凄い偶然ですね」

凜が呟くように言う。可愛らしい大きな瞳が一層大きくなってい

たので、凜も玖狼と同じことを思ったらしい。

「まったく」

凄く偶然だ。少しおどけた仕草で玖狼が返す。玖狼自身、形見の石については何も知らないし、知らなくてもいいと思っている。この石が形見である限り、世間的に価値があるうがなかるうがどつちでもよかった。それよりも目の前にいる可愛い女の子と自分が同じ石を持っていたという出来事のほうが世の中の価値観よりよっぽと大事だった。

しかし凜の話聞く限り、彼女は迷子になっているようだ。花摘みに来て『お供』の者とはぐれてしまっている。彼女が帰りたいと言う場所は福岡から遠く離れた関東圏。日もそろそろ暮れてくる。とてもじゃないが彼女をそこまで連れて行くのに遣う時間もお金も用意できない。

「とりあえず……、家に来る？」

玖狼はそれが賢明と判断した。彼女の言動はどこかお嬢様の意味不明なものを感じるし、今日は家で事情をじっくりと聞いて明日きちんと対応すればいい、何よりも女の子を独り置き去りにして帰るわけにはいかない。遠慮がちに言ったのは下心が無いことを強調させる為、本当にそれはどうでもいい事だが、玖狼は男らしくない行為だけは両親の影響なのか、自分の自尊心からか、軽い男と思われるのが嫌いだった。しかしそれでも少し軟派な言葉だったろうか。俯く凜を見て玖狼は自己嫌悪になりそうになる。

「よいのでしょうか？」

予想に反した答えが返ってきた。しかも申し訳なさそうに聞き返してくる。こんな御時世、簡単に知らない人について行く事に不安はないのだろうか。世間知らずのお嬢様だつてこれくらいは教えられているはずだ。

「問題ないさ、俺今一軒家で一人暮らしみたいなものだ。姉さんがたまに帰ってくるくらいで部屋はあるからさ」

お嬢様のような言葉遣いをしておきながらも、お嬢様らしからぬ行



動に疑点はあるが、ここは後で聞こうと決めていた箇所なので気にせずと言う。なにより軟派な男だと思われなかった事に玖狼は安堵した。

「そうですか、それでは御厄介になります」

凜は深々と頭を下げる。ここまできつちり礼儀正しくされると、礼儀など微塵も知らない玖狼が逆に頭を下げなければいけなくなりそうな気がする。

「そっ、そこまでしなくてもいいからさ」

焦っている自分の声が余計に恥ずかしさを助長する。

玖狼はそれを隠すように素早く倒れていた自転車を起こし、荷台に付いていた草を手で払い自転車にまたがる。

「よし、じゃあ後ろに乗って」

「ええっと…、何処に乗ればよいのでしょうか？」

すると凜が首を傾げながら聞いてくる。そうか、この子は世間知らずのお嬢様の可能性有りだった。

「ここ、座ったら落ちないように俺の腹に両手を回して掴むんだ」

玖狼は自転車の荷台を叩いて座る場所を示す。凜はベンチに座るような形で荷台に腰を下ろすと、言われたとおり玖狼の腹に手を回し掴む。

「じゃあ行くよ」

凜の手がしっかりと自分の腹を掴んだことを確認してペダルを勢いよく回す。

玖狼を掴む凜の手に力が入るのが服越しでも分かった。少し急発進し過ぎたかと思った。

そんな矢先、今度は背中に柔らかな感触が伝わってくる。

これはもしかして……

そう思うことを意図的に断ち切ろうとペダルを踏む。少し顔が熱くなったが気にせずに一気に山を下る。

黒い煙を出しながら、とろとろと走るトラクターを追い越し商店街に入る。少し速度を落として人の動きに注意しながら賑やかな通

りを通過する。背後にちらりと目を配ると、凜は玖狼にとってはな  
んでもない商店街の風景を興味深そうに見ていた。客なんて全く入  
りそうに無い昭和の雰囲気を感じつきり残している潰れそうな喫茶  
店や、全国展開している大手ファーストフード店のどこにそんな要  
素があるのだろうか。途中に見かける横断歩道の道路標識や信号機  
なんかに目を輝かせて見ている。

家に着くと凜を降ろし、自転車を玄関横に駐車させる。

鍵を取るためポケットに手をつ込みながら、扉に手をかけると  
その扉が既に開いていることに気付いた。

まさか……。

そろり、玄関に入ると女性物のスニーカーが脱ぎ捨ててあった。  
まるで小学生が早く遊びたくて急いで学校から帰宅したかのよう  
な脱ぎ散らかし方だった。それを確認した玖狼は盛大に一つ溜息を  
つく。

凜を家に招きいれ、これをどう説明しようかと頭を抱えそうにな  
りながらリビングのドアを押す。玖狼はすぐにソファに寝そべっ  
ている女性を見やる。

ソファは彼女の定位置だ。

「姉さん」

玖狼にそう呼ばれた女性はリビングのソファに寝そべったまま  
手を挙げて返事する。

「いきなり帰って来て、一体どうしたんだよ」

「なにさ、自分ん家に帰ってきて何が悪いのさ？そもそもアンタの  
その言い方、アタシが帰ってきてたら都合が悪いみたいない言い方じ  
やない。普通『お帰りなさい』、くらい言うもんじゃない？」

「おかえりなさい」

「遅い」

相変わらず面倒くさい姉である。しかし姉の言うとおり、玖狼に  
とっては少々都合が悪い。

「そもそも、大学が夏休みなの。家に帰ってきて当然でしょーが」

姉はそう言いながら玖狼を振り返る。すると、気だるそうな姉の眼がパツチリと見開く。姉の視線は間違いなく玖狼の隣で日本人形のようにたたずむ可憐な女の子に向いている。

それを確信した玖狼は顔に手をあててうなだれる。

姉の顔が好奇に満ち満ちた表情に変わっていくのが心の内でわかる。

「どうしたのよこの子？もしかして、か・の・じょ〜？」  
くそう、やっぱりか。

「違うつてば。彼女とは今日知り合ったばかりだよ。家に帰りたみたいなんだけど家が関東の方らしくてさ、今日はもう遅かったからウチに泊めてあげるつもりだったんだよ」

姉の冷やかしに玖狼は少し動揺しながらも事情を説明する。

しかしこんな時、姉の冷やかしは続くのだ。

「きゃ〜、クロー君のえつちい〜！アタシがない間に女の子連れ込んであんな事やこんな事しようとしてたんだあ〜。いやあ〜静香こわあ〜い」

「するわけないだろ！あんな事やこんな事ってなんだよ！なに変わった事言ってるんだ」

そう反論しながら横目で凜をみると、彼女は眉根を寄せて首を少し傾げていた。

玖狼がそれを疑問に思い「どうしたの？」と尋ねると凜は不思議そうな大きな眼を向けて言う。

「…あんなことやこんなことって一体なんでしょうか？」

その言葉に玖狼は絶句し天井を仰ぐ。姉はソファの背もたれからひよっこりと顔だけ出してニヤニヤ笑っている。状況を楽しむ姉を無視して、玖狼は凜に一言言うのが精一杯だった。

「大丈夫、そんなに気にすることはないよ」と。

玖狼が肩を落としていると、姉のにやついた視線が凜にいく。

「アタシは湊静香<sup>みなとじずか</sup>。こいつの姉貴だよ。あなたは？」

静香は己の性格が滲み出るような軽い挨拶をする。

「申し遅れました。私は凜といたします。よろしくお願い致します」  
凜は静香とは対照的な丁寧な御辞儀で返す。静香は礼儀正しい挨拶に少し驚いた顔をしたが、すぐにまたにやけた顔に戻る。

「そんなにかしこまらなくていいわよ。まあ、なんにもない家だけどゆっくりしていいってね」

そう言いながら、静香はソファから立ち上がる。

立ち上がった姉は弟の玖狼から見ても美人だと思える。女性にしては背が高く、体軀はスリムでなにより姿勢が良い。艶のある黒い髪は腰の辺りまで、顔立ちは鋭い眼に緩やかな口元をしている。いつもはだるそうに寝ているが行動する時は迅速かつ機敏。スーツを着て仕事をしていれば殆どの人が外見だけで出来る女だと評するだろう。しかも想像通り料理以外ならなんでもできるのだ、アレは。

問題は内面にある。陽気で男勝り、腕っ節も玖狼が舌を巻くほどに強い。今まで静香と喧嘩して勝てた事は一度も無い。折角美人なのに彼氏ができないのはハッキリ言っつてこの男より男らしい性格が原因ではないかと玖狼は思っている。それとも単に男に興味がないのだろうか。

しかし玖狼は姉よりもむしろ兄に近いこの性格が嫌いではない。玖狼がまだ小さかった頃、両親を亡くして淋しかった時に、いつも静香は隣にいてくれた。祖父が二人を引き取ると言っつた際、両親の思いが残ったこの家を出たくないと思癩を起こす玖狼をなだめながら、姉は玖狼と二人この家で暮らすと親戚中に見栄を張った。もちろん周囲の反対にあつたが静香は断固として譲らなかつた。

後数ヶ月で中学生になるとはいえ、まだまだ子供の静香に家計や家事ができるわけがない。当然それが親族の総意だつたに違いない。しかし、静香はそれをやってのけた。自身も学校に通いながら幼い弟を高校に進学できるように育てたのだ。もちろん玖狼も料理や掃除洗濯の家事は担当した。

だが姉はもつと大変だつたに違いない。静香もきつと哀しくて泣きたいくらい辛かつたはずなのに、玖狼の前では絶対に泣き顔は見

せなかつた。そのことが玖狼には頼もしくもあり、悔しかった。

そんな本人は自分の部屋へ戻るらしく、廊下へと続くドアを開けながら言う。

「今晚の献立は？」

聞かれたのは夕飯の中身だった。玖狼は冷蔵庫の中の材料を思い出す。人参、玉葱、ピーマンと挽き肉……。

「ミートソースパスタでいかがでしょうか？」

玖狼は首を少し傾げおどけた調子で答える。静香は玖狼に背を向けたまま手だけを挙げると、左右にひらひらと小さく振る。了解の合図だ。姉はそのまま振り返らず居間を出ていった。

玖狼はキッチンテーブルの椅子にかけられたエプロンを手にとる。「という訳で俺は今から夕飯の支度にかからなくちゃなんない。とりあえず暇つぶしにテレビなり、そこにある雑誌なりで時間を潰していてくれないかな？」

首をエプロンに通す。

「お手伝いいたします」

戸惑った表情で彼女は言う。その申し出に玖狼は頭を振り「いいから」と答え、冷蔵庫を開ける。野菜室からトマト、ピーマン、人参、挽き肉、玉葱とニンニクを取り出すと銀色のシンクに敷いたまな板の上へと置いていく。

材料を抱えキッチンに戻ると、凜がまだ立ったまま呆けている。

「どうしたんだ？」

「えっと、ざつしとは一体なんでしょうか？てれびと言う物はどんなものでしょうか？」

玖狼は耳を疑った。

別に自分が変な事を言っているわけではない。やはりこの少女が変なのだ。会った時から多少変な事を言っていたが、問題ないと思っていた。しかし、ここに来て本気でおかしい事に気付いた。

この子は一体どんな環境で育ってきたのだろうか？

そんな事を考えつつ、とりあえず凜の質問に答えておく。

「雑誌はそこにおいてある本の事だよ。テレビはコレ」

玖狼は雑誌とテレビを順番で指差しながら続けて言う。

「凜？君は一体どんな環境で育ったんだい？」

失礼な事を言っているのはわかる。だが尋常ではないのだ。テレビなんて単語は小学生でもみんな理解できている。それを真顔で聞いてくるこの少女は一体どんな素性なのか。気になって仕方がない。「そうですね。私の屋敷では夜このように屋内は明るくありません。蝋燭ろうそくか油で小さな灯を作り、照らす程度です。そして私は今までこのような屋敷や道具を見たことはありません。正直驚きの連続で戸惑っています。ここは本当に日本なのですか？」

少し俯き加減で言う。凜なりに勇気を持って聞いたのだろう。顔が真っ赤になっていた。そこで玖狼は聞いてみる。馬鹿げているが、どうしても聞いてみる必要があるからだ。

「俺は今年で17歳になる。西暦1994年生まれだ。凜は？」

凜は驚いた。小さな口は見事に大きく開き、大きく綺麗な蒼い目はこれも大きく開いていた。そして出ない声を搾り出すように答える。

「わ、私は15歳ですが1540年生まれです」

彼女の戸惑っている表情に玖狼自身納得いくかどうかはまだわからなかった。

## 1 - 2 姉弟と少女

時間は午後の八時になる頃。

テーブルには玖狼の作ったミートソースパスタとレタスとトマトのサラダが三人分ある。

「うーん！美味しい！」

静香はパスタを口いっぱいにはおぼりながら言う。

「食いながら喋るなよ」

玖狼は冷淡にテーブルマナーを指摘する。

静香はそんな玖狼の小言を気にせず、パスタの皿を持ち上げてバクバク食べ続ける。

「ふあれ？凜ちゃん、なんで箸なんかでパスタ食べてんの？」

口から麺を垂らしながら静香がたずねると、凜は回答に少し困った様に笑いながら言う。

「私はふぁーく、という物は扱ったことがないので……」

凜に箸を渡したのは玖狼の独断だった。

彼女がフォークの使い方など分かるわけがないと思ったからだ。

「そーなの？今時珍しいよね。まあ着物なんか着てるし、物凄い古風な家庭で育ってたりして。どう当たってる？」

「ははっ、まさかー」

玖狼は言う。

静香はもちろん冗談で言っているが、玖狼にしてみれば冗談ではない。

この子は今から約四五〇年以上前からやってきたのだと言う。本当は一時間ほど早く食事はできるはずだった。

夕飯の準備にとりかかる前に、玖狼は凜からいろいろな情報を聞いた。

凜はどうやら四五〇年前の時代の名家の娘らしい。春日家というらしいが、そんな家名は戦国時代にあまり詳しくない玖狼にはわか

るはずがない。

凜は甲斐の国から来たと言っていた。甲斐と言えば武田信玄くらいしか玖狼は知らない。一応凜に聞いてはみたが、そのような武将は知らないと答えた。

世間知らずだと思っていた少女は実はタイムスリッパーだったのだ。

しかし、本当に信じる事が玖狼には出来ない。なぜならば、そんな事が現実にかかる訳がないのだから。

それが仮に本当だったとしても、だ。凜はどうやってこの世界に来たのだ？

ますます訳の分からない状況になってきたので、玖狼はとりあえず凜に「また後でゆっくり話そう。とりあえず飯食わない」と言い放った。

凜の方は自分の置かれている状況がある程度分かってきているようだった。聡明な女の子は「わかりました」と小さく微笑みながら頷いたのだった。

「あゝ、お腹いっぱい！」

静香は十分程度で夕飯をキレイに平らげた。

「ごちそうさま」

玖狼も少し遅れて食べ終わる。

作るのには倍以上の手間がかかるのに、食べるのは本当に一瞬だ。凜はまだ食事中だ。食べるのは遅いが無心で口を動かしている。

どうやらパスタを気に入ってくれたらしい。蒼い大きな目はパスタの皿に集中していて、箸は少しずつパスタを摘まんで口へ運ぶ。だが、そのスピードは速かった。ただ一度に摘まむ量が少ないため、どうしても時間がかかってしまう。そんな小動物のような動きをしていた凜は玖狼が見ているのに気付くと、真っ赤になり下を向いてしまった。

「おいしい？」



玖狼は微笑みながら聞いた。

「はい。とつても。こんなに美味しいものを食べたのは初めてです」  
凜は俯いたまま恥ずかしそうに言う。

「玖狼様は大変お料理が上手なんですね。毎日このような素晴らしいお料理が食べれる静香様が羨ましいです」

「こいつの事欲しいの？凜ちゃんならあげてもいいかなあ」

「おい！」

にやけ顔の姉にすかさず突っ込む。

でもやはり人から褒められると嬉しい。玖狼はこの瞬間が好きだった。

たとえ上辺だけの感謝でもいいと思っっている。自分は他人の役に立っていると思えるからだ。そういう事を言うとは偽善者だと冷やかされてきたので今はもう口にはしないが、玖狼自身は出来ることであれば他人の役に立ちたいと思っっている。だからこの目の前にいる少女もどうにかしてやりたいと考えてはいるのだが……。

「あー、アンタ。食事の片付け終わったらやるわよ」

唐突に静香が玖狼を見ながら言う。口は笑っているが目つきは鋭い。

「マジかよ」

玖狼は肩を萎める。そして凜の方を見て言う。

「とりあえず一時間ほど、また暇潰しできる？」

「さて、準備はできた？」

「はいはい」

姉の返事に答える。

道場には静香と玖狼そして正座している凜がいた。

湊家は代々武術家の家系で2階は武道場になっている。

小さい頃によくこの道場で姉と一緒に父のシゴキにあった。

それは傍から見れば、ほとんど虐待に近いほどに辛く厳しいものであったが、不思議と耐えてこられた。

父は厳しく恐い人だったが、同じくらい優しい人だった。きつい稽古をサボりたくて仮病をつかえば必ず見破られ、意識が混濁するまで剣の打ち込みをさせる事もあれば、本当に風邪をこじらせてしまった時は常に傍らに居てくれたのを思い出す。本当に真直ぐで強い人だった。

その父は亡くなり、静香が父の代わりに玖狼をシゴクようになってた。

「じゃあいくよ」

静香は言う。二人の両手には竹刀握られている。

玖狼が軽く頷くと、同時に静香は鋭い踏み込みから玖狼の頭へ斬撃を繰り出してきた。

体を半身にして最初の一撃を避ける。

すると、続いて下から切り返しぐる。それをバックステップでかわすとそのステップに追いつくように静香が迫ってくる。

そして再度、頭めがけて竹刀が振り落とされる。それを受けようと玖狼も頭上で竹刀を構える、が次の瞬間、腹部を痛みが襲った。腹を押さえうずくまる。

「まあまあねえ〜。でも、まだまだアタシには勝てないよ〜」

肩に竹刀を乗せながら言う。

「さあ、立ちなさい。まだまだいくよ！」

一時間後には仰向けに転がっていた。

久しぶりの静香のシゴキはきつかった。防具なしで打たれた為、胴着の下はアザで一杯だな、と思う。まあいつものことなので問題ないのだが、これが一般人なら絶対死んでいるだろう。

多分、自分は小さい頃からこの死んでもおかしくない稽古を積んできたのだから、一般の人よりも多少頑丈で身体能力も良いのであるろう、と思っっている。

静香はその玖狼から見ても異常な程人間離れした強さなのだが：

…。

「今日はこの辺にしといてやりますか」

「あ、ありがと〜ございました」

玖狼は息切れしながら言う。「化け物め」と呟くと静香が笑いながら腹を踏みつけてくる。手を合わせて降参のポーズをとるが止めてくれない。そんな苦しそうな玖狼をよそに静香は凜の方に目をやる。

「いい汗かいたし、お風呂にでも入ろうか凜ちゃん」

「はあ……」

少し気の抜けた返事が返ってくる。

「まあまあまあ、女の子同士仲良くしようよ〜」

静香は玖狼から足をどけ凜の方へ行き、手をとって微笑む。凜は少し戸惑っていたが、静香が「いいじゃない〜」と言いながら凜の手を引いて道場から出ようとする。

「あ、そうそう道場の掃除はよろしくね〜」

出掛けに一言。玖狼は寝たまま手を挙げて軽く振る。湊家流の了解の合図だ。そして静香と凜が出て行った後に掃除をしながら一言呟く。

「強くなりてえな」

そう、父や姉のように。

道場の清掃が終わり、一階のリビングへ降りると、風呂から出たばかりの凜と静香が冷蔵庫の前で飲み物を飲んでいた。

静香はビールで、凜は玖狼のお気に入りコーヒー牛乳を飲んで  
いた。

玖狼は少し眉をひそめる。

「そんなに気にするなっ〜。男が下がるぞ」

静香は玖狼の眉をひそめた理由を分かった様で、ご丁寧に凜にわ

かるように指摘してくれた。

凜は申し訳なさそうな顔をしている。

「いや、いいんだよ。買い溜めしてあるしさ」

玖狼がそう言うと、凜は安堵の表情になる。

静香のパジャマを貸してもらっているようで、袖口から手が指先しか出ていない。ズボンも裾を少し巻くってあった。

着物姿の彼女しか見ていなかったのだからかなりの違和感を感じたが、それ以上にそのパジャマ姿が新鮮で可愛らしかった。

「しかし驚いたわ」。凜ちゃんてタイムスリッパなんでしょ？」

「っ！！」

玖狼は静香の発言に驚く。

「話したの？」

凜は短く頷く。

「お風呂でしゃんぷーやりんすについて静香様に尋ねた際に」

「だっていくらなんでもおかしいって気付くでしょ？今時、年頃の女の子でシャンプーやリンスを知らないなんてありえないでしょ」

それはそうだ。

実際に玖狼自身も凜が雑誌やテレビを知らない事におかしいと思っただ。

しかし、姉はこの非常識な状況を簡単に理解し受け止めたようだ。

まあこの姉なら容易い事なだろう。

「お風呂ではアタシの質問ばかりだったけど、今度は凜ちゃんからの質問をアタシが答えるよ」。さあバンバンきなさい！」

「本当ですか？何から聞こうかしら」

凜の小さな口が笑っている。

その様子から静香とは一時間やそこらでかなり打ち解けたようだ。風呂場でどんな話があったか知らないが、今の二人は親友のように喋っている。

それを見ながら玖狼は風呂場へ向かう。そして風呂に入りながら考える。

全く知らない世界で、心を許して話せる人物がいる事は凜にとって大変良かったと玖狼は思う。

この世界は犯罪で溢れているのだから。凜が最初に会ったのが自分では良かったと思っている。もし、最初に悪人と出会っていたなら凜はどうなっていたのだろうか？ 理由も分からないまま何処かへ売られたり、監禁され一生人としての生活が出来ない状況になっていたかもしれない。最悪殺される事だつてある。

世の中はもうそれらの事が当たり前のような時代なのだ。だから信用に足る人物、心許せる人物というのは本当にありがたいと思う。しかもその人物は玖狼にとっても同じなのだから。

そんな安堵感を抱きながら、玖狼は風呂から上がりリビングへ入る。濡れた髪をタオルで拭きながら、キッチンの冷蔵庫を開けてコーヒー牛乳を探すが見つからない。

「あれ？おつかしいなあ」

さつき凜と静香が飲んでいた以外にまだ二本あったはずだ。

ソファーで寝そべって笑いながら凜と話していた静香に聞いてみる。「後二本あっただろ？」

玖狼はカウンター置いてある空き瓶を指差しながら聞く。

「あー、ゴメン！ 帰って来てすぐに一本空けちゃった、で今おかわりの一本」

瓶を持ち上げて静香は言う。

「凜ちゃんがあんまり美味しそうに飲むんでつい、ね」

謝る気ゼロの笑顔。

玖狼はゲンナリとした顔で独りごちる。

「……心許せる人物かどうか不安になってきたよ」

そして無くなったコーヒー牛乳を買いに行こうと、カウンターに置かれた財布を手取る。

「ちよつとコンビ二行ってくるよ」

「ついでに納豆買ってきてちよーだい」

静香の要求に手を挙げて答える。

肩を落としながら玄関で靴を履いていると、後ろからはぱたぱたと足音が聞こえる。振り返ると凜がいた。

パジャマから急いでTシャツとズボンのスタイルに着替えてきたらしく、シャツの右半分が少しズボンに入ったままだ。

「私もついて行ってもよろしいでしょうか？」

少し俯き加減だがはつきりと可憐な声が玖狼には心地よかった。

「いいよ」

玖狼は凜のズボンに入ったままのシャツを指差し、笑顔で言う「シャツ、ズボンに入ってるよ、出すならきちんと出さないと」それを聞いた凜は完全に俯いて顔を真っ赤にしながらシャツを直した。

コンビニは玖狼の家から徒歩で10分程度の距離にある。

玖狼の少し後ろを歩いている凜を見る。

やはり静香のシャツなのでダボダボではあるが、そこまで変には見えない。静香がワザと小さめのシャツをチョイスしてくれたのだろうか。ズボンにはゴム紐が付いているタイプなので、多少腰周りが小さくても大丈夫なようだ。姿勢が良く、キレイな顔立ちのせいかなのようなダサイ服装でも通りすぎる人達の視線を集めている。

玖狼自身もその視線を向ける一人だと気付く。慌てて話しを振る。

「どうこの時代は？戸惑うことも多いだろうけど」

凜は歩きながら周囲を見渡していた顔を玖狼に向け、言う。

「そうですね。今まで見た事のない物や景色で溢れています。正直今も戸惑いを隠せませんが、静香様と玖狼殿のおかげでこの世界について混乱せずにいます。しかしこの世界ではとても便利です。お風呂のお湯は火を熾おこさずに温める事が出来ますし、『てれび』は遠くで起こっている状況を伝えてくれます。私のいる世界ではこのような技術はありません。ここは幻の世界かも思っています。」

小さく微笑む少女は健気だ。

玖狼はこの未知の世界へ来た少女の力に多少なりとも力になりた  
いと思った。

もちろん自分のできる範囲内だが。

「幻の世界、ね。確かにそう思うのも無理ないかもね。俺にはタイムスリップ自体がもうありえないとしか思えないしね。しかしさあ、帰りたいたらう？いくら便利な時代に来たからといってさ」

玖狼が言いながら凜を見ると、凜の微笑みの質が変わった事に気付く。

確かに微笑んではいるのだが、明らかに先ほどの笑みとは違う。何か脱力感のある微笑だった。凜自身、もう元の時代に帰る事が出来ないことが分かってているのだろうか。そしてそんな絶望的な言葉を発してしまった自分に気付く。

「悪い……、そんなつもりじゃあなかったんだ」

頭を掻く。本気で取返しのつかない一言だったと感じて、冷や汗が背中を伝う。が、予想に反して凜は気にしていないように口を開いた。

「いえ、もちろん帰りたいたいという気持ちもありますが、今はこの世界に興味が出てきました」

そういう凜の顔は先ほどのそれとは違う笑みを返してくれた。少なくとも玖狼にはそう見えた。玖狼は対面した相手の力量ならば、ある程度見極めはつくのだが、気持ちとなるとからつきしだった。

過去に友人の恋愛相談に乗って失敗した時、静香にも指摘された。まあ、あの姉には言われたくないのだが。

俯き加減だった顔を上げると、目的地であるコンビニが見えてきた。

コンビニに入るとコーヒー牛乳を五本、続けて納豆をカゴに入れる。

凜の方を見ると、デザートコーナーの所で立ち止まって、ジーンとある商品を見つめている。

「何か欲しいものもあるのか？」

「いえ、ただこの黄色の綺麗な物は何かなと思ひまして」

「ああプリンか」

「ぷりん？」

「そうプリン。食べると甘くて美味しいよ。帰ってから皆で食おうか」

そう言っつて、玖狼はカゴにプリンを3つ入れる。凜は子供のような目でカゴに入れられるプリンを追っついていた。

それは初めて見る凜の素顔に見えた。無邪気で、純粹で、そして本当に可愛い表情で。

「いい表情だね」

玖狼は思わず言っつてしまっていた。

凜はその言葉に顔を赤らめる。

「ごめん、そんなつもりはなかったんだ。ただ、俺は凜にあんまり遠慮とか我慢をして欲しくはないなあ、と」

こういう時、上手に言えない自分が情けないと思いつつも、凜に気持ちを伝える。凜は玖狼の後を付いて来るが俯いたままだ。

レジで清算を済ませ、外へ出ると凜がシャツの袖を掴んで言う。

「く、玖狼殿は私が居ても迷惑ではないのですか？ 邪魔ではありませんか？」

いきなりの質問に少し動揺するが、回答は簡単だ。

「そんなことないさ。迷惑でもないし、邪魔でもない」

「本当ですか？」

「ホントーです」

この少女は知らない世界に放り出された。頼れるものは誰一人としていない。

玖狼だっつてそんな状況になれば心細いし、そんな状況で信頼できる人物がいけないのは絶望以外のなんでもないと思う。

玖狼には両親がいけないが姉がいる。もし姉が両親と一緒に亡くなっつていたのなら自分は壊れていたと思うし、立ち直れる自信もないだから自分が少女の支えになれたら……、せめて少女が現実を受け入れ、世界に順応できるまでは手伝ってあげたいと思う。

「困ったことや辛いことがあると言っつてくれればいい。頼っつてくれ



て構わない。相談にのるし、俺に出来る範囲でなら助ける事だつて出来るかもしれないし。約束する」

凜は依然俯いたままだが、暫くすると搾り出したような声で玖狼に聞いてきた。

「その言葉信用してもいいのですね？」

その言葉に玖狼は笑顔で応える。

「もちろんだ。それと同じこと言うけどさ、俺の名前にわざわざ『殿』や『様』なんて付ける必要なんてないから。呼び捨てで結構、玖狼でいいよ」

胸を張って言う玖狼に凜は微笑む。

街灯に照らされる凜の無垢で爛漫な笑顔は、先ほどのプリンを追っていたそれと同じ素顔だと玖狼は思った。

二人は幼い子供のように笑いながら来た道を帰って行った。

### 1 - 3 タイムスリップ

次の日、玖狼と凜は昨日二人が出会った山へ来ていた。何故ここに来たかというと、コンビニの帰り道で、玖狼が凜に提案したのだ。やはり元の時代に帰れるのなら、凜にとってそれが一番だと思い、凜と出会ったこの山をもう一度調べてみようと話しを持ちかけたのだ。凜もそれに同意してくれたので、朝食を済ませた後こうしてやってきたのだ。

しかし、手がかりとよべるものは全く無く、来たのはいいが池と野原の他に何も無い場所なので、直ぐに調べることがなくなってしまうたというのが現状である。

玖狼は途方に暮れ、小さな野池に石を掴み斬るように投げる。石は三回池の上を跳ねて沈んでいく。

昨日とまるで変わっていない。一面雑草だらけだが、池の近くは芝生かと思えるくらい綺麗に刈り取られていて、天気の良い日はここで寝そべって昼寝ができる。風が気持ちよくて夏なのに涼しく、そして優しい場所。

小さい頃、家族でよく行った思い出のこの場所が玖狼は好きだった。そして十年たった今も変わらない場所。まるでこの山だけ時間が止まっているような感じのする不思議な場所。

凜に目をやると池の対面側にいた。玖狼は駆け足気味に凜の後を追う。

「どう？なにかあった？」

「いえ、ただ気がついたらここにいて。そしてこの石が光っていて……」

凜は首飾りを見る。すると首飾りの丸い石が発光していた。

「えっ！」

思わず声が出る。

そして玖狼のポケットからも蒼い光が漏れているのに気が付く。

「まさか俺のキーホルダも凜と同じ物なのか？」

そう言つと同時に足元が軽くなる。

下を見ると、ポツカリと青い穴が開いていた。

玖狼は吸い込まれる。

もう逃れる暇とか足掻こうとか、そんな事を考える暇も無かつた。

吸い込まれた穴の中は蒼く、不思議な空間で様々な映像が映し出されていた。

意識が飛びそうなのをグツと堪えて、それらを見る。

紅く燃える大群の船、馬上で剣を振りかざす中世の騎士、絶壁の崖を馬で駆け下りる鎧武士、森の中を歩く見たことのない獣、様々な景色や映像が浮かんでは消えて行く。

そして玖狼の前に先ほどの野池の風景が広がった。そこにいたのは間違いなく、両親とまだ幼い自分と姉だった。父も母も姉も幼い自分も、皆幸せそうな表情で弁当を食べている。玖狼は遠のく意識の中叫んでいた。

「父さん！母さん！」

家族でピクニックに行った。小さい頃この行事が大好きだった。

近所の友達と遊ぶよりも家でTVゲームをするよりも、ずっとずっと好きだった。

桜の咲く季節。姉と野原を駆け回り、父とゴムボールでキャッチボールしたり、母と花の冠を作ったり、お昼には母の作ってくれたお弁当を皆で囲み、食べる。本当に大好きで幸せな時間だった。

ただその日、玖狼は母の手作りのおにぎりを池に落としてしまった。姉が気の毒に思い自分の食べかけのおにぎりを玖狼に差し出してくれたが玖狼はそれを拒んだ。

姉のおにぎりの具はおかかだったからだ。玖狼の落としたおにぎりの具は大好きな梅のおにぎりだった。最後の一つであった梅おに

ぎり池へ落としてしまい泣きじゃくる玖狼に、母は優しく「晩御飯の玖狼のご飯は梅おにぎりにしようか」と言ってくれた。玖狼は無邪気な笑顔で頷いていた。優しい微笑みを浮かべる母に、「約束だよ」そう言つて玖狼は姉と一緒にまた野原を駆け回った。

しかしその約束は果たされなかった。

幸せの時間は永遠に來なかつた。

父とキャッチボールもできない。

投げたボールは返つてこない。

母も笑顔を返してはくれない。

花の冠も大好きな梅おにぎりも作つてくれない。

幸せの時間は崩れたのだ。

もしあの時に戻れるのならば  
。

目を開けるとそこには小さな池が飛び込んできた。

何が起こつたのか理解できないが、池の形が先ほどとは違つても空気というか雰囲気はどこか思い出の場所に似ていた。

池周辺の野原は草花によって綺麗に彩られており、所々に瑞々しい木々が生い茂っていた。そこはまるで幻想的な世界にいるように感じられた。

今の世界にこのような場所があるのだろうかと思えるほどに、玖

狼はその風景に驚嘆していた。

しかしその感情も直ぐに消える。

背後から気配を感じ、玖狼は振り返り体を低くし構える。

「姫様を何処にやった！」

鋭く殺意のある声。

その声と同時に何かが玖狼目掛けて飛んでくる。

その何かをサイドステップでかわす。

するとかわしたところの上から鋭い斬撃が振ってくる。

その斬撃を半身で避け、声の正体を確認する。

玖狼は一瞬驚いた。

声の主は忍び装束を纏う、紅い目をした艶やかな黒髪の女だった。光に反射して輝く黒髪は後ろで束ねられており、それが風になびいていて優美である。鋭い紅い目で玖狼を睨む女は手に持ったクナイを素早い動作で投げつけてくる。

これも横によけると、今度は頭目掛けて蹴りがきた。

これを右手で抑える。

「一体なんなんだ？」

「黙れ！ 姫様を何処にやった！」

「はあ？」

「知らないとは言わせない。姫様が消えてから、ここに来たのはお前だけだ！ 怪しい服装をしているし、間違いなくお前が姫様を攫ったのだろう！ 何処の手の者だ！」

右ストレートが飛んできたが、玖狼は難なくかわす。

完全に問答無用である。

ならば玖狼の取る手は一つだった。

話の出来る状況にする。相手の力量からして自身の敵ではない。

玖狼は相手の攻撃を避けると素早く相手の背後に回り、腕を締め上げる。

「くっ！」

「動く痛いからじっとしてて。ちなみに俺は君の敵じゃない、む

しろ君に協力したい。信用してくれ」

「信用など出来るものか！」

「じゃあ信用はしなくてもいい。但し話くらいは聞いてくれ。俺はさつきまでカaramel、いや栗色の髪の可憐な女の子と一緒にいた。名前は凜、見てないかな？」

女のこちらを睨む目が一層キツくなる。

「やはり貴様が姫様を！」

「君の探している姫も同じ名前なのか？」

「ああそうだ！貴様、姫様を何処へやった！」

「とりあえず落ち着こう。俺も君も探し人は多分同じなわけだし、俺は今現在、状況が全くわからない。少しでいいから君と話をさせてくれないか？」

女はしかめ面のまま少し考えた末、口を開いた。

「わかった。だが腕は離して貰おうか。このままでは少々きつい」

玖狼は女の腕を離す。

「俺は湊玖狼。よろしく」

「私は密だ」

掴まれていた腕を擦りながら密は答える。

「とりあえず話しの擦り合わせをしよう。まずここは何処なんだ？」

「甲斐の国だ」

「っ！」

目を見開く。まさか自分がタイムスリップしてしまったのか……

？ 密の服装で薄々とは感じていたが本当に予想していた通りだった。しかしそれでもまだ実感が無い為、念のため聞く。

「今は西暦にして何年？」

「おかしなことを聞くな、1555年だ」

顔に手を当て空を見上げる。

ほぼ確定でタイムスリップだ。もう凜の言葉を疑う余地も無い。玖狼は凜の事を信用してはいたが、タイムスリップということに関しては未だ疑問を持っていた。しかしここに来て自分が体験し

てしまつてはもう何も言えない、何も考えられない。

携帯電話を取り出して見てみると、日付は玖狼のいた時代のまま  
で電波表示は圏外になっていた。

「甲斐の国、戦国時代……」

とてつもなく危ない時代にやつてきてしまった。

歴史に疎い玖狼でもわかる。

天下人が決まつた関ヶ原の戦いが1600年近くのはずなので、  
恐らく今は下克上真最中の時代であろう、と。そしてその時代は人  
が多く死んでいった最悪の時代だと認識していた。

人権は無く、格差とかいうレベルではない貧富の差があり、主か  
ら死ぬと言われれば部下は平気でそれを実行する。政略結婚や騙し  
合い、失敗すれば一族郎党皆殺しという事もある。正に上から下の  
身分まで一寸先はなんとやらである。

玖狼はそんな事を考えながらも今の状況を整理しようとする。

「わかつた。今俺がいる所と時代、それはわかつたよ。そして俺が  
これから言うことも君は信じないだろうけど、一応話す。信じてく  
れとしか言えないんだけど、俺自身未だ頭の整理が出来ていないん  
だ」

玖狼は続けざまに凜が時代を超えて玖狼の時代に来た事、そして  
その凜を助けてあげようと思つた事、そして凜がタイムスリップし  
てしまつた原因の調査中に、自身がタイムスリップしてしまつた事  
を密に打ち明けた。

「なるほど、貴様はその『みらい』とかいう国で姫様の従者をして  
いたのだな。そして姫様を我が国へお連れしようとした所、離れ離  
れになつてしまつたと言う事か」

意外なほどというか、簡単に密は玖狼の言うことに納得してくれ  
たようだ。

一部おかしな点があるが、今は指摘している場合ではない。

「まあ大雑把にいうとそうなる。だから俺と君が争う必要はないは  
ずだ。むしろ凜を探すという目的が一致しているのだから、ここは

手を組んだほうが良くないか？ 少なくとも一人で探すより二人が  
いいし、俺は君より強いだろう？ 何かあれば協力できる。それに  
俺もここに来たばかりで分からない事が多すぎる。できれば案内人  
が欲しい」

人差し指で顎を触りながら微笑みかける。

正直この誘いに密が乗ってくれないと困る。

玖狼は内心で凄く焦っていた。

今この世界で自分の事を知っているのは凜だけだ。少なくとも彼  
女となら話は出来るし、おそらく協力もしてくれるだろう。あの子  
は良い子だ。信用してもいいかと聞かれ、それにOKした時の凜の  
笑顔は本物だった。

あの表情を見たとき玖狼は力になってあげたいと思ったし、凜も  
信用のおける人物にしかあのような顔は見せないと思った。

しかし今、目の前にいるのは凜ではなく密だ、確かに凜の従者の  
ようであるが、玖狼の事を信用していない。

玖狼としては一刻も早く凜と合流する上で、密は必要な人物であ  
る。もし凜が屋敷に戻っていれば、面会できるか分からない。

それに、玖狼一人だと他の者に追い返される可能性もありえる。  
また圧倒的に情報が少なすぎる。皆無とっていいくらいに、だ。

だから凜の従者であろうこの女は、情報の収集と凜との再会にお  
けるキーパーソンになる。ここで断られる訳にはいかない。玖狼は  
必死でとびきりの笑顔を作りあげ密を見る。

「うむ、確かにそうだな」

ほっとする。

「しかしだ、貴様は素性もよく分からん上、信用も出来ない。少し  
でも怪しげな行動を見つけ次第……」

密は冷ややかな細い目を玖狼に向ける。意図を理解した玖狼は手  
を振りそれに応える。

「よし、交渉成立といったところで早いところ姫様を探し出さない  
とな」



「そうだな。貴様と姫様は少し前まで一緒に行動していたと言ったな。ならばこの付近にいる可能性が高いといったところか。しかし私はこの場所で貴様以外を確認していない。とすれば姫様はこの場所にはいないということか……」

俺以外を見ていない。

タイムスリップした時には一緒にいた凜が別の時代へ飛ばされた、という事も大いに考えられる。それは玖狼にとって、最悪な状況だ。しかしこの状況では凜を搜索する他、玖狼が取る行動はないのだ。たとえこの世界に凜がいなくとも。

その時、自分はこの世界でどうやって生きていこうとするのだろうか。

姉もいない。

凜もいない。

誰も自分を知らない。

自分も誰も知らない。

そんな孤独の世界で。

「とりあえず近くに町とかないのか？凜は目立つし、見かけたとかそういう情報があるかもしれないんじゃないか」

湧き上がってくる暗い感情を押し込めながら言う。

凜はカラメル色の美しい髪に大きな蒼い目をしている。服装も上品な着物なので、かなり目立つはずだ。

「近くに集落はあるが、治安は悪い。もし姫様の情報がそこで聞ける事があれば十分に警戒しなければならん。恥ずかしい話ではあるが、今我が国では小さな集落まで治安維持できるような政治ができ

ておらんのぞな」

「治安が悪くて盗みや争い事が多くなってる？」

「まあそんなところだ。中には盗賊になる者もいるのでな。そんな連中に姫様が捕らえられでもしたら……」

「したら？」

「まず最低でも人買いに売られる。最悪なのは他国に売られ、素性がばれた場合だな」

玖狼は首を傾げる。尋常ではない結果ばかりなのだが、盗賊に凜が攫われた場合どのみち売られるのだから関係ないのではないか。

「売られてしまつて結果は変わらないんじゃないか？」

密が眉を顰める。

「馬鹿か貴様は。人買いに売られた場合、わが領土内で売られたならば他国に漏れずに問題を解決できる事もある。しかし他国に売られ素性がばれると……、あの国は領主の娘が誘拐されるくらい治安は悪く国の運営が出来ていないのか、弱ってきているのか、と思われてしまう。また攫われた姫様を取引として使用してくる可能性も強い。姫様はお美しいお方だからな。嫁にしたいと言う大名方も多い。だから他国に連れ去られるということは、今言っただちらかがほぼ確定的と言える」

密は親指の先を噛み、悔しそうに言う。

確かに今の言い方で大体の察しはついた。そして密の表情から事態はあまり思わしくないということも。

そのような輩に見つかる前に一刻も早く凜を見つけ出さなければ。

「じゃあ早いところその集落に行こう。治安が悪いのは心配だけど、先へ進まなきゃどうしようもない」

そう、先へ進もう。

暗い感情を今は押し込めて。

「うむ、では私が道案内する。付いて来てくれ」

そういうと密は林道へ続く野道へ駆け出した。

玖狼は頷き、後へ続く。



林道は昼間だというのに暗く、心持ち涼しい雰囲気か漂っていた。頭上を見ると生い茂った木々が太陽の光を遮断しているが、それをかいくぐった柔らかな木漏れ日が妙に心地いい。

前を走る密は速かったが、日頃静香に鍛えられたお陰でどうにか振り切られずにいる。瞬時の速さでは密に負けるつもりはさらさら無かったが、持久力に関する速さは玖狼は密に及ばなかったようだ。彼女は玖狼よりも小さな身体であるにも関わらず、しなやかな動きで顔色一つ変えずに走っている。まるで猫のようだ。

しばらく走ると林から抜け目前に田んぼと畑が遠目に見えた。密が足を止める。

「あそこが例の集落だ。貴様の服装では聞き込みをしても目立って仕方ない。逆に怪しまれるだろう。とりあえず私が貴様の服を調達してくるので待っておれ」

「了解」

玖狼は野道の側の石に腰を下ろす。一息ついて密の行った先を確認したが、もう姿は見えない。

流石に隠密の専門だ、あっという間に姿を消すと、集落のほうへ駆けていったようだ。

どうやったら気配や姿を消し去れるのだろう。気配云々は玖狼にも少々心得はあるのだが、おそらく密ほど消すという行為は出来なйдだろうし、身を隠す術など全く皆無だ。もしこのような状況でなかったら是非教えてもらいたいものだ。まあ自身のいる世界では必要の無い技術であるが。

そしてふと考える。静香のことを。

今自分は戦国時代にいる。静香はきつと自分の事を心配してくれているだろう。身内がいなくなることに關しては玖狼も静香も物凄く敏感なのだ。

そして恐れている。

孤独を、寂しさを、そして哀しさを。

そんな思いはさせないし、玖狼自身もう二度とあんな思いはしたくない。だから今は静香の下へ帰るために全力を尽くそう。

顔を上げると、密がこつちへ向かってきていた。

「ほら、これに着替える」

色が落ちきった藍染の服と腰帯を玖狼に渡す。少し汗臭く状態も悪いが、今の時代はこれが標準なのだろう。我慢してシャツとズボンを脱ぎ着替える。着替えの際、密は背を向けてくれていた。

「へえ、意外と乙女なんだな」

玖狼自身、別に見られることは気にしないのだが間が持たないため思わず言葉が出た。

「べ、別にそんな事はない！ わ、私は貴様の裸などにき、興味はない！」

後姿でよく分らないが少し耳が赤い。

「悪かったよ。別に悪気は無いんだ。でも乙女ちゃんだよねえ」

動揺を隠せない密の口調に思わずニヤけてしまう。こつという時、

静香の気持ちが良く分かる。

「お、乙女などと！ 私は焰密、そんなことに、ど、動揺する忍びではないわ！」

勢いよく振り向く。

すると、まだ腰帯を締めていないせいで胸元とトランクスが見え隠れしている玖狼の姿が目に入ってきた為、密の顔が真っ赤に染まる。

「は、は、早く着替えんかああ！」

密は手で顔を隠ししゃがみ込んでしまった。

ホントに面白い子だ。思わず笑ってしまいそうになる。しかし笑っていた所にクナイが飛んできそうな気配がしたので必死にその笑いを押し殺した。そして笑わなかった理由がもう一つ。

人の気配がしたからだ。

気配を追って林道を少し戻り、林の中を見渡す。すると防空壕のような小さな洞穴があった。そこには盗賊とみられる男が二人。一人は刃こぼれした刀を持っていてなにやら不穏な空気を漂わせている。二人は何か話しているが、警戒しているせいか会話の途中でもしきりに辺りを見渡している。二人が何を話しているかはここからでは聞き取れない。

「何かありそうだな」

「じゃああいつらに少し聞いてくればいいんじゃないか？」

「馬鹿か貴様は。素直に聞いたところでしらばっくれるに決まっているだろう。どうにか一人になれば捕縛して聞きだせるのだが……」

「じゃあ簡単だ。俺が素直に聞いてくるよ。道に迷ったふりして一人を遠ざける。そこからは一対一だ。お互いへましなければ問題ない」

玖狼はそういつて洞穴へ向かう。

男達が気付き「どうした」と聞いてくる。いやあ道に迷っちゃいまして、と愛想笑いをしながら近づく。しかし、玖狼の予定とは裏腹に男達は玖狼に襲い掛かってきた。どうやら本当に理由ありのようだ。有無を言わずとは正にこのような事なのだろう。

「マジかよ……っ！」

そう言いつつ玖狼は刀を持った男を見やる。

頭上から斬撃、半身で避けて相手の鞘を奪う。

そして軽妙な足裁きで相手の背後へ回りこんで首筋に一撃を見舞った。

相手は低い呻き声と共に倒れた。相手の気絶を確認してもう一人の方の男を見ると、男は既に密によって捕縛されていた。

予定外のこと起きてもきちんと対応してくれる密の機転の良さに感心する。

助けに来てくれないのが少し嫌な感じだけでも。

密が投げってきた縄で気絶した男の手足を縛り、口を布で塞ぐ。

「今の技は一体なんなのだ？」

密が聞いてくる。

一応それなりに武術の心得があるようで、先ほどの玖狼の動きが妙だと感じたのだろう。

玖狼自身聞かれたのは初めてだったし、使っても気付かれない事が多かった。

「俺の家が武術やっててさ、『雪牙』っていう歩術だよ。相手の背後に回りこむ為の歩方の一種かな」

「私とやりあつた時にも使つたな」

「まあね、しかしよく見てるな」

そこで玖狼は気付く。

密は玖狼の助けに来なかつたのではなくて、玖狼の技を見たいが為に助けに入らなかつたのだ。

少し嫌な感じから嫌な感じへ好感度ダウンだ。

「ひよっとしてワザと助けに来なかつた？」

一応確認しておく。

「必要ないだろう？」

肩をすくめ笑顔で答える。わざとらしい笑顔であるが、細い紅い目と小首を傾げる彼女の様は意外なほどに綺麗だった。

「好感度、少しアップかな」

玖狼は呟いておく。

男はこうして騙されていくものなのだろうか。

「とりあえず情報を聞き出さないと」

「ああ、とりあえず尋問する。お前は洞穴と周囲から人が来ないか警戒してくれ」

「分かった」

そう言うと、密は捕縛した一人を連れどこかへ行ってしまった。変に大声を出されることを警戒しての事だろう。

とりあえず玖狼はなにか異変があれば洞穴に突入するという約束を密とし、気絶したもう一人の男と一緒に密の帰りを待つことになった。

数十分後、密は戻ってきた。一人で。まあ尋問された男の事は今はどうでもいいので、状況に変化が出たのか聞いてみる。

「確認をしたが、どうやら姫様の可能性が濃い」

「そうか、なら乗り込むしかないな。それにしても凄い偶然だな、まさか探そうとしていた矢先に見つかるかもしれないとはね」

「だな。しかし中にはまだ三人いるそうだ。安心は出来ないし、あくまでも可能性が高いだけだ。内一人、頭領がかなりの手練だそうだ」

「どうする？ 俺が当たろうか？」

「いや、私が行く」

そうなると必然的に残り二人が玖狼の相手に決定する。

まあ先ほど程度の相手なら問題ないのだが、頭領の腕がどの程度なのか気になるところだ。

密は少し前かがみ気味で洞穴に入っていく。

気がはやっていいるのだろうか。洞穴に入る前に聞いておく。

「そういえば尋問した男はどうしたんだよ」

「木に縛り付けて再度気絶させてきた。つまらん事を聞くな」

冷やかな視線を玖狼に浴びせ、前へ向き直る。

自業自得とはいえ、気の毒な男に同情しておく。

洞穴は所々光が差し込んでいる場所があり、比較的明るかった。

その分、台風や豪雨なんかで直ぐに崩れてしまいそうな感じがした。盗賊は一時的にこの脆い洞穴を拠点としたのであろうし、凜を攫ってからまだ時間があまり経過してないことも伺える。恐らくこの拠点は設備の整った拠点への中継地点として利用したのだろう。もう少し遅ければ確実に人質の救出は厳しかっただろう。

狭い空間が続き、そこを進むと少し広い空間があった。密が身を潜め玖狼を振り返る。



「いたぞ」

玖狼にも聞こえるかどうかのささやき声で密が言う。

「手前の二人、一人は素手だがもう一人は武器を持っている。姫様はその奥で手足を縛られているな」

見ると、確かに手前には子分らしき二人が座り込んで話をしている。どうやらこちらの気配に気付いてはいない。その奥に薄汚い口ひげをたくわえた男が寝ていた。そして隣には日本人形のような可憐な少女がいた。

手足、を縛られ口には布が当てられている。しかし彼女はなんの抵抗もすることなく人形のようにただ居るだけ、本当に綺麗な置物のような存在に見えた。

「予定変更だ。私があのだ二人組を一気に仕留める。油断しているからクナイで戦闘不能にしてみせる。後は奥の頭だが二人と私の戦闘で起きないかが勝負の分かれ目だな。しかし一対一なら悔しいが貴様は私よりやれる、絶対に失敗するな」

密はそう言い放ち玖狼に目をやる。

その紅い目は激しく玖狼を見ていた。

憎悪とも怒りともとれるその瞳に、少しは信頼の眼差しも入れてやってくれてもいいんじゃないかと思うのだが。

玖狼はそう思いながらも胸を張って応える。

「わかった」

百も承知だ。

助けると約束した。

破る気持ちは毛頭ないし、自分の為でもある。

玖狼は鞘を握ると、奥の口ひげの男に向かって走り出す。

それに気付いた子分が行き道を塞ごうとするが、子分たちの肩目掛けて密のクナイが飛んでくる。

子分がひるんでいる隙に玖狼は頭の下へ駆けるが、残念ながらうたた寝程度だったようで、頭は刀を持ち既に待ち構えていた。

だが流石に凜を盾にする時間はなかったようなのでホッとす。

玖狼は頭のなぎ払いを鞘で弾き返し上体を屈め足払いを見舞う。頭は尻餅をつき、仰向けに倒れたところで首を右足で踏みつける。喉を押さえ悶える男に最後の一撃を見舞いし、気絶させる。一段落つき、密の方を見ると、案の定子分たちは既に捕縛されていた。

密は凜の方に歩み寄りながら玖狼に縄を投げつけてくる。捕縛しておけということだろう。玖狼は気絶した頭の両手を縛る。

「姫様！大丈夫でございますか！」

「ええ大丈夫です」

「よかつたあ」

密は安堵の表情を見せる。

まるで母親が迷子の子供を見つけたときのような表情で。

こんな表情も出来るんだな、と思った。しかし密の凜を見る目は主従の関係とは別にある気がした。姉妹のようにも見える二人を、玖狼は自分と静香を見ているようで少し心が痒かった。

全てが上手くいくはずだったんだ。あの小僧共が現れなければよ。林道あの姫様を見つけたのは幸運というか一種の運命と感じた。日頃この林道に迷い込んでくる旅人や商人をちまちま襲って食いつないで、それでいて捕まりや、良くて投獄悪くけりや打ち首だ。

そんな俺からすりや、これは本当に運命だったんだ。あの姫様はこの界限じゃかなり有名で、その美貌から純粹に婚儀をしたい大名やその血縁関係を手に入れたい輩まで取引相手は引く手数多だ。しかも隣国の植村家なんかはきつと臣下に取り立ててくれるに違いない。あそこの殿様は前々からこの姫様を狙っていたらしいからなあ。上手く取り入れれば侍大将の地位も夢じゃあねえぞ。

くつくつく、笑いが止まらねえ。後数刻したら偽造の通行手形が

出来る。それを持ってさっさとこんな国からおさらばして俺は生まれ変わるんだ。

。そうなる運命だったんだ。あの小僧が俺の目の前に現れる前はよ

「なあ、あの盗賊達はどうなるんだ？」

遠くに凜の住む屋敷が見えてくる。

あの後、玖狼達は取締り部隊の到着を待ち、盗賊達を引き渡した後、凜の屋敷へ向かっていった。

「姫様を攫って売り飛ばそうとしたんだ。当然磔か打ち首だろう」

「うげっ、そいつは悲惨な運命だな……」

「自業自得だ」

「でもさ、やっぱりどうにかなんないのか？一応未遂で済んだんだしな」

「あんな輩全て死ねばいい」

まるで汚物を見るような目で密は言い放つ。

「姫様に危害を加える輩など皆死ねばいいのだ」

「まあまあ、私は無事ですよ。みっちゃん、心配してくれてありがとう」

凜は密に微笑みかける。密は顔を真っ赤にして俯く。

「姫様、その名で呼ぶのはお止め下さい」

「なぜですか？私は気に入っているのですよ」

「なんで『みっちゃん』なんだ？『ひそか』って言ってたじゃないか」

「ええ、『ほむらひそか』って言うのがみっちゃんの名前なんだけど幼い頃の私は『焰』と言う字が読めなくて……その『火』と同じような読みと勘違いしてしまって『火密』で『ひみつ』と」

「それで『みっちゃん』というわけか。確かにそっちのほう呼び

易くて可愛げはあるよな。俺も便乗させてもらっかな。ニツとか呼びやすいし」

「貴様……」

密は鋭い目つきで玖狼を睨む。

やっぱり止めておこう。

「それはいいですね。是非呼んでやって下さい。そちらの方が親しみ易いですし何よりみっちゃんも嬉しいでしょう?」

密は目を丸くして驚く、そして完全に俯いてしまった。

どうやら凜の無邪気な笑顔に密は観念したようだ。

彼女の笑顔には問答無用で要求を呑んでしまいそうになる。おそらく密も同様なのであろう。玖狼は少し冗談で言ったのだが。密の俯いた状態からの玖狼を睨む視線は屋敷に入るまで終始痛かったが、それは気にしない事にした。

大丈夫言わないから。

## 1 - 5 死合前夜

屋敷は玖狼が想像していたよりも質素だった。

屋根は瓦ではあるが、所々ヒビや欠けている物もあり、華やかな塗装でもしてあるのかと思いきや、田舎の家と変わらない地味なものだった。

但し広さはかなりのもので、大小合わせても二、三十はくだらないくらいの部屋がありそうだ。中は時代劇などで見る屋敷そのものだった。内装もあまり派手ではなく、どちらかと言うと楚楚とした雰囲気を漂わせている。

凜と別れ、長い廊下を歩くと突き当たりの部屋へ案内される。そこで女中に待つように言われ、おとなしく正座して待つことにする。「なあ今からどうなるんだ？」

密に聞く。

「玖狼殿、貴殿は今からこの御領主、春日幸隆様にお会いになれる。粗相するなよ」

「うは、その言い方は気持ち悪い」

そう言うつと、相変わらずキツイ密の視線が玖狼を刺す。

密は場所が場所なので言葉に気を使っているのだろう。

「いいから黙ってる、そろそろ参られるぞ」

視線を戻してしばらく待つと、奥の襖が開きそこから顔立ちの整った聡明そうな若殿が入ってきた。凜もそれに続いて部屋に入ってくる。

若殿が言う。

「此度は大儀であった。我が妹が世話になった」

そう言うつと玖狼に向かつて深々と頭を下げた。

漆黒の髪に整った厳格な目、表情自体が引き締まっっていて頼もしい雰囲気が出ている。先輩や上司でこのような人がいたら間違いなく部下や後輩は慕ってくるだろう。

「いえ、当然のことですよ。それに俺は凜との約束もありましたし」  
「ほう、約束事とな？」

幸隆が意外そうな顔で玖狼を見る。

「はい、何か困ったことがあれば助けるといふ約束をしました。まあ俺が出来る範囲ですが」

「凜が、か？そうか、真か」

玖狼は何がなんだか分からない。

狼狽していると幸隆が笑いながら言う。

「妹は普段はあまり他人に本心を見せぬ。それこそ、ここにおる私と密くらいではないか。その妹と約束事を交わせるとは、お主にをやったのだ？」

「兄様」

凜が恥ずかしそうに話に割り込む。

「玖狼は私の身分など関係なく、困っているところをいろいろと助けてくれました。先ほどの盗賊も玖狼が見事に蹴散らしてくれたのですよ」

恥ずかしそうに言うわりに凜の声には張りがある。幸隆はそんな凜に笑いながら頷く。

「うむ、凜にここまで言わせるお主ならば是非配下にしたいものだが……どうだ？」

不敵な笑みだった。

裏表が無さそうな性格に見えるのだが、実はそうでもないようだ。まあ戦国の世、裏の顔もビシッと決まっていなければ領主などできるわけがない、ということだろう。

「嬉しいんですが、お断りします」

そう、仕官などに興味はない。

今、やらなければいけないことは元の時代へ帰ることだ。この時代にいるつもりは毛頭ないのだから。それならば切り出す案は決まっている。

「幸隆さん、仕官は出来ませんが一つお願いがあります。どうか俺

を凜の側に置いてくれませんか？」

幸隆の表情が変わる。先ほどの笑顔から一変、厳しい表情を玖狼に向ける。

「なぜだ？ 玖狼殿のお役目は凜を我が屋敷に送り届けて終えたはずではないか」

確かにその通りだ。

玖狼は凜を助け、安全な場所へ護送した。普通に考えれば褒美を貰い『それで良し』のはずなのだが、玖狼にとってはそうはいかない。しかし反論も出来ない。

「兄様、私からもお願い致します。玖狼殿が護衛してくれているのであれば私も安心できます」

凜からの助け舟だ。しかしそれでも幸隆は腕を組んで悩んでいる。後もう一押しだが、玖狼からは何も言えない。すると意外な人物からその一押しが出た。

「失礼ながら申し上げます。玖狼殿は武芸に秀でており私など足元に及びませんでした。また姫様の信任厚き事も考慮に入れば、客人として姫様の護衛にあたってもらうのは如何でしょうか」

ナイスアシスト。

密の一言が決め手になったのか、幸隆は悩んだ上、一言「わかった」と言って席を立つ。そして去り際に一言。

「ならば明日、私の前で試合をやってもらう。密がそこまで言う腕前ならば、そこで腕を見せるがいい。護衛の任はその腕前を見て決めさせていただく。もちろん真剣でだ」

「それは名案でございます。直ちに準備を」

密は頭を下げながら言う。

畜生、現代人は争い事つてのは嫌いなんだよ。大体真剣勝負つてそれは『試合』じゃなくて『死合』じゃないか。くそう、「名案でございます」って、密の奴は何かもつと他に言い方がなかったのかと思う。

玖狼は密を恨めしそうに睨んだが、彼女には何の効果もなく、む

しる感謝しろという誇らしげな笑顔を返された。

その後、味気のない団子汁と麦飯の夕食によばれ、ついでに風呂も貰った。田舎の祖父母の家にあるような石釜の風呂で、湯加減もよく心地よい気持ちで明日の勝負のことなど忘れて堪能できた。風呂から上がり浴衣に着替え部屋へ戻る。

襖を開け外の中庭を見渡す。夜風が吹きこんでこれがまた心地いい。時間がゆっくり流れているように錯覚しそうになる。

ゆっくりと思考を明日のイベントへ移す。

明日の勝負、負ければ恐らく自分の命はないだろう。

玖狼自身相手を殺すつもりはないが、相手は違っだろう。死ぬ気で玖狼を殺しにくるだろう。

今日だけで既に2回、殺し合いを体験している。一度は密、二度目は盗賊、彼らは殺気を十分に放って玖狼を襲った。

正直怖くはなかった。玖狼はある程度対面した相手の実力がわかる。彼らは玖狼の相手ではなかったし、太刀筋や動きも良く見えていた。

しかし玖狼が勝つことで不幸になる者がいることも確かなのだ。少なくとも玖狼が倒した盗賊達は明日試合後に処刑されるらしい。自業自得ではあるが、この件に関わっている者としては心苦しい。明日自分が勝てば、相手の者はどうなるのだろうか？

面子を重んじるこの時代で、敗北は死を意味するのではないだろうか。

ただの勝負事に命を賭けるなんて本当にはかばかしい。いつその状況から逃げてしまおうかと思ってしまう。

すると、襖の方からノックのような音が響く。振り向くとそこには凜が立っていた。

浴衣姿に加え、濡れた亜麻色の綺麗な髪がいつもより大人な雰囲気醸し出す。

「お部屋に入ってもよろしいでしょうか？」  
凜が聞いてくる。



少し鼓動が速くなったが、抑えて言う。

「どうぞ」

凜は部屋に入ると正座し、そして小さな頭を下げる。

「玖狼、私はあなたにとてつもなく、そしてどうしようもない事を  
してしまった。こんな頭何度下げてもしょうがないかもしれない。  
本当にごめんなさい」

凜からのいきなりの謝罪に玖狼は驚く。

「いや凜が謝る必要はないじゃないか。こうなったのも俺があんな  
事を言わなければ良かったんだし」

「だけど私があなたとあのような約束さえしなければ、こんな事に  
はならなかった！」

顔を上げた凜の目には大きな水滴が溜まっていて、今にも零れ落  
ちそうになっている。

「言つたろ。信用していいって。俺は負けない。正確に言つと、負  
けたつていい勝負には全然負けちゃってもいいと思つているんだけ  
ど、明日は負けない」

凜の蒼い目からぼろぼろと涙が溢れている。それでも凜はそんな  
こと関係なしに言う。

「私……、私は春日家の実の娘ではないのです」

驚く。凜は続けて言う。

「私の父は桜城信繁。桜城家の当主でした。そして、母は異人です  
た……。本当は桜城家の滅亡以後、私は春日の姫となり、春日家の  
お世話になつていてというのが実状なのです」

凜のカラメル色の髪の毛や蒼い目、日本人形のような美しさであ  
るのにどこか独特の雰囲気があるのも、なるほど合点がいく。

異国の母の血が混じっていた為だったのだ。

「私のこの異様な姿や血筋から、様々な人達が私に寄つてきました。  
私の名で利益を食もつとする者、領土拡大の象徴とする者、そのよ  
うな欲望にまみれた者達がたくさん……。あの兄でさえ、どこかで私  
を利用している」

玖狼は何も言えない。凜はこの年齢で地獄のような人の欲望に翻弄され続けているのだろう。

残念ながら、その気持ちは玖狼には分からない。

「そして私を守るために多くの方々が亡くなりました。その中には私が幼い頃より忠義に厚く、心許せる者もいました」

凜はとうとう顔も上げること出来なくなり、俯いたまま続ける。

「そして私の前から何人も人が突然いなくなっていきました……約束したのに、私の大切な人が何人も、何人も、何人も……！ 骸となって帰ってきた彼らは私が何を言っても、何も私に言葉を返してはくれないのです！」

嗚咽おえつ交じりに言う。今まで溜まってきたモノを吐き出すように。

「私は、玖狼の時代にずっといたかった……。この時代はもう嫌です。大切な人達の命が簡単に奪われ、信頼していた人達に裏切られる……。本当は、こんな時代には戻りたくなかったのです！」

玖狼はここにきてようやく涙の意味に気付く。

凜は大好きな人達や大切な人が今まで大勢いたのだろう。

そして失ってきたのだろう、様々な形で奪われてきたのだろう。

戦争、裏切り、面子や建前、理不尽に失ってきた。

そして今度は自分も奪われると感じている。

玖狼がいくら大丈夫だと言っても、その不安はずっと付いてくるのだろう。玖狼には凜の哀しさは分からなくはない。玖狼自身大切な人を失っている。だからこそ、この心優しき少女の哀しさをなるべく除去してあげたいと思う。

玖狼は凜の頭に手を当て軽く撫でる。

「安心しろ、俺はどこにもいかない。凜が何処にいても困った時には必ず助けに来る。盗賊に捕まった時もちゃんと来ただろう？ それに俺は強かつたろう？ 明日も負けないし、相手も無事なように済ませる。誰一人不幸な思いはさせないから」

さっきまで大人のように感じていたのに、泣きじゃくっている今は子供のようだ。

どんなことがあっても、この子だけは守ってあげたいと思う。妹を持つ兄の気持ちとはこのようなものなのだろうか。今なら静香が自分の事を思う気持ちも少しわかる気がする。

凜の頬を伝う涙を指でぬぐいながら、続けて言う。

「俺を信用しろ」

玖狼は笑顔で言う。玖狼が涙を拭いても、しばらく凜は泣いていた。そして涙と鼻水でくちやくちやだったが、満面の笑みでそれに戻ってきた。

そして一言。

「信じています」、と。

## 1 - 6 御前試合

胴着を着た玖狼は、密が差し出してきた刀を受け取る。刀を抜くと、良く研がれた刀身があらわになる。

「こんなもの、必要ないのに」

「貴様が素手でも十分強いことは知っている。だがこれば御前試合であり、真剣勝負なのだ」

玖狼は出かけた刀を鞘に戻す。

まるで自身の不満である気持ちを押戻すように勢いよく鞘に戻したので、密は少し驚いたようだ。

「緊張しているのか」

「違う。俺と今日立ち合う相手はどうなるんだ？」

密は肩をすくめ、冷たく笑いながら言う。

「まあ相手が勝てば貴様が死ぬだけ。負ければ生き恥をさらすのみ。まあそのような屈辱は到底受け入れられずに当然、腹を切るだろう」  
玖狼はまた鞘から刀を抜き、再度収める。

「まあお前は相手の心配より自分の心配をしておくんだな。相手はこの春日家でも一、二位を争う高内雪村たかうちゆきむらだぞ。年はお前より若い。剣術はなかなかやるぞ。実力は私と同等程度、かな。だが剣術に関しては、私より奴のほうが上かも知れん」

それを聞き少し安心する

密と同等程度なのであれば玖狼にとっては余裕である。

「まあ総合的な能力は私の方が上だがな」

得意そうに胸を張って言う密を見て、さらに安心する。玖狼が密から会場に目をやると、試合前の挨拶であろうか、幸隆が雄弁と今回の試合について説明をしている。

決着の内容は相手の意識を飛ばすか、「参った」と言わせるかの二通りらしい。後は何をしてもOKとの事だ。

恐らく、今まで試合をやってきた者の中には意識を飛ばす為に相

手を殺めたり、戦意を喪失させるため、目潰しや急所攻撃も平気で行ったのだろう。皆それを当たり前のように聞いては頷いている。

玖狼は幸隆から目を切ると、相手の顔を確認する。

少年だった。

年は十三、四歳ほどだろうか。背は小さく、髪は武士らしく結っており、服装もまた見事な袴姿だ。

それでもまだ幼さを隠しきれていない。大きな目は意思の強そうな眼光を放っている。鼻も高く、口はキリツと横一文字で結ばれており、将来はきつと美男子になるに違いない。

評判通り、腕のほうもかなりのモノだろうという空気も伝わってくる。

しかしこんな少年までもが命を賭け、このような馬鹿げた試合をやるのかと思うと頭が痛い。そして何も出来ず流されている自分にも。

幸隆が説明を終え、玖狼と少年を見て言う。

「それでは両者前へ」

玖狼はここで一つの賭けに出る。

「幸隆さん」

幸隆が懐疑的な細い目を向けてくる。

「なんだ？」

玖狼はその瞳に臆せずに進言する。

「この勝負、俺が勝てば一つお願いをきいては頂けないでしょうか」

「ほう、だがまだお主が勝利するとは限らんぞ。まあいい、お主が勝てた場合、その口上聞いてみよう」

第一関門突破。後は目の前の勝負に勝つだけだ。視線を前にやると真つ赤な顔をした少年がこっちを睨んでいる。

少年は主君の面前で相手に侮辱されたのだ。玖狼はそんなこと思っていないが、先ほどの会話の流れは少年にとっては侮辱以外のなものでもなかっただろう。

周囲もそのように受け取ったようだ。

密に聞くと、この幼い少年は見た目とは裏腹にこの国では一、二

位を争うほどの腕前らしいのだから。その少年を侮辱されるのは、この国の武士にとっては自分も同様の扱いをされているに等しい。玖狼は完全に場を敵に回してしまったようだ。

幸隆が目で場を制しつつ言葉を放つ。

「ではお互いに名乗れ！」

「高内雪村、尋常にいざ参る！」

「湊玖狼」

お互い名乗り合わせ、一礼する。それを見届けた後、幸隆は右手を高々に挙げ、振り下ろし、叫んだ。

「始め！」

雪村の行動は速かった。

合図と同時に突進、鋭い突きを放ってきた。

玖狼はそれを避ける。

雪村は突きの刀を右に返し、即座なぎ払う。それに対し、玖狼はしゃがんで廻し蹴りを見舞う。しかし、雪村もこれをひらりとかわす。

場から大きな歓声が上がる。

今で雪村の実力が分かった。

結論から言うと、密の言う事は信じては駄目だった。

突きは速く、切り返し後の見切りも素晴らしかった。

恐らく剣術に関しては、あの嘘つき女の倍は強い。

玖狼が同じ年の頃、あのような動きは出来なかつたと思う。しかし、玖狼だつて昔のままの強さで成長が止まっているわけではない。

雪村が再び突きを放ってきたのにタイミングを合わせ、歩術「雪牙」で背後に回る。

だが雪村も直ぐに反応、身をよじりながらなぎ払ってくる。この動きに合わせる様に、玖狼は左手で鞘を押さえ、右手で刀を抜く。

抜いた刀で斬撃を受け、同時に左手で持った鞘で雪村の鳩尾みそおちにキツイ一撃を喰らわせた。

雪村の意表を突いた二刀流。勝負はこれで決した。

玖狼は腹ばいでもがく雪村の首に、意識を飛ばす最後の一撃を入れる。

雪村は呻き声と共に倒れこんだ。

静まり返った後、感嘆の声が一斉に飛び交う。

幸隆も驚いているようで目が開いたままだ。今の一瞬の攻防に目を奪われた形になっている。

玖狼は一礼する。

「あのー、俺の勝ちですよね」

幸隆はその一言で我に返る。

「う、うむ。この勝負、湊殿の勝ちとする！」

そして玖狼に向かって扇子を突き出して言う。

「見事な勝負であった」

玖狼はもう一度礼をする。そして幸隆を見据え言う。

「試合前の件なんですが……」

幸隆は平手を玖狼に向け、遮るように言う。

「ああ、わかっている。で、要望とやらはなんなのだ？」

玖狼は一度小さく深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。

「ここが最終関門だ。上手いかなければ目的は達成できない。

強固な意志を持った眼差しで、幸隆を見て言う。

「高内雪村と、昨日の盗賊五名の命を助けて頂きたい」

幸隆はもちろん、周囲のもの皆この発言に仰天した。

雪村はともかく昨日の盗賊は凜を攫ったのだ。普通であれば、そのような大罪の前に命は確実に無い。端正な顔立ちをした一見とても強そうには全く見えない優男が、このような広言をするとは誰も思っていないかったのだ。

ただ一人を除いては。

「な、なにを言っておる。雪村はともかく、あやつらは無理だ」

玖狼はそれでも強い光を目に宿し、言う。

「ならば俺が責任を持って彼らを監視します。もう二度とあんな事をしないように。彼らがまた犯罪をすれば、俺も一緒に獄ごくに落ちま

す。それに幸隆さんは俺が試合に勝てば願いを叶えてくれると言ってくれました」

幸隆は悩む素振りを見せる。

玖狼はここで一計を用いたのだ。

幸隆は確かに願いを聞いてやると言ったが、叶えるとは言っていない。玖狼はこの大衆の面前で、幸隆の『聞く』という言葉を『叶える』に換言したのだ。

幸隆としては、このような条件は呑めない。しかし、玖狼との約束を破棄すると領主としての評価、器量が下がる。評価が下がれば内乱や裏切りが発生する可能性だってある。地盤は固ければ固い方がいい。

だが、彼らは凜を狙った罪人だ。そんな彼らを解放した拳句、凜本人の護衛に付かせるのもまた同じだ。

周囲の反応はどうだろう。思慮に欠ける人物と思われはしないだろうか。これ事態が他国の罠とも言い切れない。なにしろ玖狼の素性は不明なのだから。きっと幸隆は主としての器の問題に、頭を悩ませているに違いない。

玖狼の思惑通りなのか、又は別の何かを考えているのだろうか、その結論に幸隆が迷っていると側から澄んだ声がした。

「私は玖狼殿に賛成です。確かに、私は彼らに攫われましたが何もされておりません。それに私の側には玖狼殿と密があります。この二人に彼らは瞬く間に倒されています。彼がいれば、私をどうかしようという発想はおこらないでしょう。もしそれでも不安ならば、この雪村殿も私の護衛の任に付けてはどうでしょうか」

凜が胸に手を当てながら発言する。

顔は紅潮し、声も最初のほうはうわずっていた。とても緊張したのだろう。

しかし内容は良かった。

上手くいけば雪村も一緒に助けられる可能性も含めたところは、玖狼も舌を巻く。



雪村は建前から腹を切る可能性があった。もしこの凧の一言で、幸隆から凧の護衛の任を命じられたら、雪村は断れないだろう。実直そうな彼の性格から、護衛の任を優先してくれるかもしれない。

この姫様は美人な上に聡明だ。玖狼の考えを理解し、必要であれば頼まずとも手助けしてくれる。

凧の進言もあり、幸隆はしばらく扇子を開いたり閉じたりしていたが、最後に勢いよく扇子を閉じると、玖狼を見やる。

「玖狼殿に凧姫の護衛の任に当たってもらおう。そして雪村と野党の者達もだ。但し、部下が悪行や失態を犯した場合、責任は全て貴殿に追って頂くが」

幸隆は穏やかな口調で言った。だが瞳の奥に冷たい何かを感じる。「わかりました」

玖狼はその何かを気のせいと思うことにした。

とりあえず計画は成功したのだから。誰も死なさず、最良の形で今日のイベントを終わらす事が出来た。

後は凧に協力してもらいつつ、元の時代へ帰る方法を探すのみだ。これがどうしようもないのだが……。とりあえず住まいと情報源の確保には成功したところだろう。

玖狼は空を見上げる。

先行き不透明な玖狼の行き先とは違い、空は透明な蒼だった。

## 1 - 7 顔合わせ

所詮こんな運命だったんだ。最後の最後に欲が出たせいで、今俺は牢獄の中にいる。

この屋敷の外では御前試合の真っ最中らしい。昨日俺を捕まえた男と、あの高内雪村が試合をやっているらしい。昨夜、門番達が話しているのを聞いた。

どうやら賭けをやっているようで、ほとんどの者が高内に賭けている様だった。

高内雪村、あいつは若いくせに相当やる。一度戦場であいつを見たが、あの突きと払いは尋常じゃない。俺なんかが目の前に立ちふさがってみようものなら、瞬殺だろう。

見た目も美形だしよ、天も高内だけには二物も三物も与えてんだろうなあ。

しかし、その高内もあの男には適わない。断言できる。あの男、見た目は普通だが中身が違う。

あの内からくる畏怖の感情は忘れられねえ。あの男は人の皮を被った化け物だ。本当に俺はツイてなかつたんだ。

一世一代の大博打であんな奴と鉢合わせるなんて。

俺は染みだらけの天井を見つめる。

今行われている試合が終われば、俺は殺されるんだ。そりゃ当たり前か、そういう大それたことをやっちまっただからよ。

ああ、どうせ一世一代の大博打なら、悪事より善行でやるべきだったよなあ。善行でなら例え失敗しても、後悔なんて起こらないかもしれないもんな。

本当最悪の人生になっちまっただなあ。こんなところで自分の今までの愚行を悔いることになるとはなあ。

お、獄守がきやがった。俺もこれまでか。

結局俺はこうなる運命だったんだなあ。

昌虎まさたろうは元部下の四人と並んで、玖狼の前に座っていた。玖狼の横には雪村がいる。

「まあ楽しんでください」

何が何だか分からず、キョトンとした顔でいる昌虎達に、玖狼は言う。

昌虎は未だ目が大きく開いたままである。蓄えられた口ひげも、太い眉も驚いたように立っついていて、まるで狐につままれたようになっている。

そんな昌虎達を気にせず玖狼は言う。

「俺はこれから凜姫の護衛の任に当たる事になりました。貴方達も一緒にです。それに伴った形で、貴方達の犯した罪は今回不問となりました。ですが、これからの悪行や規律違反は厳しく取り締まるから宜しくお願いします」

昌虎は状況が飲み込めず、聞き返す。

「あつしらは死刑を免れたって事ですかい？」

玖狼は笑顔で返す。

「はい、今回のことは不問です」

「で、そのあつしらが狙った姫様の護衛の任を、あつしと旦那がやるってことですかい？」

「うん、そうなるね。まあ、貴方達がまたこの間みたいなことをやらないのが前提条件だけだね。もしやったら……、わかるよね？」

昌虎はゴクリと唾をのむ。やった時のことを考えるだけで、寒気がする。あの冷血女と目の前の少年を相手にするのはもう嫌だ。

黙って頷く。

「俺は湊玖狼」

手を差し伸べられる。

昌虎は感動した。

胸に熱いものが込み上げてくる。この少年は自分達の悪事を不問としてくれた上、命まで助けてくれたのだろう。

幾ら馬鹿でも分かる。普通なら死刑の罪が不問になるなんて常識では考えられない。となると、状況から見ても、自分達を救ってくれたのが目の前の玖狼であることは明白だった。

昌虎は差し伸べられた手を両手でしっかりと握り返す。

これは運命だ。昌虎は直感でそう思った。

「あつしは昌虎と言いやす。一度死んだ身。旦那の為、忠義を尽くさせて頂きやす。なんなりと申しつけくだせえ」

これに玖狼は苦笑いを返す。続けて昌虎と隣の四人にむかって、雪村が口を開く。

「貴方達五人は、この屋敷の雑務をやって頂きます。玖狼様がここで客人として過ごされる間、この屋敷の自炊や掃除をやって頂きます。もちろんこの屋敷以外での雑務、情報収集なんかも仕事に入りますので、休んでいる暇はありません」

雪村は淡々と他の四人に仕事内容の伝達を行う。四人も昌虎と同じ気持ちらしく、顔つきは真剣そのもので、雪村の話に集中していた。

雪村の説得に玖狼の出番はなかった。

彼は意識が戻るとすぐに状況を察したらしく、脇差を抜き腹に当てようとした。

しかしそこで止めに入ったのは密だった。彼女は雪村の手を取りひねり上げ、耳元で何かを囁いた様だった。そして雪村は顔を赤ら

め、下を向いたまま玖狼に向かつて一礼をしたのだった。

その後、正式に幸隆から命を下され、今こうしている。一体何を密に吹き込まれたのだろうか？ 何を言われたのか雪村に聞いてみたい気もしたが、まだお互いのことを知らなさ過ぎるし、デリカシーの無い奴とも思われたくないので止めておく。

雪村は物分りの良い、素直な少年だった。玖狼はこの少年に、命についての考えを述べた。どうか自分の命をそのように粗末に扱って欲しくない事を、そして残された者がどんなに苦しく辛い思いをするかを。

雪村は玖狼の考えに共感できたらしく、目に涙を浮かべそれを堪えるように玖狼を見て、頭を下げた。その後一言、「感服いたしました」といって暫く頭を下げてたまだった。

玖狼が意識を雪村達に戻すと、雪村の説明は終わったらしく、五人の部下達は一齐に各担当の仕事場へと移動して行った。雪村は一度自分の屋敷に戻り、この屋敷で暮らす準備をしてくると、一礼して部屋を後にした。

一人になった部屋で、玖狼は両腕を伸ばし、仰向けに倒れこむ。玖狼が客人として過ごすこの屋敷は、外廊下越しに凜の部屋と繋がっており、なにかあれば直ぐに駆けつけられるようになっていいる。まさか客人一人に十人くらいが余裕で住める屋敷を手配するとは、玖狼自身、思っていなかった。

まあ実質、この屋敷にはこれから密と雪村、昌虎達が一緒に暮らすのである程度は賑やかになるのだろうか。

天井を見つめ、また伸びをする。

なんとかこれで一段落した。出来る限りの事をして、とりあえずなんとかなった。

自分がいた世界ではまず考えられないが、どうにかなった。

玖狼は小さい頃に父の言った一言を思い出しポツリと呟く。

「逆転手は必ず負けちゃ駄目な時に、か」

逆転手は無かったが、負けられない出来事の連続だった。

密との出会い、昌虎達との戦い、そして雪村との御前試合。すべてにおいて、負けは許されなかったと思った。

玖狼はそのまま意識を落としていく。

これから先、もつと敗北が許されない状況が続くのだろうか？

譲れないモノが出てくるのだろうか？

今はもうこれ以上深く考えたくなかった。

心のどこか奥の方が語りかけている。

玖狼の遠のく意識はそれに耳を傾けなかった。

心の奥のそれは呟いていた……。

そう、マケテハイケナカッタダ。

でも、カツテモイケナカッタダ。

## 1・7 顔合わせ（後書き）

どうも、結倉です。

ここまで拙作を読んでいただき、ありがとうございます。

今週は週末にまた更新予定するつもりです。

どうか最後までお付き合いの程、よろしくお願いします。

空は快晴、空気は澄み、川のせせらぎと鳥の鳴き声が気持ちよい音楽のように聞こえる。

玖狼がこの世界にやってきて、一週間が経った。

この世界の環境に最初は戸惑ったが、なんとかなつた。凜や密が手助けしてくれたし、礼儀作法は雪村に指導してもらい、粗相の無い振る舞いを覚えた。

ここは甲斐の国、春日家の領地である。

ここより西に行けば玖狼がタイムスリップしてきた野池があり、その更に西は植村家という領土らしく、南には北条家、北と東は上杉家と隣接しているらしい。

そして、この春日家は四方を敵に囲まれた小国だと言うことも分かった。

元々は植村家と春日家は桜城家の重臣だったらしく、桜城家が上杉、北条両連合軍に滅ぼされた際、桜城家の意思を継ぎ、残された領地の東を春日家、西を植村家で分割し、同盟関係を持って外敵から身を守ってきた。

だが、ここ最近では両家の仲があまり良好でないらしい。原因は分からないが、植村家と春日家の間に、なにかあった事は間違いないらしい。これは昌虎と、その部下四人に情報を集めてもらった。

玖狼個人はそのような事情はどうでもいいが、この世界の情勢は知っておいて損はしない。凜と玖狼に降りかかる危険は、なるべくなら回避していきたいのだから。

今、玖狼は屋敷の中庭で雪村と稽古をしていた。二人は互いに木刀を持って、打ち稽古に勤しんでいた。

雪村はあの御前試合から、しょっちゅう玖狼に稽古をつけてもらっていたがっている。まるで、兄や父に教えを請うような目をして、玖狼に要求してくる。



玖狼自身も体を鈍らせたわけではないので、いい稽古相手と思い、快くそれを受けている。

屋敷の縁側では凧と密がお茶を啜りながらこちらを見ている。桜色の綺麗な着物を着たお姫様は、その着物が霞んで見えるほどに可愛らしい。大きい蒼い目、腰の辺りまでのびたカラメル色の髪は、日差しに反射して一層美しく見える。

雪村の打ち込みを受けながら、じっと凧を見ていると、目が合う。凧は少し頬をあかくして、小さく微笑みかける。

この笑顔は少し反則に近いなと思いつつ、玖狼も笑顔でそれに応える。

その笑顔を向けると同時に、腹部に強烈な衝撃を受ける。

意識を前に向けると、雪村の木刀が玖狼の腹を直撃していた。意識が凧の方に向きすぎて、雪村の突きを受け切れなかったのだ。

玖狼は腹を抱えて倒れこむ。

そんな玖狼に雪村が慌て、駆け寄る。

「玖狼様！大丈夫ですか！」

「う……うん、だ……い……じょうぶ」

なんとか片手をあげて応える。

凧も慌てて玖狼の元に寄り、玖狼の背中に手を当てて心配そうにしている。玖狼は痛みに歪んだ顔を無理やり笑顔に矯正し、凧に「だいじょうぶだよ」と語りかける。

縁側では湯呑みを持ったまま、密がカラカラと笑っている。

「あんまり姫様ばかり見ているからだ。いくらお美しいからといって、稽古の最中によそ見をするなんてお前は馬鹿だなあ」

「やっかましい」

反論も無く、こんなチンケな言葉しか発生できない。

この女を相手にしていると、姉を相手にしている気分になってくる。

しかし、この忍び装束のニヤケタ女も姫様と同じで美しい。

後ろでまとめられた髪は漆黒で艶やか、いつもは吊り上がった紅

い目は笑うと優しい感じになり、とても魅力的になる。凜とは美しさの質が異なるが、この女も十分に綺麗である。

姉の静香と同じで黙っていればいいのに、と心底思う。

「しかし本当に大丈夫ですか？」

不安そうに聞き返してくる少年は、まだ幼いながらも凄腕の腕前だ。

春日家では一、二を争うほどの実力でありながら、服装もきちんとしており、礼儀正しい。

学校でいうと、文武両道の優等生といったところであろう。

玖狼は立ち上がりまだ幼さの残る少年を見て言う。

「いてて、なかなか鋭い一撃だった。いい勉強になったよ。油断大敵、よそ見厳禁だね」

その一言を聞いて、密が一層カラカラ笑う。

「あつはは。これじゃあどっちが稽古をつけているのかわからないなあ」

玖狼は恨めしそうに密を見る。

そんな玖狼を気にせず密は笑い続ける。

「みつちゃん、玖狼がかわいそうではないですか」

凜が慌てながらフォローにはしる。

『かわいそう』、その言葉が玖狼の心に重くのしかかる。

本日止めの一撃だ。肉体的ではなく精神的にKOだった。

「姫様、さすがです！」

密は玖狼の表情からそれを察したらしく、笑いが止まらないようだ。

止めを刺した張本人は意味を理解できていないらしく、首をかしげ、密にどういふことか確認をとろうとしている。

しかし、こういふ雰囲気は嫌いでない。気心の知れた、信用の出来る人達との暮らしは穏やかで心地の良いものだった。

凜と密とはあれから何度か話をして、雪村や昌虎には玖狼が違う世界からやって来た事は伏せておくことにした。

摩訶不思議な情報の流出は避けたほうがいいとの判断である。もちろん雪村達がそれを外部に漏らすことなど、玖狼はありえないと思っている。

「それでは私はこれで失礼致します。ご教授ありがとうございました」

雪村が申し訳なさそうな顔で一礼して、踵を返す。

玖狼は片手を挙げてそれにかえした。

「師匠が弱いと部下は気を使って大変だな」

ようやくカラカラとした笑いがおさまってきた密が、腹を痛そうに抱えながら言う。

「本当にやかましい奴だな」

「油断する貴様が悪いからじゃないか」

「くうっ……」

先ほどと同じ事を言われて、また唸る。

一週間が経ち、ここの人達とも上手くコミュニケーションがとれてきた。

密と凜は今のようなおどけた会話も出来るようになり、昌虎や雪村とも稽古を通じ、徐々にだが打ち解けてきている。

玖狼自身、段々とこの世界に慣れてき始めている。だが、それと同時に自分のいた世界の事も気になっている機会が減っているのも確かだ。

静香はどうしているだろうか、かなり心配しているだろうか、それとも怒っているだろうか、と考えてしまう。いずれにしても、帰ったらシバかれることも覚悟しておかないといけない。そんな事をふと考えては諦めていく。

考えたところで意図的にタイムスリップなど、出来るはずもない。今はこの世界で一生懸命生き延びるだけだ。生きていればどうにかなるかもしれない、もしかしたら帰れるかもしれない。

唸りながらもこんな事を考えてしまっている自分に苦笑する。

「こら、みつちゃん、玖狼に失礼ではありませんか」

「これは失礼しました。以後気をつけます」

密は涙目を拭いながら、反省のない声色で返事をする。

「凜、こいつは全く反省していないぞ。俺が同じような失敗をしたら、絶対また笑う。まあ、俺も密がなにかやらかしたら盛大に笑ってやるけどな」

「私はお前のような失敗はやらないぞ」

「どうだか。密の言うことは嘘と本当が半分半分だからな」

「そんな事はないぞ。私がいつ嘘などついた」

頬を少し膨らまし気味に反論してくる。

雪村の技量の見極めや、幸隆とのやりとりの件で、かなり足を引っ張られた玖狼だが、密はそれに気付いていなかったようだ。

こいつはかなり空気の読めない女だ。

「お前、もう少し場の空気を読む方法を学んだほうがいいぞ」

玖狼は目を細めて密に自覚を促すが、当の本人はやはり気付いていないらしく、首を傾げたままになっている。

「まあみっちゃんの場合は思ったことを一直線に言うところがあるけど、それは相手を思って言っているのですよ」

凜がフォローを入れる。密は腕組して「そうだそうだ」と頷く。

「まあ確かに悪気というか、そういう類のものは感じないけどさ、ほら状況判断とか相手の技量の把握とか、忍としてそれはきちんと言えてないとやっぱりまずくないか？」

玖狼が言いたい事が凜にははつきりと分かったらしく、諦めた笑顔でそれに応える。

さすがに密も玖狼の意図が理解できたようだ。

過去にも同様の失態をやらかしていたらしく、顔を真っ赤にして俯いてしまっていた。そして、密の握りこぶしが玖狼に飛んできた。「つつ！」

玖狼は思いのよらない攻撃を、モロに顔面に受けて倒れこむ。

「わるかったなあああ！ 空気も読めず余計な一言を言ってえ！

相手の技量も計れなくてさあ！ どうせわたしは忍しっかくだよお

お！」

密はそう言いながら、両手で顔を隠し、走り去ってしまった。後には顔を手で覆った玖狼と、苦笑いを浮かべた凜が残された。

「しかし、ちよつと言い過ぎたかな。後で謝つとくべきだろうか」  
玖狼が頬を擦りながら呟く。

「そうですねえ。まあお互い様つて事でいいじゃないでしょうか。  
みっちゃんもそんなに気にしないですよ。玖狼が思っているより、  
みっちゃんは玖狼の事を信頼しているようですし」

「そうかなあ。いまいち実感ないよなあ。だって、会う時はいつも  
さつきみたいに言いあいになるし」

「喧嘩するほど仲がいいんですよね」

「本当かよ」

「本当ですよ。それに私、この空気好きですよ。和やかで穏やかな  
日常が。そう、ずっとこのまま続けばいいのに」

凜は笑顔で言う。

「玖狼がいて、みっちゃんがいて、雪村殿や昌虎さんもいて。皆で  
一緒におしゃべりして、食事して、こんなに楽しいことは久しぶり  
です」

「そうだな。俺も皆といると楽しいな。近所の人もわざわざ野菜や  
西瓜を持ってきてくれるし。ホント、ここの国の人達はいいい人ばか  
りだ」

玖狼も笑顔で返す。

「俺、ここでやっていけるか正直今も不安だけど、凜がいて俺をい  
ろいろ助けてくれる。密や雪村それに昌さん達も。俺、凜を守って  
やるって約束したけど、今はなんか逆の立場だよなあ……」

「そんなことはありませんよ。私も玖狼の役に立ちたいのです。そ  
れに玖狼は私との約束をちゃんと守ってくれたではないですか。皆  
を不幸にさせないやり方で、きちんとやり遂げたではないですか」

凜は頬を朱らめながら、しかしはつきりとした主張をする。

「私は玖狼が約束を守ってくれて嬉しかった」

「俺は自分の為にやったことだよ。俺がこの時代でやっていくには凜の助けが必要だったし」

「それでも玖狼が私を救ってくれたのは変わらない。それに雪村殿や昌虎さん達の御命も救ってくれたではないですか」

「いやあ、雪村と昌さんの助命嘆願は単に人が死ぬなんて、嫌なことだし……、それに昌さんなんか凜を最初は人買いに売ろうとしたんだぜ。そんな人間助けるなんて、普通変だろう」

「でもそんな人達でも、玖狼は救ったではないですか。私はその心が嬉しい」

「まあ、どんな人でも死んじゃうのはいい気分しないしさ。それにもう知っている人がいなくなるのは勘弁して欲しいだけなんだ」

頭を掻きながら言う。凜は優しげな細い目を玖狼に向けている。

まるで自分の気持ちを理解してくれているようで、心の奥がこそばゆかった。

「ただの自己満足だよ」

玖狼は凜の視線に耐え切れず、上を向いてそう呟いた。天を仰ぐ玖狼を見た凜の目は輝きを増していた。横目で凜をちらちらと見ながら言う。

「なんだよ。なんかおかしいか？」

「いえ、なにもおかしくありませんよ」

「じゃあなんでそんなにニヤニヤしてるんだよ。密や姉さんじゃあるまいし……」

「いえ、玖狼が本当に優しくして、一緒にいるとつい頬が綻んでしまいます。私も玖狼のようにありたいと思えて」

「ふーん、俺のようにねえ」

「はい。私はこの世界の在り方に納得が出来ていませんでした。母は父と出会って、恋をして一緒になったと聞きました。」

「ふーん」

気のない声で返すと凜は続けて言う。

「母は前に言ったように、遠い所からこの国にやってきて父と出会

い、恋をして私が生まれたそうです。ただ、母のような状況は極めて珍しいんですよ。この世界では夫婦になる相手は、本人の意思なんて関係ないんです。誰かが勝手に決めて、押し付ける……。私の場合もそうです。後一年もすれば知らない人と結婚して、後は子を産み、老いるだけ。父と母は私の意思を極力尊重してくれて、私はあの頃が一番幸せでした。しかし父と母がいなくなってからは、もう自分の意思で自由に生きることが諦めていました」

なんとなく分かる。玖狼のいた時代の少し前までは、まだあった習慣だ。出会いも分かかれも、自分の意思では決められなかった。特に女性はそうだっただろうと思う。

「俺はそんなこと今まで考えた事もなかったよ。自分の事は自分で決める事が当たり前だったから」

玖狼は幼い時に両親を亡くしてからは、姉に迷惑をかけないよう自分で出来ることは自分でやってきた。

「そうなんです。玖狼は自分の歩く道を自分で決めている。私にはそんな玖狼がとても眩しく見えるのです。そして玖狼の選択する道はいつも私の思っている事と似ていて……。わ、私も玖狼のようになりたいとまた思うように……」

凜は少し恥ずかしげな顔になり、言葉に詰まる。上手く言葉に出来ないようだ。そんな凜を見ながら語りかける。

「俺のようになることはないよ。凜は凜だ。君になればいい。少なくとも俺の前では自分の言いたいことは言えるし、我儘だって言っていいんだ。俺は凜が困っていれば協力するさ。友達だろ？」

「友達？」

ポケっとした顔で凜が聞き返す

「そう、友達。友達が困った時や悩んでいる時は相談に乗って、手伝ってやるんだ。友達が哀しい時は一緒に悲しんで、楽しい時は一緒に笑うんだ」

玖狼の言葉を聞いた凜は目筋に涙を浮かべながら笑顔で頷いた。哀しい涙でないことはもちろん分かる。

「はい、友達です。ありがとう玖狼。私、今幸せです」  
玖狼は笑顔で言う。

「うん、幸せな時は笑顔になるんだよな」  
父と母がいた時に感じた暖かくて懐かしい、本当に幸せな一時だった。



## 1 - 8 日常（後書き）

どうも、結倉です。

なんとか週末更新に間に合いました。

駄文、ミスが目立つかもしれませんが

そこは御指摘頂ければ幸いです。

感想欄でもメールでも構いませんので、

御指摘、御意見ありましたら遠慮なくお願いいたします。

いつもキツク見えるその目じりが、一層細くなる。ただでさえ厳格そうに見えるその風体が、さらに人を寄せ付けない空気を作ってしまったっている。

幸隆はあくらを組み、頬杖をついている。

ここ最近、西の動向が読めない。

同盟国である植村から、幸隆に要求書が届けられてきたのは三日前の事だった。幸隆は内容を見て愕然とした。

この内容はとても呑める条件ではないし、返答いかんによっては植村との戦いは避けられない。最低でも、同盟関係が崩壊するのは確実と思われる。

恐らく植村はこの書状を幸隆に出したと同時に、もしくは出す前に上杉・北条への同盟締結の使者を飛ばしているに違いない。

しかし幸隆は植村がこんなにも急に手のひらを返すように、強硬な態度がとれたのか、不思議だった。

すぐに植村の領地に密偵を放ち、情報の収集に努め、今日その報告書が手元に来たのだ。その内容に驚愕する。植村の国力は春日の四倍を超えるほどに豊かになっていったのだった。

兵数は三倍、兵糧は四倍、軍馬は二倍、いずれも春日を上回り、北の上杉や南の北条とも互角に戦えるだけの国力を持つまでに成長していたのだ。そして最後の欄をみて驚きが絶望に変わる。その欄にはこう記されている。鉄砲二千丁 と。

「この数字に誤りはないのだな」

幸隆に聞かれた家老が返答する。

「はっ、間違いありません。植村の国力はここ二、三ヶ月で急速に増大しております」

「そうか、分かった。下がってよい」

幸隆に一礼し、家老は部屋を出る。

「まずいな……、このままでは戦争は避けられない。そして勝てる見込みは無い……か」

幸隆は頭の中で現在の状況と条件を刷り合わせ、答えを出そうとする。

恐らく、上杉・北条に援軍の使者を出しても断られるだけだろう。すでにこの二つの勢力には、植村の息がかかっていると見ておいたほうが良い。一応使者は出しておくが、援軍は無いと考えておく。

次に軍備の差だ。向こうはこちらを上回る武器と兵力を持っている。まともにやりあえば、結果は火を見るより明らかである。しかも鉄砲というものが厄介だ。これのせいで弓も騎馬隊も戦場では役に立たない。射程は弓より遠く、馬が突っ込むよりも鉛球が先に騎馬隊の身体に突っ込んでくる。

これが二千丁……。戦の当日に雨でも降らなければ、春日の兵三千は一時間も持たず全滅してしまうだろう。ならばこちらも鉄砲で応戦すればいいのだが、鉄砲はとても高価で春日では百丁程度しか無い。

一体どうして、このような高価な物が二千丁も用意できたのだろうか。財源を調べる為に送った間者は一人も戻ってこなかった。

植村は莫大な財産を得られる何かを手に入れたのだろう。そしてそれがある限り、国力の増大は止まらないのだろう。

しかし、その財源を探し出し抑える時間はもう残っていない。返答は今日出さなければいけないのだ。そして答えは何度言われても決まっている。植村の書状に目を通す。そして呟く。

「凜を、甲斐の象徴であるあの娘を渡せるものかっ！」

幸隆の漆黒の怒りの目が東方へ向けられる。

「凜は私の妻になる女だ。植村など愚劣な者に奪われるわけにはいかん」

幸隆は拳を叩きつけ、従者を叱りつける様に言う。

「凜を！凜をここに呼べ！」



「しかし、旦那もあつしとかわりませんなあ」

昌虎が豪快に笑いながら、茶わんに注がれた酒を飲み干す。

その日の夜、玖狼はいつもと同じように昌虎達と雑談をしていた。

「油断しているところに一本貰っちゃたんだよ」

玖狼が頭を搔きながら、申し訳なさそうに言う。

「それでもあつしはもう、旦那と手合わせする気は毛頭ないですぜ。

旦那の腕は、あつしなんか足元どころか、小指にも及びませんわ」

「流石にそんな事はないと思うけどな」

「いやあ、本当ですぜ。なあ源、才蔵」

「へえ」

「全く、あの強さは化物ですよ」

顎ひげの男と細い目をしたキツネ顔の男が言う。源と呼ばれた顎

ひげの男は昌虎の双子の弟、源次郎で昌虎と瓜二つの顔をしている。

並んでいると見分けがつかないので、玖狼は口ひげで判断してい

る。昌虎は口の周りにヒゲを蓄えていて、源次郎は顎にヒゲを蓄え

ている。

そして才蔵と呼ばれた、年は玖狼と同じくらいに見えるキツネ顔

の男は、足が速く持久力もあり、主に情報収集役をやってもらって

いる。この国の情勢や他国との関係は大方この才蔵から教えてもら

った。

「お頭も十分に強いんですがねえ。それでも旦那には俺も一撃で伸

されちまったしなあ。流石にお頭でも稽古の際、俺を一撃で仕留め

るなんて事は無かったですからねえ」

腕組をしながら同意するのは小鉄。主に巻き割りや荷物の搬出入

等の力仕事を担当していて、暑くなつたこの季節から常に上半身は

裸で行動している。力仕事を任されているだけあって、上半身を見

るだけでもかなりのマッスルマンである。

「うんうん。密姐さんなんかは、今でも恐ろしいよ……」

「まあ太一はそうだよなあ。木で縛り上げられた拳句、強烈な尋問を受けたんだからよ」

才蔵が笑いながら言う。

「洒落にならなかつたんすよう。本当笑えないです……」

太一と呼ばれた才蔵の隣にいる、童顔の優男は引きつった顔をして、チビチビと少しづつ酒を口に含んでいる。太一は才蔵と同じ情報収集を担当している。才蔵との間柄は先輩と後輩といった感じがよくあっている。

「しかし雪村様も中々の腕だなあ」

「うんうん、今日も旦那に一発かましてましたしねえ」

昌虎と源次郎が言う。

「確かにここ春日において一、二を争うと言われる武術の腕前だ」

「そう考えると、少数精鋭ながら俺たちの部隊は、春日でも最強の部隊に入るんじゃないんですかねえ。旦那に密姉さん、それに雪村様とお頭、中々そろそろ面子でもないですぜ」

太一と才蔵が会話に加わる。二人は若いせいか、とんでもないことを口走る。

「馬鹿野郎、それはあくまで数が同じならって話だな。いくら旦那や俺達が頑張っても数が多ければ、とてもじゃないが勝ち目はねえぞ。それに出過ぎた力は最初に狙われ易いんだぜ、敵にも味方にもな」

昌虎が徳利を口につけながら忠告する。

しかし玖狼は思う。

腕の立つ玖狼と雪村がいて、情報収集を行える才蔵と太一、力仕事は全般にこなせる小鉄、世間の情勢に敏感に反応して上の身分の常識から下までの常識まで精通している昌虎、源次郎兄弟。

そして腕も立ち、情報収集も出来る、オールマイティな存在である密、なかなか探して揃えようと思っても出来ない面子だろう。

確かに野に下っても、自力で何とかできるだけの能力は十分過ぎ

るくらいにあるだろう。しかし玖狼がその決断をした場合、密と雪村は絶対に付いては来ないだろう。

玖狼が頭の中でありえない想像をしていると、廊下をバタバタと走ってくる音が聞こえた。

「この音は密姐さんですねえ」

才蔵が言う。この屋敷でこのように音を激しく立てて歩いてくるのは、あの女くらいだ。

忍びのクセに。

すると、そのバタバタがより早くなり、玖狼たちのいる部屋の襖が勢いよく開いた。そして肩で息をしながら、密は背筋の凍るような事を口にした。

「玖狼、逃げる」

いきなりの言葉に目が点になる。続けて密は言う。

「ここは今から戦場になる。恐らく二、三日後だ。隣国の植村が攻めてくるそうだが、数はこちらの三倍はある、どう考えても勝ち目はない戦だ」

密は肩で息をしながら青ざめた顔をしている。この表情から、事態が深刻な状況であることが分かる。

「えっと、なにか？ 逃げろって？ 凜の護衛を辞めて？」

「そうだ」

呆然としたまま聞き返した玖狼に、密は答える。先ほど考えていたことが現実になり始めている事に動揺するが、玖狼自身その選択をするつもりはない。

「なぜだ？ 俺は凜を守るって約束したんだ。戦争になるのなら俺は凜を守る」

「しかしこれは姫様が決めたことだ。私の本意ではないのだ……。私としても、貴様にはぜひ留まって欲しいと思っている……。だが、それで貴様が危険に晒されるのを姫様は恐れているのだ。私だって貴様がいなくなるのは寂しい、だからといって、貴様がそこまで私達の事情に振り回されることはない。貴様には自由に生きる権利が

まだある。せめて貴様だけでも、という姫様の配慮だと思ってくれ……」

そういう密の紅い目が少し揺れていて、本当に玖狼との別れを悲しんでいるように思えた。

しかしその気持ちに伝えてやるつもりは毛頭ない。

「おい、それは、さっきの事は本当に凧が言っただんな？」

玖狼は腰を上げながら言う。

「ああ、そうだ」

「凧は何処にいる？」

「今はお部屋にいらっしやる」

「そうか」

そう言うと、玖狼はずかずかと部屋を出て行ってしまった。

部屋に残された昌虎達はあまりの唐突なやり取りにポカンとしたまま固まっていた。

太一がボソリと言う。

「俺達どうなるんでしょうかねえ……」

徳利を口につけたまま、昌虎が答える。

「さあ……どうなるんだろうなあ」

廊下に出ると、やや早歩きで凧の部屋へ向かう。

(どうして、どうしてなんだ?)

自問自答を繰り返しながら、今までの事を振り返る。あの笑顔、言葉、どれをとっても凧は玖狼にそんな事はもう言わないと思っていた。

失う怖さを知っているからこそ、大切な人を守りたいと思う気持ち分かる。しかし、それでも玖狼は凧を助けると約束したのだ。その約束に、凧は今までに玖狼が見たことがないような眩しい笑顔で応えてくれたのだ。



(なのはどうして)

何がどうなっただらそんな事になるのか、玖狼には分からなかった。だから直接、凜と話す必要があった。

玖狼は凜の部屋の前に来ると襖をたたく。

「俺、玖狼だ」

「どうぞお入りください」

中から落ち着いた声が響いた。

玖狼はその声に苛立ちを感じながら襖を開ける。

すると凜は正座して、玖狼を待っていた。玖狼がここに来ることが分かっていたかのように。

「どういう事なんだ？」

「みっちゃんか伝えたとおりです。私の護衛をする必要がなくなっただからですよ」

本当に感情のこもっていない声で言う。

「それは春日と植村で戦争が起こるからか？ それで春日が減ぶからなのか？ 俺はお前を助けるって 約束したんだ。その約束を破る気はない、だからここを出て行く気はないぞ」

「その可能性もありますね。ですがもうこれ以上玖狼にご迷惑をかける訳にはいきません。私はもう自由にはなれないのですから」

「だからってなんでそうなるんだよ。俺にはさっぱりだ！ なんにもわかりやしない、何があっただよ？」

「そのまんまだよ。姫様は本当に自由じゃなくなっただよ」

声のした方を振り返ると、密が立っていた。

「密……」

「今回植村の目的は何か分かるか？ この春日の領地を狙う目的だ」  
玖狼は首を振る。

「簡単に説明してやるからよく聞け。私も本当は貴様に話したくはなかったんだが、恐らくこういう展開になることは想像できた。そしてこの話を聞いたら、素直にここから立ち去ってくれ」

「それは俺が話を聞いて決めることだ」

密は少し哀しい目をして凜を見る。凜は黙つたまま密に向かつて頷いた。

それを話の許可と取つたらしく密は説明を始めた。

「元々春日と植村は桜城家に仕える家臣だった」

「それは俺も知っている。桜城家が滅んだ時に分裂したんだろ」

密は頷きながら続ける。

「ああ、そして春日と植村は常に同盟状態として、外敵から家を守つてきた。しかし今回、植村が今までの友好的な態度から一転して春日に降伏を勧告してきた」

「なぜなんだ？ だつて春日は同盟国だし、そんなことをして植村にとつて良い事だとは思えない。春日を滅ぼしてしまつては、外敵からの攻撃に対しても対応出来なくなるんじゃないか？ わざわざ危険を冒してまで、戦争をする理由がないじゃないか」

本当になぜか玖狼にはわからなかった。植村と春日の関係は才蔵に調べてもらつていたので、おおまかな情報は知つていた。だからといって、戦争になるとは到底思えない。

今まで仲良く手を取り合つて来たものが、その手のひらを返すような行為に及ぶなど、玖狼には考えられなかった。

「しかし、植村は春日の知らないところで密かに国力を上げていた。そして、その国力の上昇を短期間でやつていたのだ。なぜ短期間で春日の三倍以上の国力をつけたのかはまだ分かつてはいないが、植村が強大な国力をつけたのは事実だ」

玖狼の背筋に冷や汗が流れる。確かに兵力は絶対だ、多ければ力押しであつという間に春日は滅んでしまうかもしれない。

「そしてその国力を背景に、植村は春日に降伏を勧告してきたのだ。そしてその条件の中にもどうしても呑めぬ項目があつたのだ」

「それは？」

「姫様だ」

密は齒を食いしばりながら言う。

「姫様はこの辺一体の象徴だ。内密な話だが、姫様は桜城家の血筋

を引いているんだ。そして桜城家は甲斐、信濃では神様の化身と呼ばれるほど、崇められているのだ。その象徴にして唯一の生き残りである姫様を、植村は欲しがっているのだ」

密は紅い目をさらに赤くし、拳を作りながら話し続ける。

「植村にはちょうど姫様と同じくらいの年になる、阿呆な嫡男がいるんだ。恐らく植村の当主はその阿呆な嫡男の嫁に姫様を、と考えているはずだ」

「っ！」

玖狼は言葉に詰まった。これは以前、凜から聞いた政略結婚というものだ。当然いずれは凜もそのような国同士の政略結婚に巻き込まれる可能性は感じていたが、現実味を帯びてくると、嫌悪感が堪らない。

そしてこの政略結婚と言うよりむしろ略奪婚に近い要求は、玖狼が領主の立場でも絶対にイエスとは言えない。

「そして当然、幸隆様もこの条件を退けられた」

「そうだろう。俺でもこんな要求には反吐がでる。俺なら戦う、勝ち目がないのなら、さっさと凜を連れて逃げる」

密が肩を少し落として、困った顔をする。

「そうだろう？ 逃げてしまえばいいじゃないか。何にも縛られずに自由にさ」

両手を広げ相槌を求める。が、玖狼の要求には誰一人として答えない。

「貴様、今私がどれほどそれをしたいか分かって言っているのか？」

玖狼は違和感を感じながらも言う。

「そう思っているなら、やればいいじゃないか。俺も協力する。何で駄目なんだ？」

「貴様はもう少し頭の切れる奴かと思っていた。そこまで思慮が浅はかだとは幻滅だ。じゃあ聞くが姫様は今何処の姫様だ？ 春日家の姫様だ。なぜ春日の姫様と呼ばれているか分かるか？ 結婚もしていないのに、だ。普通なら桜城のお姫様だ！ お前にその意味が

分かるのか！」

密に怒鳴られて、初めて自分の愚かさに気付く。

凜は玖狼に話した時も、自分は春日の姫としてお世話になってい  
る、と言っていたことを思い出す。そうになると、答えはおのずと判  
明した。

「そうか、凜は春日幸隆の嫁になるために、この春日家にいたんだ  
な。そしてその結婚はもう最近まで迫っていた。もしくはこの状況  
で早まったのか。そして植村としてはその結婚が面白くない、とい  
うかむしろその結婚をぶち壊し、あわよくば凜を自分達のモノにし  
てしまいたい」

密はため息にもとれる相槌をしながら言う。

「そうだ、大体あっている。植村としては春日の結婚は阻止したい。  
そうしなければ、植村の家臣の中にも桜城の威光から、従わない者  
が出る可能性が多い。だから姫様と幸隆様が婚儀を挙げる前に、な  
んとしても春日を潰してしまいたいのだ。『姫を差し出せ、この条  
件がのめぬ場合、植村は春日を攻める所存』とな。幸隆様はこれを  
退け、姫様との婚儀を至急進めるおつもりだ。私も以前だが、浅は  
かにも姫様に逃げるように進言したんだが、姫様はそれを許しはし  
なかったよ」

密は凜に目を落とす。凜は哀しげな笑みを玖狼に向けて言う。

「私が逃げれば春日と植村は間違いなく戦争になります。そうなれ  
ば無関係な人達の血が流れてしまいます。私はそれが嫌なのです」  
「しかし、幸隆様が姫様を差し出す事は絶対にありえませんが、なら  
ば逃げてしまわれたほうが……」

密の段々と消え入るような声で言う。何度も言った言葉なのだろ  
う、そして何度も拒否されたのだろう。

「じゃあ、このまま戦争になるのを待つしかないのか？」

「だからお前達だけでも逃げると言っているのだ。私と雪村は姫様  
を守り、戦う」

玖狼は心の奥底で腹立たしい何かを感じていた。握った拳は振る

え、歯を喰いしばつてもその感情は抑え切れなかった。

「ふざけるな！」

感情の堰が切れた。

「逃げるだと？ 俺がお前や凜を捨てて逃げると思っただのか？ 逃げるなら凜も密も雪村達も一緒だ！ 俺はお前等が死んでいくのが分かってるのに、ホイホイとその場を逃げ出すようなアホじゃない！ 俺だけ逃げたら、絶対後悔するんだよ！ 俺はもう二度と大事な人を失いたくないんだ！」

密の釣りあがった紅い目と、凜の蒼い目が丸くなる。明らかに玖狼の態度に驚いている。

大声を張り上げて肩で息をしながら、続けて言う。

「俺は戦争には参加しない、そんな欲望だらけの戦争なんか反吐が出るだけだ。でも凜が困っているのなら、俺は凜の手助けをする。俺はそんな個人的な思いやりとか、遠慮とかじゃなくて凜、お前の本音が聞きたいんだよ。前に俺に話してくれたように、お前の我儘が聞きたいんだよ！ 自由に、縛られずに、自分で決めて生きていきたいんだらう？」

玖狼は凜を睨む。いつもは穏やかで優しい玖狼の眼は激しく怒っていた。

「私は、私は戦争など反対です。人が騙し、憎しみ合うのは嫌です。私は笑って生きたい、でもこの世界が……私にそういう生き方をさせてはくれないのです……」

凜は肩を落とし頬からは涙が伝っていた。

「では玖狼に聞きます。私はどうすればいいのでしょうか？ 結婚なんかしたくないです。姫なんかになりたくないです。平和で争いのない、そんな世界で、笑って過ごしたいのです……。でも私がそれを願うことで、大勢の何も知らない人々が死んでいくなんで、私には耐えられません！ ねえ……、どうすればいいの？」

凜に投げつけられた質問に対し、玖狼は何も応えられなかった。本音を語ったところで、貴方にはどうすることもできないでしょ

う？ そんな事を言われたような気分だった。

自分の人生は自分で決める、玖狼には当たり前前の権利だった。しかし目の前の人形の様な姫様にはそんな権利が無かった。

よく親に敷かれたレールの上を歩くのが嫌で、とか何とか言う同級生達もいたが、玖狼はその考えに共感できなかった。その人を想い、レールを敷いてくれる人がいるだけありがたいと思わないのか、と思った。

玖狼は姉と二人で自分達のレールを敷き、脱線しそうな時は二人でカバーし合い、乗り越えてきた。どちらが良いのかという結論は人それぞれだと思っっているのだが、同級生達は学校を卒業すれば、玖狼達のように新しいレールを自分達で考え、作り始めてその苦勞を知り、その上を走っていくだろう。

凜の場合、春日家に来た時には既に脱線すらできない、強固なレールが組みあがっていて、後は死ぬまでその作られたレールの上を走っていかねければならなかったようだ。それはそれで、苦痛以外のなものでもないのかもしれない。

玖狼が何も言わずにいると、凜はスツと立ち上がり、奥の寢所へと消えていった。密は目を閉じて腕組し、壁にもたれかかったままだった。

暫く無言の時間が続き、密が部屋を出ようとした時、玖狼は口を開いた。

「凜は自分のせいで大勢の人が死ぬのが嫌だと」

「そうだな。お優しい方だ」

「戦争を止めさせる方法はない」

「ああ」

「でもそれは現状で、だろ？」

「そうだ」

「戦争は後二、三日で始まってしまっ」

「早く立ち去るんだな」

「まだ時間はあるって事だよな？」

密が目を丸くする。

「貴様は何を言っているんだ？」

「まだ、戦争を回避できる方法を考える時間があるって事だよ」

玖狼は密の横を通り過ぎながら部屋を出る。

「はあ？」

「俺は諦めない。あいつのレールなんか、俺がぶっ壊してやる！」

玖狼は右手を挙げて左右に振る。湊家独特の決意、了承の仕草だ。

その仕草を密は知らないので、口を尖らせ顔を傾けていた。

1 - 10 暗雲（後書き）

どうも、結倉です。

今日は一気に二話更新しました。

如何だったでしょうか？

次回からまた週一更新に戻りますが、

これからも玖狼達をよろしく願います！

ミスや御意見、質問は感想欄やメールで頂けると

幸いです。

作品の質の向上の為、是非とも御協力よろしく願います。



玖狼は自分の部屋に戻ると、酒盛りをしていた昌虎達を呼んだ。そして、先ほど凜の部屋で起きた事を説明した。

「と言う訳で、ここは後二、三日で戦場になるんだ。だから昌さん達はどこかへ逃げて欲しい」

玖狼が言つと、昌虎が鼻を指で掻きながら、少し怒気の入った声で言つ。

「旦那、それじゃあ春日の姫様と同じじゃあねえか？ あつしらは旦那に惚れてんでさあ。旦那が姫様救おうってんなら、あつしらだつて同じ気持ちでさあ。これ以上冗談言つと、怒りますぜ」

その言葉に胸の中が熱くなる。

「ごめん昌さん、でも俺は昌さん達が死ぬのは嫌なんだ。だから、危なくなつたら絶対逃げて。俺も自分が危険だと分かつたら逃げるから」

「わかりやした。おめえらもいいよな？」

昌虎に聞かれた他の四人も頷く。

「まだ両家の戦争には時間がある。なるべくなら戦争が起こらないような状況にもっていきたいんだ。なにか考えて対処できる方法はないかな？」

玖狼が聞く。すると才蔵と太一が顔を見合わせて、口を開く。

「旦那、あんまり大した情報じゃあないんですよ。国境のどこの市場で情報聞いても、植村は最近金払いがいいって話しか聞かねえんだ」

「旦那の話の中でも植村は国力がついてきたって言ってたでしょ？ 国力の増大って事は財源がしっかりしてるって事ですよね？」

腕組みしながら、源次郎が言つ。

「そうだな。元々国力はこの春日と同程度しかなかったが、最近軍備に力を入れてるって話は聞いてたからなあ」

「へえ、じゃあやつぱり金ですよね？」

徳利を抱えたまま、小鉄が問う。

「でもどこからその金が出てきているんだ？ 別に特産品があるわけでもないし、取引するようなものがあそこにはないんだぜ」

昌虎がそう切り出すと、才蔵が身を乗り出す。

「そこなんですよ。太一も俺も情報を集めるために、日頃からあちこち飛び回ってはいるじゃないですか。でも聞くのは金払いのいい植村って事だけで、その金がどっから出ているかは聞けないんですよ」

「俺も才蔵の兄貴も別に気にしていなかったから、探りは入れていないんですけどね。でも調べようにも……」

源次郎が暗い顔になる。

「未だ春日のお上でも調べられていない情報を、あつしらが調べるのは無理がありますぜ。確かに小回りや情報の速さにはあつしらが分がありやすが、調べる範囲は圧倒的に劣りますぜ。なにせウチは才蔵と太一しかいないんですからねえ」

「せめて調べる場所が分かればいいんですがねえ。場所が特定できれば、俺と太一でなら何とかなるのかも……」

「まあ、出来れば調査場所の人の配置とかも分かると、潜入が楽でいいですけどね」

才蔵と太一の話聞きながら、玖狼は引っかかるものを感じた。

「人の場所……、特定された場所」

考える。人の集まる場所、そこにはなにがあるのか……。なにか重要な事の気がしてならない。

「人……、特定……」

呟きながら頭の中からひねり出すように考える。

玖狼のいた時代なら、必要な情報はインターネットや情報誌で簡単に調べることが出来る。詳細な地形や設備の配置まで、宇宙から目を光らせる衛星がいる。

しかし、この時代にそんな便利なものは無い。どうやって、この

状況から正確な情報を集め、分析できるだろうか。

八方塞はっほうさいさかり。これがゲームならリセットすればいいのだが、そうもいかない。

焦燥感を落ち着かせるため、水の入った茶碗に手を伸ばそうとした、その時。

「そうか！ 特定した場所！ そこには何かがある！」

そう言つと、玖狼は立ち上がり走りだす。

行き先は密の寝所だった。

「おい！ 密、いるか？」

ノックもせず勢いよく襖を開ける。密はまだ起きていて、綺麗な朱色の櫛で髪を梳いていた。いつもの忍び装束ではなく、浴衣に着替えている。見慣れていない服装のせいか、玖狼は思わず目をそむけてしまう。

「どうした？ なにか用か？」

密に少し不機嫌そうな眼差しを向けられる。

「ああ、ちよつと聞きたいことがある。今、植村領地の地図と軍の配置が分かるか？」

照れを気付かれないように声を低くして言う。

「それならすぐに用意できる。なにせ近々始まる戦争に向けて、植村の軍の配備や情勢は調べる必要があつたからな」

「頼む、直ぐにそれを持って俺の部屋に来てくれないか？ 話したいことがある。もし俺の想像通りならこの争いは回避できるかもしれない」

密の紅い眼が釣りあがつた。

「貴様……、それは本当か？」

「上手くいく保障は無い。けど何もしないよりはマシだろ？」

「そうだな。では貴様の部屋へ行くとするか」

玖狼は密の言葉を聞くと部屋の外へ出ようとする。しかし密は一向に部屋から出ようとしない。不思議に思い密を見る。すると密は明らかに不機嫌そうな目を玖狼に向ける。訳が分からない。

「どうしたんだよ？ さつさと行くぞ」

あまりにも密が動こうとしないので促す。

「貴様は、貴様という奴は……私にこのような破廉恥な姿で、屋敷の中を歩き回れというのか……？」

そう言われて、玖狼は改めて密の姿を見る。

密は薄い浴衣姿で、いつもと違ってかなり露出の高い姿だった。

確かに密のスラリとしたスタイルと艶やかな黒髪、浴衣からはみ出ている太股と、整った顔立ちの色っぽく、改めて見ると思わず赤面してしまう。

「ご、ごめん。俺は先に部屋に戻ってるから、着替えたら来てくれ」

玖狼は来た時よりも勢いよく襖を閉めて、自分の部屋に戻った。

部屋に戻ると、才蔵と太一、小鉄が旅支度を整えて待っていた。

昌虎と源次郎は酒を酌み交わしている。

「何してんの？」

思わず聞いてしまう。

「何って旅支度ですよ。これから情報を集めるんでしょう？ なら早い方がいいじゃないですかねえ」

「そうそう、作戦が決まり次第、すぐに行動に移せるように」

才蔵達は玖狼が何か思いつき、情報収集を頼んでくると想像していたようだ。その心意気が玖狼には嬉しかった。しかし、それも密の持つてくる地図と情報次第だ。これが玖狼の想像通りでない、才蔵達を謀報に出すことは出来ない。十分くらい待つと、密がやってきた。いつもの露出の高い忍び装束に着替えていた。それを見て、浴衣と大差あるのかと思ってしまう。

「またせたな」

密は一言いうと、床に座り地図を広げる。

「これが植村領の地図だ。我が春日とはこの山脈が国境となっていて。我々のいる春日城はここ、国境の山脈から西におよそ徒歩一日ほどで到達できる。そして植村の主城である清定城がここ、国境から徒歩で二日ほどの距離になる」

密は春日城を指し、更におよそ真東である山脈の国境を指す。そして、その国境から更に南東にある清定城きよさだをなぞった。

「そして国境を越えるには必ず甲ヶ崎峽「こしがさき」を通らなければならない。この場所は深い崖に囲まれた場所だ。ここで上手く迎撃を取れるといいのだが」

密はそう言いながら、細い顎を手のひらの上に乗せる。やはり密の頭の中には徹底抗戦の文字が浮かんでいるのだろうか。

「で、軍の配備はどうなんだ？ 粗方つかめていいるんだろう？」

「ああ、まずは主力部隊だ。清定城におおよそ六千、この内おそらく五千の部隊が実質春日攻略の部隊となる。歩兵二千に騎兵が千五百、そして鉄砲隊が同じく千五百……」

密の言葉に皆が驚く。

「鉄砲が千五百だって……な、なんて数だよ」

小鉄が細い目を開いて呟く。

「こりゃあ上杉や北条とやり合うのと変わりやせんぜ」

昌虎も頬に流れる冷ややかな汗を手で拭う。太一と才蔵もそれに頷く。

「植村の兵は全部で一萬くらいだろ？ 残りは何処にいるんだ？」

玖狼の言葉に密が首を捻る。

「どういうことだ？ 貴様が知りたいのは主力部隊の情報だろう？ 今更残った兵力をなぜ知る必要がある？」

確かに密の言うことは正論だった。今は春日に攻め入ってくる敵をどうするか考えなくてはならないのだ。やってくる敵にいかにして罠を張り巡らせるか、混乱に陥れるか、鬼謀策略を考えなければいけないのであると、この場にいる全員が思っていた。だからこの玖狼の質問には思わず首を傾げてしまったのだ。

「いいから、残った兵の配置はどうなっているんだ？」

玖狼はその周囲の反応にもお構いなしで、再度尋ねる。

「あ、ああ残る三千の内、国内の警備と治安維持のため五百、上杉と北条の国境にそれぞれ一千、そして我が春日の国境である甲ヶ崎

近辺に五百となっている」

玖狼は地図を移動する密の指をじつと追っていた。そしてその指が指した場所を見る。上杉の国境は森に砦を築き上げ、そこに常時兵を駐屯させているようだ。北条サイドも同じくこちらは三角州にある平野だがそこに砦を築いている。そして同盟国であった春日の国境には友好の証なのか砦らしきものはなく、小さな小屋のような地図表記がされていた。

玖狼はこれを見て、不敵に微笑んだ。その表情を見て密達は一層怪訝そうな表情になる。そして玖狼は地図のある場所を指す。

「ここだ。俺の推測だけど、ここにある物があるんだよ。それさえ掴めばこっちのモンだ」

昌虎と密が身を乗り出して地図を見る。

「ここは私もさっき言ったじゃないか、なんにもないさ」

密が呆れた様に肩を落とす。

「あくまで推測だ。でも俺にはそれ以外思いつかない。なら思いついたことを行動に移すまでだ」

玖狼は地図を指したまま、才蔵と太一、小鉄に言う。

「準備は無駄じゃなかったみたいだよ。才蔵さん達には、これから目一杯頑張ってもらわなきゃならなくなったよ。しかも俺の予想が当たっているのなら、これは最上の情報になるかもしれない。だからもし身の危険を感じたなら、絶対に引く事。お願いだから」

才蔵達は笑顔で応える。

「任せてくださいよ。こちらら逃げ足の速さだけは誰にも負けませんよ」

「そうそう、わが身が大事ってね」

「無理ならさっさと帰ってきまっさあ」

密が頭を掻きながら続けて言う。

「こいつらだけではまともな情報など期待できまい。私達『赤鷹』からも応援を出そう」

「赤鷹？」

「ああ、そういえばお前には言っていなかったな。『赤鷹』は私達春日の忍の呼称だ。上杉に『軒猿』、北条に『風魔』がいるように春日にも選りすぐりの忍部隊があるのだ」

「そいつは助かりますぜ。これでかなり楽になるぜ。なあ太一、小鉄」

「そうだなあ、『赤鷹』がいるなら、情報を得た場合も伝達が俺達と赤鷹で二通り確保できるし、より確実に旦那の元に持って帰ってこれるな」

才蔵と太一が頷く。小鉄は腕組したまま黙っている。

「小鉄？ どうした？」

不思議そうに密が聞く。すると、小鉄の細い目が開く。

「姐さん、俺らに派遣されてくる『赤鷹』に女子はいるんですか？ 空気が一気に白けてしまふのを感じた。」

玖狼も含め、皆その言葉に固まっていた。当の本人は少し顔を赤らめて、やや興奮気味である。

「で、どうなんですか姐さん？」

密は拳を握り勢いよく小鉄の顔面にめり込ませた。

「『赤鷹』には私以外に女子はいない！ この破廉恥が！」

才蔵と太一はそれを聞いて少し残念そうな顔をしていたが、密にど突かれた小鉄を見て、直ぐに表情を修正していた。その反応が玖狼には可笑しくて堪らなかつた。思わず笑い声が漏れてしまふ。その笑い声に皆が反応する。

「あつはつは、小鉄さんもこんな張り詰めた状況で面白いことを言うなあ」

「何を笑っている貴様！ ぜんっぜん可笑しくない！」

密が想像した通りの反応をしたので、これがまたツボに入る。腹を抱えたまま呼吸を整えようとするが、全く上手くいかない。そして、これまた予想通りに怒りの籠った密の拳が、玖狼の顔面に食い込んでくる。

つられたのか昌虎と源次郎も小さく笑っていた。

「まあそうだよな。くつくつく、女がいた方がやりがいも出るもんですぜ」

「そうだなあ、確かにお前らの年の頃は、俺も女の事で頭が一杯だったなあ」

才蔵と太一は苦笑いしか出来ない。その横で密が拳を鳴らす。

「貴様らも喰らうか？」

「まさか、冗談ですぞ姐さん」

「そうそう。まあ、冗談はここまでにして、集めてくる情報はなんですか？」

密に睨まれた昌虎と源次郎は、先ほどの崩れきった笑い顔とは違って変わり、真顔で玖狼に聞いてきた。この兄弟の変わりよつの早さは、人生の先輩として見習う必要があるようだ。

呼吸を整えて、自分の意図を話し始める。ここから先は憶測の話だ。例え憶測が間違っていたとしても、今はこれを信じてもらうしかないのだ。そう、まるで一本しかない道の先に深い崖や大きな壁がない事を祈り、ゴールへと続いていることを祈って。



「それでは行つてきやす」

真夜中の屋敷の玄関口、網傘をかぶり、風呂敷を背中に抱えた才蔵と太一が玖狼を見る。

「ああ、頼むよ。そつちは厳しい状況になると思うし、無理だと判断したら引き返してください。絶対に無茶だけはしてはいけないからね」

キツネ顔と童顔の青年に注意を促す。横では灯の蠟燭を持った密が、才蔵達に付いて行く忍達に指示を出している。普段玖狼に憎まれ口しか言わない密だが、今は群れをまとめ上げる主のように頼もしく、大人びたように見えた。

そんな事を思っていると、玖狼の背後から凜がひよこつと顔を出す。申し訳なさそうに眉をひそめている。

「才蔵殿、太一殿、私の事情でこのような危ないお仕事をさせてしまい申し訳ありません。何卒、何卒無事に帰って来て下さい」

二人は憂色を漂わせている姫に対し、笑顔を返す。

「兄貴、姫様に心配してもらったねえ」

「おう、こりゃ絶対生きてかえらねえとな。そいじゃ、時間もないことですし、俺達は行きますぜ」

「俺らも準備が整い次第、中継地点で待つてるからなあ。きちつと情報持つて帰つてこいよ！」

昌虎が言つと、二人は頷き網傘を深々とかぶり直すと、颯爽と二人は御付の忍と共に夜の世界へと駆けて行つた。

闇に溶けていく二人を見送り、屋敷に入る。昌虎達は準備の為、各々の部屋へ戻る。玖狼と凜、密は玖狼の部屋で囲炉裏いろりを囲むようにして座つた。

「それで私達はあいつらが諜報活動をしている間に何をすればいい

のだ？」

密が屋敷の従者から出された茶を啜りながら言う。

「ああ、もし仮に俺の狙い通りに植村家の侵攻を阻止できたとする。そうすれば、植村は次にどんな手を打ってくると思うか？」

「うむ、そうだなあ……」

密は手の平に顎を乗せて考え出すが、体術以外はからつきしの忍である彼女は、相手が大人しく引き下がってくれると思っていたようだ。しばらく同じポーズのまま固まっていたが、最後には頭をくしゃくしゃと掻き乱して「わからん」と一言呟いた。

「じゃ凜はわかるか？」

聞かれた栗色の髪をした女の子は、両手で持って呑んでいた湯のみを膝の上に置く。

「そうですね、考えられるのは私の拉致もしくは暗殺、といったところでしょうか」

密が目吊り上げ驚く。

「俺もそれが心配だ。俺達の計画が成功すれば、植村は凜を攫うもしくは暗殺しようとしてくる可能性がある。だってそうだろ？ 元々は凜と幸隆さんが結婚して、春日家が甲斐の象徴になってしまうのを防ぐのが植村家の目的だろ」

「そうか、そうだったな。だから植村は姫様を奪い、代わりに自分が甲斐の象徴となるために兵を挙げた」

「計画が失敗した場合は、何者かの手によって私を攫うか暗殺することによって春日家がこの地方の象徴になることを妨げようとする可能性があります」

「そういう事、でも幸隆さんや屋敷の警護をする人達の殆どは、今回の合戦で甲ヶ崎峡まで出陣してしまうよね。そして春日侵攻が失敗した場合、凜に差し向けられる部隊は  
「  
玫狼が続きを喋る前に密が口を挟む。

「忍者か？」

流石に同業者である密は察しが早かった。

そう、植村家としては春日侵攻が不可能となった場合、凜の拉致、もしくは暗殺といった行動を起こすタイミングとしては、警護の者も城主も出払った時が最も都合が良い。そして、玖狼の計画の成功は時間的に考えても合戦の始まるギリギリまで分からない。だから植村家が侵攻失敗した場合に、恐ろしく残酷な手札を即刻その場で切るの明白だ。その時にその手札となるのは、短時間で素早く距離を稼ぐことができ、気配なく忍び寄り任務を実行する部隊。まさしく密の言ったそれだった。

「となると出てくるのは『蛇』か……」

「蛇？」

「ああ、私達にも『赤鷹』と言う忍集団がいるが、植村にも『蛇頭』だとう、まあ通称『蛇』と呼ばれる忍集団がいてな。姫様に近づいてくるのは絶対に奴ら以外に考えられない！」

湯のみを持つ密の手が震えている。それが怒りからくるものなのか、それとも別の何かなのか玖狼には分からなかったが、とにもかくにも相手の出方が大体分かっているのです、そうなった場合、出来るだけその情報が欲しい。

「その、『蛇』の実力は？」

「『赤鷹』と同等かそれ以上、奴らは個別に四つの集団に分かれていてな、まあ集団あたり五、六人忍がいて、それぞれ癖のある者が頭をやっている。頭の実力は私と差異はない」

「その集団の中でこの奴らが来ると思う？」

「分からない、正直実力的には何処も同じだろう。しかし実行部隊は一つだ。二つは他国の諜報活動で忙しく、もう一つはこの春日との戦による情報収集部隊だ。だから実行部隊は四つの集団の中の一つだろう」

「雪村はこの屋敷に残すことは可能なんだろう？」

「ああ、雪村は貴様と同じ姫の警護が任務だからな」

「私からも殿にお願いしておきましょう」

玖狼は手元の湯のみを口に持っていき、会話で渴いた口に茶を含

ませた。お茶は丁度飲みやすい温度になっており、とてもおいしかった。

安堵した。

雪村が凜の側にいることで、自分はある程度自由に動ける。自分が動き回れる事を考えれば、五、六人程度の忍を相手にするのは容易い。

しかも襲撃部隊には、雪村を相手にする自分以上の実力者が必要だ。護衛の者も含めれば、玖狼が戻ってくる間くらいは凜を守りきれるだろう。

どうにか考えが纏まり、対策も実行できる目処もたったことで安心した。そう感じると、自分の身体にどっと疲れが押し寄せてきた。ひどく眠い。三日後、少なくともここが戦場になる事は多分間違いない。ならば、少しでも休み万全の状態で奴等を迎え撃ってやるう。

玖狼は密と凜に「おやすみ」と一言いうと、部屋に戻り布団に潜り込んだ。

1 - 1 2 開始（後書き）

どうも結倉です。

明日も更新予定です。

もう少しだけお付き合いをお願いします。

## 1 - 13 ピクニック

玖狼の目の前に広がっている風景は、この時代に来て始めて見たそれと同じだった。小さくて綺麗な池、周囲の草むらは、まるで広大な草原地帯の一部分をこの丘に移設してきたように清しく、気持ちのいい踏み心地だ。

朝、目が覚めると直ぐに玖狼は凜に呼び出された。

「玖狼、少し遠出しませんか？」

少しなのに遠出なのか？ と疑問を抱きつつも、この姫様のことだから自分に遠慮して変な言葉使いになっているのだろうと考え、そこには触れず、右手を振り「わかりました」と返事をする。

「じゃあ支度をしてきますので、少し時間を下さい」

凜はそう言うのと急ぎ足で部屋の奥の襖へ消えていく。

暫くして、着物の凜と密がやってきた。凜は玖狼の世界に来た時と同じ桜柄の着物で、密は黒の下地に朝顔が大きく描かれた着物を身に着けていた。

玖狼は二人の着物姿に目を泳がせながら「似合ってるよ」と言うのが精一杯だった。

今その二人と玖狼、そして警護の為と言って連れて来た雪村とで、この野池に来ている。

「いい所だな。本当に青洲池せいしゅう池に似ている」

玖狼は目の前の風景と似ている場所を知っている。

凜と初めて会った場所、そして玖狼にとって特別で大切な場所。ここはそんな独特な雰囲気ふんいきが漂っている。

「そうでしょう、私もよく母様や父様とここに来たの」

言葉使いが少し子供っぽくなった凜に玖狼は驚く。凜の目線の先では、密と雪村が身振り手振りしながら、話をしている。抜刀や体術の構えに見えることから、おそらく武術の話でもしているに違い

ない。

男と女が折角こんないい場所に来ているのに勿体無いと思いつつも、隣の女の子とそういう話を出来そうにない自分も駄目だなと思う。

「俺も凜と初めて会ったあの池には家族でよくピクニックに行ったもんさ」

「ぴくにつく？ ですか……」

「ああ、今日みたいに皆で楽しく遠出する事さ。そこで弁当食べた、遊んだりしてさ」

「へえ。そうですね。じゃあ今日は『ぴくにつく』と言つものなのですね」

凜は嬉しそうに両手を胸の前に合わせる。

「じゃあ、玖狼の為に花の冠を作つてさしあげますよ」

「お願いします、お姫様」

玖狼はかしこまった御辞儀をする。凜はそれを見てほのかに優しい笑みを浮かべると、草原のような原っぱにかけていった。

その後姿を見ながら、玖狼は思う。

自分や姉が遊びに行く時も、母はこんなふうに自分達を見守つてくれていたのだろうか。

原っぱで遊んでいる自分を母は何も言わずいつも笑顔で見ている時、自分はなぜ母が嬉しそうにこちらを見ていたのか、分からなかった。

玖狼は仰向けに寝そべり、雲など見当たらない真つ青で青臭い空を見る。目を閉じると視覚がない分、夏草と水のおいが、そよ風にのって鼻を撫でる。あの頃の自分達を思い出す。楽しくて幸せな時間を。

玖狼は泣いていた。思い出すたびに泣いてしまうのだ。泣くといつても欠伸をした時に流れ出るそれと大差ない。身体は徐々に成長し、大人になっていく。でも中身はまだまだ未熟だ。今も少し思い出すだけで動揺し、感情が揺れてしまう自分がいる。

「どうした？」

案の定、密が玖狼の顔を見て、不思議そうに聞いてきた。それに  
対し「ちよつと欠伸」と返答してごまかす。

「いい天気ですね。これはまだ暑くなりそうですね」

玖狼に歩み寄りながら、雪村はそう言つて、額を拭う。

雲一つ無い爽やかな空には、燦々と輝く太陽が高く上っている。

「ああ、でも気持ちのいい暑さだ」

「どうです？ これから私と一つ」

雪村は腰に帯びている刀をポンっ、とたたく。

「今日は止めておこう。折角こない天気の中、ピクニックに来  
てるんだから、もっと楽しいことでもしようよ」

玖狼の言葉を聞いて、雪村は腕を組み考え込んでしまう。どうや  
ら手合わせは雪村にとって楽しい事の一つだったようだ。雪村は他  
に考え付くことが無く、頭がさらに沈んできた。

「玖狼、貴様の世界の事を話してくれないか？」

「んっ」

「なんだ？ 不服なのか？」

密がギロリと刺すような目を玖狼に向ける。唇が少し尖がついて  
たせいか、照れているようにも感じたが、そこは気にしないことに  
した。

「いや、なんでもない」

「私も聞きたいです。玖狼殿の世界のこと」

雪村も便乗してくる。

「つたく、そうだなあ、俺の住んでいる世界、まあ正確に言つと国  
には戦争が無いんだ。勿論、他の国では戦争をしている国はある。  
でも俺の国では戦争はないんだ。で、何かと便利な世界でさ、押し  
釦ほたん一つで米を炊くことが出来たり、お湯を沸かす事だつてできる。  
それに室内では一年中温度の調整が出来る部屋があつて、冬でも泳  
いだり出来る施設だつてある」

「ま、真か？ 釦一つで米が炊けるのか？ 火をおこす必要もない



のか？」

密が身を乗り出して質問する。

「ああ、必要ない。それと俺はここでは食客扱いだけど、俺の世界では学生なんだ。俺みたいなガキは、まだまだ世間で仕事をするには不十分なんだよ。だから学校に行つて、将来の為に勉強するんだ」  
「貴様が餓鬼で未熟なのは知っているが、その『がっこう』と言うのはなんなのだ？」

密から相変わらず、真剣に悪気の無い嫌味が飛んできた。これがワザとでなく、時にマジで言っているのだから夕チが悪い。密の失礼な言い方に怒りを堪えながら続ける。

「学校つて言うのはなあ、さつきも言つたけど、未熟なガキ共が将来の為に通う学び舎だ。そこで自分が将来何になりたいかを見つければ、それに向かつて勉強に励む場所だよ。学校にはそれを手助けする為に先生がいて、俺らに勉強を教えてくれたり、悩んでいたりで困つていたら、世話を焼いてくれるんだよ」

「貴様の世界では自分がなりたい職になれるのか？ 自由に選ぶことが出来るのか？」

「ああ、選ぶのは自由だ。但し努力は必要、なりたいた言つても必ずしもなれるもんでもないよ」

「私は武士以外に考えられません……」

雪村が再び頭を下げて両手で頭を押さえている。雪村は武士になること以外はかんがえられないらしい。

「まあ雪村みたいなのは部活命、つて感じがするな」

「『ぶかつ』？ ですか」

「ああ、学校では勉強が終わつた後、クラブ活動つてのがあるんだ。この時代で言う……なんだろうなあ……、鷹狩とか蹴鞠みたいな事をやる。まあ、いろいろな種類があるんだけど、剣術や体術をやるクラブもあるよ」

「貴様は何か『ぶかつ』をやっているのか？」

「ああ、剣道部に入つてるよ。時間があるときは道場に顔を出して、

剣術の練習をしてる。まあ、この前の試合では負けちゃったけど」

「負けたのか!？」

「負けたんですか!？」

ほぼ同時にツツコミが入る。玖狼は両の手の平で二人をけん制する。

「まあまあ、俺は勝ち負けにはあんまりこだわらない主義なんだ。俺の世界では敗北は死を意味するものじゃないからね。武道の目的もなんていうか、強くなりたいと思うのは勿論だけど、基本精神的に遅くなる為にやっている人が多いんだ。」

この時代の彼女たちにこういった説明するのは中々にめんどくさい……いちいち言葉を選ぶ必要性もあるし、こちらの言っている言葉に対し、幾度と無く首を傾げまくる。

「とにかくさ、俺の世界では剣術も武術も全て勝負事は命張ってる訳じゃないんだ。何をやるのも自由、恋も勉強も、なりたいものだって努力次第では何だってなれる。そんな世界さ」

「うむう、玖狼殿でも歯が立たぬ相手がいるのですか……やはり世の中とは広いものですね！ 私も負けてられません！ 少し向こうで刀でも振ってきます！」

玖狼の最後の方の話など全く聞いていなかった雪村は、引き締まった表情をして池の辺<sup>ほとり</sup>まで走って行ってしまった。

「いいなあ」

密が呟く。

玖狼は驚きを隠せなかった。

この世界の人間は、自分の人生が生まれた時からほぼ決められていて、望むような生活はすでに諦めて、深く考えないようにしていると思っていた。

密の場合だと、「そんな世界などあるものか」とでも言いだすのかと思っていたくらいだ。

「意外だな、俺の話信じるのか？」

「貴様は嘘をついていないのだろうか？ 今まで私は貴様という人間

を観てきた。貴様はそんな戯言を言う輩ではないはずだ」

そんな台詞を真顔で言ってくる。黙つていれば美人で綺麗な赤眼の女性にそんな事を言われると、顔が火照るのも無理は無い。

「それはそれは、信用して頂いている様で。しかしお前は俺の世界にきてみたいのか？」

「そりやまあな、いつてみたい。私は今の仕事でも十分満足しているが、やはりその自由というのが気に入った」

密は背筋を伸ばし、空を見上げる。視点が定まっておらず、彼女が何処か遠くの山々を見ているようにも見えた。

「私は孤児だったんだ。村で路頭に迷っていた時、大殿に拾われた」  
玖狼は黙ったまま、耳を傾ける。

「そして幼い姫様の御守をしないか、と言われた」  
「変わった殿様だな」

すると密は楽しかった幼き日々を思い出したのだろう。クスクスと笑う。

「そうだな、変わっておられた。私はそれを受け、姫様と同じ環境で学問を学び、友人のように共に遊んだよ。奥方様も優しくしてお綺麗だった。私は今も二人を両親のように慕っている。でもな、御二人が戦争でお亡くなりになった時、私は決断を迫られた」

「決断……？」

「ああ、姫様は当然桜城の血筋で他家には利用価値がある。しかし私はどうだ？ 姫様の御守役とはいえ、なんの能力もないただの女だ。ただの女が生き残り、姫様の側に居ようとすれば、選択は限られていたよ。野に下り野たれ死ぬか、姫様の側にいる為に、姫様について行く為に、春日の地に行き……」

密は自分の身体を丸め、自分で守るように両手で抱きこんだまま続ける。

「そこから先は地獄の日々だったなあ。『姫様の側に』、この想いだけを糧によく頑張つてこれたもんだ……」

密は自嘲気味に語るが、玖狼にはその苦しみは分からない。分か

らないが、密が辛い思いをしてきたのは痛い程わかる。

「だから正直、貴様の世界が羨ましく思う。争いも無く、己の頑張り次第で大抵のことは実現できるのだろう?」

「なんでもってわけじゃないけどな」

「しかしこの世界よりよっぽと良いのだろう?」

「まあな」

玖狼も立ち上がり、手で尻に付いた葉っぱや土を払う。

「でも俺はこつちにきても自分の考えは変えてないぞ。自分の進む道は自分で作る。友達だつてそうだ。俺は凜が姫さんだからってへりくだつたりしないし、お前だつてそうだろ? 凜はお前にとって大事な人だから、友達だからだろ? 身分が違つても、立場が違つても、守りたい人なんだろ?」

玖狼はズカズカと大またで密に歩み寄る。

「お前は立派に選択したんだ。凜を、大切な友達を守ることを選択したんだ。それに何処の世界に行つても、お前はそれを選択するよ。お前はそういう奴だよ」

そう言いながら、密の頭をくしゃくしゃに撫でる。直ぐに鉄拳が飛んでくると思い、多少身構えていたのだが、意外にも違う言葉が飛んできた。

「貴様になだめられるとはな、私は随分弱かつたのだな」

「まあ密も俺の大事な友人の一人だからな。友達が困っているのに、放つては置けないだろ?」

密は乗せられた手を払いながら微笑む。

「じゃあ私も貴様が困っている時は道を示す手伝いをしてあげよう」その微笑みが天女のように、いつもの密からは考えられないほど優しい表情だつたので玖狼は心の内で驚いていた。

「どうした? 少し熱でもあるのか?」

密が首を傾げながら聞いてくる。驚きが少し表情に漏れたようだ。「なんでもない」と一言返し、二人で凜と雪村のいる方へ歩いていく。凜が花の冠を大事そうに抱えながらこちらに手を振っている。

気持ちのいい風の吹く、午後の一時だった。

### 1 - 13 ピクニック（後書き）

どうも結倉です。

明日も短文になりますが出来れば更新したいと思っています。

3日連続と自分ではいっぱいいっぱいですが頑張ってみますのでどうかよろしく願います。

ちなみに物語の和みシーンはこれで終わりです。

ここから先はいよいよシリアスパート突入でございます。

彼らがどういった結末をむかえるのかお楽しみに。

ではでは。

俺は必死で逃げている。いや、立ち向かっているのだろうか。

体中のあらゆる部位の震えが止まない。

どうすれば、この状況から抜け出せるのだろうか？

頭の中はもう完全に真っ黒だ。考えようにも何も考えきれない。

次から次へと考えるように脳が指令を出す、それを上回る恐怖で何も出来ない。

黒が俺の頭の中を埋めていく。おかしくなりそうな恐怖と戦いながら、俺はある人の下へ駆けている。

早く、早くこの状況を知らせなければ、唯一思考できるのはこの事だけ……。

「糞っ……！ 畜生っ！」

危ない橋だと分かっていた。

でも、俺はこの糞みたいな人生に、光を、灯火をくれたあの人に報いる為、危険だと分かっている踏み出したんだ！ おそらく皆も一緒の気持ちだったんだろう？

例えこの身朽ちようとも、これだけは絶対に裏切れない。

主君と呼べる人ではない。

それでも俺達を生かしてくれた。

何の意味の無い人生を送ってきた俺を、きっとあの人は意味のあるものに変えてくれようとしたんだと思う。

だから、俺達の人生を、意味のあるモノに変える為に、俺は死んでもあの人の下へ帰るんだっ………！

1 - 14 昌虎（後書き）

どうも結倉です。

本当に短い更新ですみません……

しかし、どうしてもこのシーンだけで区切りとしたくて。

短文ですがお付き合いいただけると幸いです。

次回は週末更新となりますのでご了承ください。

ではでは。



## 1 - 15 戦場にて

甲ヶ崎峽「いんげん」、眼前には植村家の旗がなびいている。

玖狼は食客として幸隆の陣営の中にいた。陣の中はまさに死と隣りあわせと言うだけあって、張り詰めた環境にあった。もしここでなにか冗談でも言おうものならば、即刻近くにいる者から斬りつけられてしまつたろう。それほどまでに張り詰め、そして絶望的な状況だった。

唯一望みのあつた崖の上からの弓斉射は決戦前、早々に植村に崖の上を占拠されてしまった。植村側の行軍がこちらの予想を超えていたのだ。唯一の希望が断ち切られてしまったばかりか、逆に頭上からの一斉射撃にこちらが怯える始末だ。進めば頭上から矢の雨が降ってくる。かといって、このまま待機していても鉛玉の嵐にあつてしまう。

「雨は降らないのか？」

幸隆が側近の家老に激しく、叩きつけるような質問を投げる

雨が降れば鉄砲の使用は制限される。そうなれば少しは勝機でもあると思つたのだろうか。それに対し、無言で静かに首を横に振る家老は、もうすでにこの戦を諦めてしまつているのだろうか。今後の展開に何も見出せない家老は、眼力無く、只々絶望しているようだ。

鉄砲が使えないからといって、どうなるのですか？ あちらはこちらの三倍近くの兵を擁しているのですよ？ どうやったら勝てるのでしょうか？ 玖狼には家老の内々に秘めた言葉が、そう言っているように思えてしかたなかった。

幸隆は堂々としていた。怯える様子を見せることなく、激しく部下達を叱責していた。

しかしながらこういう時、上に立つ人間の器が知れるというのがよく分かる。幸隆は堂々とはしているが、部下達は恐怖に怯え、我先に敵陣へ飛び込む様な勇猛な者は誰一人としていなかった。

幸隆はお山の上で叫んでいるボス猿の様に滑稽こっけいに見えた。

言っていることに戦況を打開できる内容も無く、ただ叱責するだけ。「状況の報告は」、「使えない奴だ」等の言葉が大半を占める言動に、玖狼は少しゲンナリしていた。どうやら幸隆には人をひきつける様な魅力がないようだ。おそらく幸隆自身、それを分かっているのだろう。でなければ、凜を嫁にすることに固執する必要がないからだ。

彼女がいれば、信仰心から民を味方につけ、治世できるのかもれない。玖狼には、そんな幸隆の本音が見え隠れした気がした。初対面で彼に抱いたイメージは所詮想像でしかなかったというわけだ。しかし玖狼も幸隆の事は言えないな、と思っている。この戦を無効にする手札はもう既にきっているのだが、あちらさんになんの反応も無い。

「やっぱり俺の想像でしかなかったのかな」

「まあ仕方ないさ、間違っただけでも、それは貴様のせいではないよ」  
横で机に頬杖をつき、片手でクナイをクルクルと回しながら、密が言う。

「しかし、もうすぐ時間切れだ。このままいけば、もう戦は始まってしまう」

「そうだな、そうだったなら貴様はどうする？ 逃げるか？」

迷っている。正直に言うのと逃げたい。勝てないことは分かっているし、食客の玖狼は戦場のドサクサに紛れて逃げたところで、お咎めも何もないだろう。

「逃げたいのなら、私が貴様を逃がそう」

「はあ？」

玖狼が間の抜けた言葉を漏らすと、密は唇を尖らせ玖狼を睨む。

「不服か？」

「いや、でも俺と逃げるとお前が敵前逃亡みたいなかんじになるんじゃないのか？」

「かまわんさ、どうせ亡くなる国だ」

「意外だな、てつきりお前はそんな事は死んでもしらないと思ってた」

「まあな、私自身驚いている。しかし貴様に教えてもらったのだぞ、選択するという事を」

「だな」

「私は姫様を守る。これは私にとって最も重要な事なんだ、だから私は姫様がいる限り私は死なない、それに……」

密は俯いて、玖狼には聞き取れるかとれないか微妙な声で何かを呟いたが、玖狼にその声は届かなかった。

「それに？」

聞き返した玖狼に対して、真っ赤になった顔をした密が顔を背け「二度は言わん」と一言残して口を噤んでしまった。

玖狼が首を傾げていると、背後から轟音と共に狼煙が上がった。密と玖狼は立ち上がり、その狼煙の合図を横にいる密に確認する。

《敵進軍開始》の合図だった。

いよいよもって、自分も選択しなければならぬようだ。

「昌さん、報告はまだなのかよ。このままじゃどうしようもない！」  
玖狼は愚痴ともとれるような、気弱な言葉を発していた。

「弱気になるな、貴様は大丈夫だ。なんとかなるさ」

玖狼はもう驚かない。この黒髪で紅眼の女は、この土壇場でなにが吹っ切れたようだ。密のなかなか肝が据わった言い方に、少し安心して自分に対して逆に驚く。

「だな。なんとかなる、か」

笑顔で返し、戦場の最前線へと駆けていく。

とにかく最前線で状況を見守ろう。始まってしまったら、なりふり構わず密を連れて、凜の元へ逃げよう。どこまでも、そうどこまでも……。そうだ、その前に昌さん達とも連絡取らなきゃ、皆が無事であることを玖狼は祈った。

とつとつ両軍が対面する。物々しい雰囲気と緊張感が漂い、一刻も早くこの場所から逃げたい気持ちになってしまいそうになる。

相手は三倍の兵力を持って、こちらを容赦なく蹂躪してくるのだ。士気の質も高く、最新鋭の装備を整え侵略してくる相手と、急場しのぎで集められた忠誠心の低い者達の多いこちらとでは、天と地ほどの違いがあった。

恐らく戦が始まれば、一瞬にして勝敗が決してしまいそうな気配すらある。

玖狼の心の内はこの時既に決まっていた。

『即逃げる』、だ。

もう情報の整理も確認も必要ない。思考を停止して、一目散に凜のいる屋敷に駆け込み、皆でどこかへ逃げてしまおう。多分この戦場において、似たようなことを考えている兵士も少なくないと思う、皆一様に声を張り上げ、相手方を罵倒しているが、顔には焦りと恐怖の形相が隠せない。

戦場が正にそんな一触即発の状況で、不意に正面から狼煙が上がった。

目の前が真っ白になった。

敵軍後方からの土煙、飛び交う慌しい声と早馬。

それらを総合して考えられることは少なくないし、正面にいる敵鉄砲部隊の何人かは背後の確認をしていたが、銃口をこちらにジッと向けたまま、撤退する気配はない。しかし明らかに後列の部隊は、撤退準備を始めているように見える。そしてぽかんと口を開けたままで、玖狼は現状の理解を試みる。

「戦を、回避できた、のか？」

「さあな、ただ目の前の敵軍が撤退しているのは事実だ」

駄目だ、現状の理解が出来ない。

頭の中が錯乱している。自分が策を弄したのにも関わらず、考えが追いついていない。

じゃあなぜ昌虎はこないのだろう？ なぜ敵軍が撤退していくの

だろう？ 目の前の敵は、ゆっくり徐々に殿の鉄砲部隊を残して後退している。

「おい、玖狼！」

隣からの怒声に対して、反射的に顔を向ける。

「これからどうする？」

投げかけられた問いに何も答えられずに固まってしまふ。

どうすればいいんだ？ 何をすればいいんだろう？ 玖狼の頭の中は完全に無能な人間の構造になっていた。

「少し待ってくれ！ 頼むから！」

かなり投げやりに返す。

そして思考を静かに落ち着かせる事にした。

落ち着け、落ち着くんだ玖狼。今、俺はどうすればいい？ まずは把握だ。現状の把握、情報が欲しい。先ほどまで忘れ去っていた思考を無理やりに立ち上げる。

「とにかく密の言つとおり、敵が撤退しているのは間違いない……。ならばこの状況で俺達は どうするか……」

「どうするんだ？」

密が再度聞いてくる。

どうする？

敵は撤退している。ならばこれは自分の思惑通りに事が運んだものと考えていいのではないだろうか？ 仮に何か他の事情があつて撤退しているのならば、それはもう玖狼には考えの及ばないところであるし、相手の事情なんてどうでもいい。

ならば取るべき行動をとるだけだ。

「行こう、凜の所へ」

「分かった」

二人はそれだけ言葉を交わすと、踵を国境から返し駆け出していた。



1 - 15 戦場にて (後書き)

どうも結倉です。

いよいよ物語りもクライマックスにむけて加速していきます。

どうか最後までお付き合いのほどよろしく願います。

甲ヶ崎峡を抜け、林の獣道から開いた見通しのいい平原へと入る所だった。

密が足を止めた。どうやらなにか気配を感じ取ったらしい。地面に耳をつけ、相手を探り出した。

「もしかして植村の忍者か？」

少しの不安が頭をよぎる。そう、戦による凜の奪取が出来ない以上、彼らが凜に向けて凶刃を突きつけてくる可能性は十分に考えられる。ならばその刃を凜に到達させる前に潰さなければいけない。

「いや、これは……。忍びのそれも混じっているのだが、明らかに違う者の足音だ。恐らくは追われている……」

「数は？ 分かるか？」

「難しいな。追われている者は一人だが、追っているものは分からない。泳がせているのか……？ この足音は……」

そこで玖狼の心拍が跳ね上がる。一抹の不安が脳裏をよぎる。

「場所は！ 何処なんだ？」

「ここからそう遠くないが……、しかし今は一刻も早く姫様の所へと行かなくては」

「だけどっ！」

玖狼は密の声に被せる様に叫んでいた。

「追われている人達は昌さん達かもしれない！ 俺だけでもいい、その場所まで案内してくれ！」

そして考えていた不安事を、思わず口に出してしまっていた。もしそうなら、見捨てることは出来ない。とにかく早く確認して、凜の元へ行かなくてはいけない。

ついて来いと顎を進行方向へむけ、密は駆け出す。どうやら、明らかにマイナスな決断に従ってくれるようだ。



案内された場所は、先ほど玖狼達がぬけて来た林の中だった。

獣道を少し戻り、それた場所に彼はいた。正に満身創痍で、息は辛うじて出来ているように見える。玖狼を見て、倒れこむように傾いてきた彼の身体を玖狼は受け止める。

「昌さん！」

昌虎は全身に傷を負い、息は荒く、苦しそうにうめき声を上げている。それは正に意識朦朧とした状態だった。玖狼は必死に昌虎の意識を保とうと呼びかけるが、昌虎の反応は薄い。見ると、右脇腹の傷が酷い。どうすればいいか分からない玖狼の横で、密が昌虎の頬を叩く。

「しっかりしろ！ 一体どうしたんだ？」

密が玖狼の聞きたい事をあっさりと聞いてくれる。

「だ、旦那かい？」

細々とした口調で昌虎は返事をした。まだ意識は保てているようだが、目の焦点があつていない。かなり危険な状態であるということだけがすぐに分かった。

「昌さん、何があつたんだ？」

「ああ、これはきつと、神さんが俺の願いを、聞いてくれたつてんだなあ……、だ、旦那、作戦は成功でさあ……、上杉、と、北条は、旦那のこいつを見せたら、簡単に、信用してくれあしたぜ……」

消え入りそうな声で昌虎は続ける。そして、玖狼に携帯電話を手渡した。

「ただ、あいつらよお……、植村と同時に、か、春日まで侵攻するらしくつて、お、俺達はそれを、旦那に知らせなきゃつてよう……」

玖狼は瞼の奥が熱くなっているのを堪えながら、整理する。

結論から言つと、玖狼の予想は当たつていた。

植村は隠し金山、もしくは銀山を秘密裏に持っていたのだ。そしてそれは甲ヶ崎峡の山々のどこかということ。玖狼は昔やったゲームで甲斐、甲府近辺に隠し金山があるという情報を思い出したのだ。

そして採掘現場にはある程度、兵と人員の配置が必要だと玖狼はにらんでいた。国境、山奥の辺境に人が集まっていれば見当もつきやすい。才蔵と太一には、国境付近に設置された小屋を中心に、現場のあたりをつけてもらうと、そこに忍び込むよう指示を出した。さらに、その発掘現場を玖狼が未来から持ってきた携帯電話の動画撮影機能をもって記録し、上杉、北条の両家に情報を漏らすことだった。

採掘現場の発見から、上杉・北条両家の信用を得るまで、全てが綱渡りのような勝負事だったが、上手くいった事は昌虎の言うことから理解は出来た。

しかし予想外の出来事は起こるもの、まさかこのような展開になるとは、想像出来なかった。

「だ、だんな……急いで逃げるんだ、赤鷹の連中は、蛇との争いで動けなくてさあ、た、多分やつらの狙いは、姫さんでさあ、きつと刺客を送ってくるはず……」

この地域における彼女の影響力とはそんなに大きなものなのか？  
あの虫も殺せないような姫様が、そんなに邪魔なのだろうか？

本当に腐った連中だ。

「分かった！ 分かったから、もう喋らないで」

玖狼の制止に対して、昌虎は小さく首を振った。玖狼を探すように手を僅かに動かしているところから、昌虎の目はもう完全に見えていないようだ。玖狼の瞳から堪えていたものが溢れるように出ている。

「だ、だんな、あつしらは旦那に、会えて本当に、良かったと思っている……そ、それは皆、同じ気持ちでさあ……惨めで最悪な、後悔だらけの人生から、旦那が救ってくれた……、旦那と一緒にいた日々は、あつしらにとっては、宝物でさあ……」

口から血を吐き、苦しい状態であるにも関わらず、昌虎は続ける。

「なあ、旦那、あつしらは、役にたったかい……？」

ぼたぼたと涙を落としながら、震える声で玖狼は応える。

「ああ、昌さん達のおかげで戦は回避できたよ」

「そ、そうかあ……、こんな俺達でも役に立つ、もんなんだなあ……  
……ありがとうよ、旦那あ……」

そう言つと、昌虎は焦点の合わない目を閉じた。

横で密が脈を確認して玖狼にむけて小さく首を振る。皆、玖狼にとつては優しく温かい良い人達だった。

昌虎、源次郎、小鉄に半蔵そして太一、彼らは自分の願いを叶えるため命を投げ打つて事を成してくれた。

なぜ彼らはこんなになるまで俺に付き従ってくれたのだろう？

なぜここまで俺に尽くしてくれたのだろう？ なぜこんな愚策に己の命を投げ出してしまったのだろう？

当の本人は命に対する考えがこんなにも甘かったのに……。こんなことになるのなら……。こんな事態になるのであれば、止めるべきだった……！

「あ、ああつ、うあああああ！！」

玖狼は昌虎を抱えたまま、泣き崩れる。顔中涙と鼻水が垂れ流しになつても、もはや気にせず泣いていた。

あの時と、父と母を失つたあの頃と同じように、自分の無力と浅はかな思慮に、後悔だらけの人生に悲観して。昌虎達との平穏な日々が、楽しかった日々の思い出が、一気に血塗られた後悔の念に覆われる。なぜこの陽気で朗らかな人達に、自分はこんな危ない作戦をお願ひしたのだろう。なぜ大事な人達の存在が奪われてしまうことに対して、もう少し、もう少しだけでも、真剣に検討しなかったのだろう。全て自分の愚かな決断がこのような事態を招いてしまった。

「哀しいのは分かる。だが今はまだ泣いている時ではないだろう」  
密が言う。

しかし玖狼は俯き、唇を振るわせたまま、一向にその場から立ち上がる事ができなかった。

「会わなければ、会わなければよかった……。あの時、昌さん達を

私的な理由で引き止めたりしなければ……」

昌虎はこんな変わり果てた姿にはなっていたかった。

「あの時の貴様はこの時代に來たばかりで情報が欲しかった。昌虎を頼るのは仕方ない」

「違う！ いざとなれば一人だつてできたはずだ！」

「おい……」

玖狼は密の声を遮って続ける。

「なんでこうなるんだ……！　なんでっ……！」

うな垂れたまま愕然としている玖狼の背後で密が拳を鳴らしながら近づいてきた。

「おい」

声と同時に強烈な一撃が玖狼の顔面にヒットした。密はよろける玖狼のシャツの襟を掴み、睨みつける。その目は烈火の如くたぎっていた。

「いい加減にしろ！　貴様の所為ではないだろうが！」

襟を持つ密の手が震えている。ふと顔を見ると、密の顔もぐっしよりと涙で濡れていた。

「今は姫様の下へ戻り、この状況をいち早く報告するのが先決だろうが。確かに現実を受け入れるのは辛いだろう……。昌虎を追つて來た忍びも来る、上杉や北条からの追手も相手にしなければいけない、貴様がそんな状態では私達は全滅してしまうぞ！」

玖狼の胸を叩き、密は喚くように続ける。

「貴様の気持ちも分かる。大切な者を亡くす哀しみ、それは耐え難いものだ。だがな、それに固執しては己を見失う！」

しかし密の懸命な言葉は、玖狼の胸に届かない。玖狼には両親を失った時のような喪失感しか出てこない。自分の中にぽっかりとした何も無く、深く暗い穴があり、自分はその穴の中で膝を抱えて震えている。

ただ、失うことを嫌い、孤独を怖がり、誰かを大切にすることを恐れていた。でも人との出会いはどんな相手であれ何かしらの意味が

あり、とても大切なものだとも思っていた。どんなに恐れていても、孤独が嫌いな自分は相手に嫌われるのが嫌で、必然的に誰にでも優しく人当たりの良い性格を作るようになってしまった。

そんな性格が昌虎達を死なせてしまった。雪村との試合の時、勝つ必要はなかった。凜や幸隆に頼み込み、凜を助けた見返りに、自分と昌虎達を解放することだつて出来たかもしれない。もつと前から考えると、昌虎達と戦った時、彼らの隙について凜のみを救出する事だつて出来たはずだ。

そう、カタナクテモヨカッタダ

「俺は、昌さんに会わなければ良かった。出会わなければ、こんなことにはならなかった……」

「玖狼……」

「凜に、密だつて、俺の考えに乗らなければ、こんな危険な事に巻き込まれなかった！ つ！！」

そう言った直後、玖狼の鳩尾に鈍い衝撃が走る。密は不意の一撃に身を丸くした玖狼を、冷やかな眼で見る。

「貴様っ！ 私が、姫様が、いつ貴様と出会えたことが不幸だと言った？ いつ貴様の考えに反対したか？ 昌虎も言っていたではないか！ 『会えて良かった』と」

密に胸倉を激しく掴まれる。

「私はな、貴様を信じている。貴様は人を大事にする、とても頼りになる優しい奴だ。だからこそ責任感も強いのだろうな」  
行動からは考えられないような、澄んだ声が聞こえた。

「私はもう行く、姫様が危ない。貴様はきつと大丈夫だ。先ほども言ったが『私は貴様を信じている』。先に行つて待つているぞ」

密は憂い笑みを向けると、直ぐに踵を返し屋敷の方角へ走り去つ

ていった。

残された玖狼は俯いたまま、微動だにしない。眼に光は無く、身体はだらんと垂れている。生気はまるで無く、空気の入っていない萎んだ風船のようだ。

「くつくつく、お仲間にも見捨てられちゃいましたかあ？」

虚脱感が身体を支配している中、背後から舐めた口調が聞こえた。玖狼をからかっている様な、見下すようなそんな声。声に反応して振り返ると、そこには忍び姿の男が一人立っていた。全身黒の忍び装束で腰には無数の苦無がさしてある。男の左目は潰れており、鼻は削がれ、耳は無く、口元は歪んだ含み笑いをしている。

「あの汚い下手人を泳がせておいて正解でしたよお。後はあの娘を追って無防備な春日のお姫様を殺すのみい。あ、そうですねえ、そのまえにあなたも殺してしまわないとねえ」

醜悪な姿の忍びは右手をサツと掲げる。すると、木々の合間を縫うように忍び達が、玖狼の横をすばやく通過していく。どうやら密を追うように指示を出したようだ。

「汚い？」

忍び達の通過を許したわけではない。それ以上に玖狼は男の言った事が許せなかった。

「ああ、そこでもくたばってる死体の方ですよお。泥と汗と血が付着して臭いじゃないですかあ。まったくう、幾ら尋問しても教えてくれなかつたものですからあ」

「どういうことだ？」

「ええ、あなた方のお姫様の居場所を聞きだそうとしたんですがねえ、ことごとくお口の固い人達でしたのでえ、一人、また一人と訪ねる羽目になってしまいましたあ」

「一人ひとりだと？」

「狂いそうだった。」

「まあ、訪ねた方が返答出来なくなってしまうましたからあ、また次の方を訪ねるしか方法がありませんでしたのでえ」

「お前か……」

玖狼は冷然と呟く。

「なにがですか？ あああ、あの死体ですかあ？ いかにもわたし  
がやりましたよお」

何が可笑しいのか気持ちの悪い歪んだ口を緩ませ「くつくつく」  
とまた笑い出した。

「ほんと身体から頭が離れるまで黙りこくったまんまだった方もい  
ましてねえ、もう尋問のしがいがありましたよお。まあおかげさま  
でこんなに手間取ってしまったんですがねえ」

尋問？ 拷問の間違いじゃないのか？ あの人達に、貴様はそん  
な仕打ちをしたのか？……！

「もう黙ってくれないか？」

玖狼は一言呟くと、醜い笑顔を浮かべる男の視界から消える。男  
は右目を大きく見開き先ほどの下劣な顔から一転、驚愕の表情を浮  
かべた。

男は驚いた、自分の前から音も無く消えることなど、一流の忍び  
でもなかなか出来ることではない。まして自分はこの北条家お抱え  
の忍軍の中でも五本の指に入る実力を自負できる。目の前にいた優  
男の実力に自分は足元も及ばないとは思いたくない。

「なかなかやるようですねえ」

そう言った矢先背後に凍りつくような悪寒が走った。それとほぼ  
同時に足元がすくわれる。転ぶように地面に倒れる前に手を地面に  
着き後方へ飛ぶ。自分が見た位置を見ると、あの優男が無気力に立  
っている。

「い、いつのまに」

男はただ感嘆していた。玖狼の見せるその武術に。

「あなた、何で昌さん達をあんな目に……」

「あんな目って、あれですかあ？」

「どうして……」

「ああしないと、自分達がああなるんですよ」

玖狼の肩がピクリと動く。

「だってこの世は戦国ですよ。殺らなきゃ殺られる。侵略されれば、何もかも失ってしまう。守るためには相手を蹂躪するしかないでしょお？ そう、完膚なきまでにい」

男は歪んだ口を滑らかに走らせる。

「あなたにだって守るものはあるんでしょうねえ。しかしですよ、私にだって守るものがありますよお。こうみえても妻と子供だっているんです。そこで一つ質問です、私がこの任務に失敗すれば、妻子はどうなると思いますっ？」

訪ねられた玖狼は微動だにしないが、男は続ける。

「決められた期間内に私が戻らなければ、妻と子供は殺されちゃうんですよお。私が生きていようがあ、死んでいようがあ」

男は手を首に当てると、舌を出して道化のようなジェスチャーする。

「だからあ、私はあなた方を殺さなきゃならないですよお！」

そう言っつて、男は懐から光る石を取り出す。

そうあの少女と同じあの石を。

その石は青く光り、その光が男の手の中で大きくなったかと思うと、分銅と鎌が現れた。それは唐突に出現した。

「じゃあそろそろ終わりにしましょうかあ、そうそう最後に名前くらいは名乗っておきますかねえ、楔、藤堂楔とうどうくわ。貴方の名前はあ、聞く必要もないですかあ！」

声の終わりと同時に、鉛が玖狼目掛けて飛んでくる。距離があった為、余裕でかわす。

玖狼は考えていた。

怒りでおかしくなりそうだったが、あの男、藤堂にも守るべき人達がいって、失いたくないものがある。でもどちらかが必ず失う。命より大切なものを、だ。

また鉛が飛んでくる、まるで生きている蛇のように鎖が動き、玖狼を襲う。



玖狼自身はもう失ってしまった。ならば、まだ失っていない人に譲ってあげるべきじゃないだろうか？ 失って、失って、心が折れてしまう気持ちにはさせたくない。例えばこの卑劣な男でも。

玖狼は目を閉じて最後の時を待った。そして飛んでくる鉛が玖狼の眼前に迫った時、頭の中の何かが弾けた。

その瞬間、玖狼は鉛を避け後方へステップした。

そう、あの蒼と紅の二つの瞳が語った言葉を玖狼は思い出したのだ。

『信じています』

『信じている』

裏切れない！

俺がこの言葉を裏切ることには出来ない。そう死んでも、だ。

だから俺はやらなきゃいけない。例えそれが相手の大切なものを傷つけ壊してしまおうとも。これ以上自分の大切な人達を渡すつもりは、失うつもりはもうない！

「雪牙」

呟くと同時に藤堂の前から消える。正確に言うところと気配を消す。実際はそこに居るのだが歩法により、短時間だが気配を消す事で錯覚させる。それが湊流歩術『雪牙』。

「まあ、消えたあ」

藤堂は動揺もせず。ケラケラと微笑んでいる。その背後から玖狼が右銅回し蹴りを繰り出す、がそれは鎖によって防御されてしまう。そのまま右足に鎖が巻きつき玖狼は地面に叩きつけられた。

「ぐああ！」

受身も取れずに全身を叩きつけられ激痛が走る。何が起こったか理解できない。今まで歩術が見切られた事は身内以外ありえない。起き上がると同時に後方へ飛び退く。

「あつはつはあ、どうしましたあ？ びっくりしましたかあ？」

「な、なんで俺の動きが……」

読めたんだ？ 玖狼はそう思った。

「ああ、別にい、見切ったわけではありませんよ。はつきり言  
って貴方の動きに私はついていけません」

鎖をジャラジャラと鳴らしながら歪んだ口調で続ける。

「この鎖鎌、便利でしょう？ 鎖は間合いに入る者を弾き、鉛は相  
手を自動的に追いかける。私はこの鎖鎌、いやこの石を手に入れ  
てから変わったんですよ。おかげさまで今の地位を手にいれたわ  
けですよ。忍長という地位をねえ。私は負けない、まあ攻撃性は  
多少劣りますが、防御はこの鎖が完璧に防いでくれるのですよ。  
斬撃だろうが流れ矢だろうが」

冷や汗が背中を伝う。攻撃が有効性を持たないと言われ、丸腰の  
自分は相手の鉛や鎌を避けるだけで何も出来ないことになる。ただ  
回避するだけ。それでは凜達の元へ行けない、こうしているうちに  
他の刺客たちが刻々と迫っている。

「さあ早いところ決着をつけましょうよ。いつまで逃げ続けられ  
ますかねえ。私の絶対領域からあ！」

死神の鎖と鎌が襲い掛かる。確かに攻撃自体大した事はないが、  
いずれやってくる疲労で身体の反応が遅れてしまったら、確実に死  
神の鎌は玖狼の命を刈れるだろう。あの鎖鎌をどうにかしないと…  
…。まずは武器が欲しい、素手じゃ鎖を断ち切れない。糞！なんで  
あんな魔法みたいでありえない機能をもった武器が出てくるのだろ  
う。

出てくる？ あの石から？ そういえばここにタイムスリップし  
た時も凜の石は光っていた。俺の形見の石も。

俺の石も？

キーホルダーをポケットから取り出す。菱形をした青い石は玖狼  
の手の平の上で浮薄な光りを放っている。玖狼は両親の形見である  
それを見ながら強く想った。

俺は守りたい！

失いたくない！

だから父さん、母さん、俺に力を貸してくれよ！

光が激しく発光をはじめた。玖狼はその光に手を突っ込む。光を引つ張ると、そこから柄、次に鐔がみえ、そして紅い刀身が出てきた。日本刀のような独特の反りがあり、黒と紅のコントラストが壮麗だ。

もし、あらゆる世界の刀鍛冶が、この刀を見たらどう思うだろう。この魅惑の一品は、恐らく全ての鍛冶の関心を一気に集めるだろう。そして自分でこの刀を作ることには到底出来ないと思息をつくだろう。「鞍馬天狗」  
柄にそう銘が刻まれていたので、思わず読んでいた。

そうか、ありがとう父さん、母さん、このお守りはこういう事だったのか。

今がカットキダ

父は、逆転手は絶対にモノにしなきゃいけない時に使っつて言っ  
てたな。

幼い頃にした親子の会話を思い出し、玖狼の目から涙がこぼれた。

1 - 16 逆転手（後書き）

どうも結倉です。

いつも読んで貰って感謝です！

感想や評価いつでも歓迎しておりますので、ご意見等ありましたら  
気兼ねなく連絡してくださいと幸いです。

密が急ぎ屋敷に戻ると、雪村が屋敷前で待っていた。密は荒い呼吸のまま雪村に状況の説明をして、凧の部屋に向かう。途中すれ違う屋敷番に事情を聞かれたが、構っている暇は無い。「雪村に聞け」とだけ言って押しどけた。

「状況はどうなっているの？」

襖を開けると、凧が先ほどの屋敷番と同じ事を聞いてきた。

密は憂愁に閉ざされる凧を想像出来た為、報告するのをためらい、一瞬だが困惑の表情を滲ませた。その表情が全てを語ってしまった。いた。

凧の瞳には明らかに歪んだ密が映っている。しかしその眼はどんな状況でも受け入れる意思を表明している。

くそ、なぜこんなにも哀しい報告をしなければいけないのだ！

歯がゆい思いをしながらも、密は口を開く。

「昌虎達、諜報部隊が全員討ち死に。玖狼は追手と交戦中です。追手を撒き次第、合流との事です」

昌虎達を『討ち死に』と表現したのは、彼らが決して無駄死にでないという事を密自身に言い聞かせたくて、口が勝手にそう言っていた。

「そうですか……。彼らが……」

凧は覚悟はしていたようで、蒼の水晶は今にも割れそうになっているが、凧は天井を仰ぎ、そうなるのを必死に我慢している。

「だからこそ姫様は生きねばなりません」

「みつちゃんもでしょう？」

ああ、この姫様はなぜこうも自分の事だけ考えてくれないのだろう。こんな自分を常に気にかけてくれて、友のように親しく笑いか

けてくれる。この魅力が、優しさが、卑しい者達の悪意に弄ばれるなんて、もう私は考えたくない。

「ここから逃げましょう！ 春日も植村も、もうおしまいです。上杉と北条の連合軍がこの春日へ侵攻しています。屋敷に火を放ち、姫様は自害したと見せかけます。見せかければ、もうこっちのものです。後は姫ではなく、そこいらの町娘として私と、あの間抜け面した阿呆と暮らしましょう」

その見せかけに相手が騙されるかどうかはもう関係ない。自分はこの方を守るのだ、そう決めた。

「さあ、身支度は側女にさせておきますので、受け取った後、屋敷を出しましょう」

凜はコクリと頷く。密が荷を受け取り、凜に手を伸ばした瞬間、襖が勝手に開いた。

視線を向けると、そこには雪村が立っている。

「どうした？ そこをどけ」

密が怪訝な眼差しを向けつつ、雪村に言う。

雪村は鎮痛な面持ちで黙りこんだまま動かない。

「幸隆様か？」

「こんなことをなさるのは、玖狼殿かとばかり思っていたのですが……」

雪村は玖狼のお目付け役だったのだろう。やはり幸隆は玖狼を信用してはいなかったようだ。疑心に囚われた幸隆には、信じられる人間が誰一人としていなかったのだろう。しかし密に幸隆を責める気は全く無かった。

この戦国の世、裏切りに怯え、他国の情報に耳を澄まし、その中から正確な判断を下せる武将が何人いるだろうか。密には全てはこの世界が悪いのだ。こんな世の中でなければ幸隆はきっと実直で誠実な主人であっただろう。

「はっ、確かにな。あの間抜けがやりそうな事だしな」

「貴女はこのような馬鹿げた行動はしないとばかり」

その瞬間、密が言葉を遮る。

「馬鹿げた行動しかないだろうが！ 貴様が誰に仕えているかはわかる。だがな、私は姫様以外には仕えない！ 姫様が私の全てだ！ 主君の希望を叶える為には、もはやこれ以外、考え付かない！」  
雪村は痛苦を味わったかのような表情を崩さずに応える。

「私だって貴女の気持ちは分からなくもない。貴女は『お前はまだ必要だ、まだこのような場所で終わる男ではない』そう言ってくれた。私は心底感動したのです。殿の前で見事なまでに敗北し、価値の無くなった私にそう言ったださった貴女は、とても眩しかった」

雪村からの言葉に密は軽く驚く。が、依然雪村の表情は厳しい。

「ですが、私は春日家の将であり、なにより武士です。何度となく考えましたが、主に逆らうことは出来ないのです……！ お願ひします、どうか……！」

「くだいな、私は武士じゃない。この方を救いたい、そう思った瞬間、もう私は忍びですらなくなったのかもしれない」

「玖狼殿の影響ですか……」

「どうだろうな」

密は肩を窄めて、やれやれとくたびれたように言う。

雪村が目を伏して、刀に手をかける。その刹那、密が背後を振り返ると、同時に苦無くぬを投げた。呻き声と人の倒れる音がした。

ついに上杉・北条側の牙が我らが喉元に喰らいついてきたのだ。

玖狼は果たして合流出来るのだろうか？ 密は不安になりながらも、凜を引き寄せる。

「姫様！ 大丈夫ですか？」

「は、はい」

引き寄せられた凜は素早く密の背後に回り込み、頷く。

「お互い、いがみ合っている場合じゃないようだな」

「敵方の忍ですか。どうやらそのようですね」

「とりあえず、ここからの脱出を最優先とする。お前との話はそれからだ」

「わかりました。凜様、少々苦しいでしょうが我慢をお願いします」  
屋敷の後方から火がたったようだ。密が倒した忍の死体と、鼻を  
突くような煙が襖を破って飛んでくる。それを突破し、中庭に飛び  
出す。

「くるぞ！」

雪村に向かつて忍刀が振り下ろされるが、これを難くないなし、  
返しの一撃を繰り出す。密は凜を庇いつつ戦闘を行っているせいか、  
あまり攻撃的な手法が取れず、苦戦している。

護衛の任に一番やっかいなのが、護衛の対象者が戦闘に巻き込ま  
れた場合だ。

無闇に武器を振り回して対象者を傷つけたりできないし、自分す  
ら守りきれない状況下で対象者まで護衛しなければいけない。

普通戦闘になった場合、五、六人程度が周辺で警護し、さらに対  
象者は安全区域にて待機するのだが、今は密と雪村の二人だけだ。  
護衛出来る者も、安全区域まで凜を誘導出来る者もない。

畜生、他の警護の奴らは殺られてしまったのか？ 左右確認して  
みるも、相手は十人程度目視出来るのに、味方は確認できない。

その確認の為に目を凜から逸らしてしまった瞬間、凜に凶刃が襲  
い掛かった。

ぬかった！

密は刀を放り投げ凜を抱きかかえるように庇う。

もう駄目だ！ 密はそう思った。

「ぐわあっ！」

聞こえたのは自分の叫び声でなく、忍の方だった。密が瞑ってい  
た目をそうつと開けると、雪村が胸から血を滴らせながら立ってい  
た。

「大丈夫ですか？」

幼さの少し残る笑みで、密に聞いてくる。ああ、と一つ頷きなが  
ら、雪村の胸の傷を確認する。傷口が溢れ出る血で隠され、その重  
傷さを窺わせる。



「ここは私が引き受けましょう。密殿は凜様を連れてお逃げください」

「駄目です！ 雪村殿、貴方も一緒に」

凜が雪村の傷口を抑えながら拒否する。

「いえ、私はもう足手まといです。それよりもここで凜様をお守りして、誇り高い武士として逝きたいのです」

「そんなっ！」

首を振り、目は敵を睨むように据えていたが、口元は笑っていた。

「……すまない」

「いいですよ、それに惚れた女性を守って死ねるのであれば、本望です」

凜と密が驚きの表情で同時に雪村を見る。

「ははっ、どうせなら言っておいたほうがいいかな、と」

乾いた笑い顔で雪村が一瞬目を合わせたのは、密だった。

「……私か？」

それしか言えなかった。答えることが出来なかった。

「今は結構ですよ。でも、もしお互い生きていられたのなら、返事を聞かせてくださいよ」

「わかった」

密は頷き、凜の手を引き屋敷の外へ駆けて行った。

二つの影を見送ると、雪村は刀を下段の構えに変えて相手を牽制する。

「生きて帰りたいなあ」

困ったような、諦めてしまったような、残念そうな、そういった全てが入り混じった表情で、雪村はそう呟いた。そして忍達と向き合う。

「我は春日家随一の勇の者！ 高内雪村なるぞ！ 命の要らぬ者が

らかかってこい！」

凜呼とした若武者は人生最後の名乗りを上げた。



凜と密は屋敷から玖狼が青洲池と言っていたあの場所に向かっていた。非常事態になった場合はあの場所へ。作戦開始前、皆でそう確認した。背後からは雪村の剣をかくぐってきた忍びが二人追ってくる。

「みつちゃん！あれ！」

凜から言われ密が前方に視線を移すと、玖狼が走ってこちらへ向かってくる。

二人から笑みがこぼれた。哀しいことが多い中で少しの希望が心を満たしてくれる。

「凜、無事か？」

「はい」

「密のほうも」

密は頷き背後に眼をやる。玖狼も気付いていたようで、刀を持ち直し構える。赤と黒の異様な色合いと雰囲気を醸しだす不思議な刀だ。

密と玖狼にとって二人の忍びは相手にならなかった。玖狼は素早く相手の懐に潜り込んで刀の柄で鳩尾を強打し、密は苦無を四肢に打ち込み相手の動きを奪う。

「貴様、その刀はどうした？」

振り返り歩み寄ってくる玖狼に密は訪ねる。

「ああ親の形見かな。ちよっといういると、ね」

哀しげな漆黒の眼が凜に飛び込んでくる。よく見ると玖狼は全身擦り傷、痣だらけでこちらに来た時に来ていた服はボロボロになっている。そしてなにより凜にとって気がかりだったのは玖狼から漂ってくる嫌な臭い。

血の 臭い

「人を殺したのですか？」

口に出してしまった。

「殺してない。でも殺してるのと同じだ」

玖狼は悲愴な面持ちで言う。

「残酷な世界だ、ここは」

その言葉に凜の蒼い瞳が揺れた。そこからぼろぼろと大粒の涙が零れる。

ああ、この人を私は汚してしまったのか、純粹で優しく太陽のようなこの人を、醜くおぞましい狂気の世界へ連れて来てしまった。そして彼はやりたくもない戦に駆り出され、優しさから人を殺める事もできない。殺しても殺さなくてもこの時代、敗北が死を意味することは分かっているのに……！ きつと彼は今まで殺さずに倒してきた相手が、自分の所為で死んでいくことを責めている。

これから先、彼は自分のした事を悔いながら生きていくのだろう。私自身も同じ思いをしてきた。

それだけに彼が今同じ気持ちでいる事がとても、とても哀しい。

でも、少し嬉しい

「さあ、早く行こう」

玖狼は凜の手を取り、走り出す。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

嗚咽が混じった声で繰り返すように言う。凜の握った手に少し力が入る。玖狼もそれに応えるように手に少しだけ力を入れる。その手の握り返しが、まるで「大丈夫」と返事をしてくれたように思えた。

「よく戻ってきてくれた」

「約束は破れない、だろ？」

「そうだな」

「雪村は？」

密は首を振り微笑む。その中に哀感が漂うのは気のせいではないはずだ。玖狼自身、胸の痛みを押さえつける。

「とにかく聞いてくれないか」

「なんだ？」

「凜の持つている首飾りの石があったら？ 俺も似たような石を持つてるのは知ってるよな？」

聞かれた凜は涙を拭きながらコクリと頷く。

「この刀は俺の石から現れた」

密は少し眉を上げ、驚いたような表情になった。そして遠慮がちに聞いてきた。

「帰るのか？」

密にはそのような予感がしたのだろう。

「ああ、多分凜の石は時代を超えて人を運ぶことが出来る。なぜそれが発動したかは分からないが、発動条件は持ち主の感情によるものが大きいと思う」

自分は守りたいものを守りたいと強く思った。その結果、この刀が現れた。

「では私が玖狼の時代へ行きたいと強く思えば……」

「上手くいけばな」

もうこれに賭けるしかない。どこに逃げてもいつかは追手に見つかるかもしれない。この世界で凜が平穩に暮らすことはもう不可能に近い。いつ現れるかも知らない敵に怯え、恐怖する生き方は凜には似合わない。凜の瞳と同じような蒼い空の下を、気持ちよく走らせてあげたい。それが玖狼の願いであり、きつと昌虎達の願いでもあるはずだ。

「あの池までもうすぐだ。着いたら試してみよう」

「はい」

凜のその返事がまるで停止スイッチだったかのように、密がいきなり足を止めた。

「？」

密を振り返り、歩み寄ろうとする。

「貴様は先に行け、どうやら雪村が相手をしていた追手が来ているようだ」

その言葉で玖狼は理解する。

雪村の死を。

そして密の覚悟を

「まだ距離はあるんだろう？ ならさっさと移動して」

「考えろ！ 我々は姫様を連れているのだぞ。その足では絶対に追いつかれる」

忍びとお姫様との脚力では、この程度の距離はあっという間に詰められてしまう。それを理解した玖狼は苦痛に歪んだような顔になる。

「駄目だ、皆で俺の時代に行こう。池まで行けば……、雪村もきつと来る」

それは多分、いや限りなく零に近い値で来ない。

密は我が子を見るような、優しい表情をする。

「もう分かっているんだろう？」

「っ！」

右手を玖狼の頬に伸ばしながら続ける。

「こうするしかないんだ。姫様を守るなら、貴様が一番適役なんだ」  
凜は胸元で両の手をギュッと握り締めて震えている。凜には雪村と密の運命が分かるのだろう。それは玖狼にも想像する事が出来る。だから止めたい。行かせたくない……。それだけは勘弁してほしいと思った。

「何度も言っているが、貴方が優しいのはもう分かっているから。貴方の目を見れば、言いたい事も分かるよ。でも私は行けない、貴

方と姫様を守りたいから」

玖狼の頬を撫でる柔和な表情の密に玖狼は硬直する。まるで女神かと思うくらいに彼女を美しいと思った。時間が止まればいいとさえ思った。

それほどに彼女の優しげな紅い瞳と、流れる漆黒の髪に見惚れた。「貴方は私に縛られた世界で選択の自由を教えてくれた。私も貴方と一緒に貴方の時代へ行きたい」

なら一緒にいこう。

「でもそうすれば、恐らく皆死んでしまう」

分かってる。

「だからここでお別れだ」

嫌だ。

「分かって。貴方も姫様も、私にとってかけがえのない人なの」

イヤダ。

俺だつてかけがえのない人をこれ以上失いたくない。昌さん達や雪村を失い、更に密まで見捨てるというのか！ もう絶対に嫌だ！俺は彼女を守りたいんだ！ 例え俺が人を殺める事になっても、俺は彼女のためなら何だつてやってやる！ 追手の奴等も、幸隆からの刺客だつて、全て俺がなんとかするんだ！

玖狼の感情は密のそれを全力で拒否していた。

ばちん。

玖狼が目の色を変えようとしたその時、密が玖狼の頬を叩いた。

「これを私の代わりに貴方の時代へ連れて行ってくれ」

密は困ったように笑いながら、腰に付けていた布袋から朱色の櫛を取り出すと、玖狼の手の上にそつと置く。

「私が生まれながらにずつと持っていた櫛だ。多分、親の形見」

なんだよそれ。しかも『貴様』だった俺の呼び方がいつの間にか『貴方』になつているところも苛々する。優しい喋り方にも。

「連れて行ってくれ、私を」

言いながら、密は玖狼を包み込むように抱きしめる。

真っ白になる。でも心の奥底が暖かくて懐かしい。

「姫様を、そして私を、よろしく頼むぞ」

玖狼から身体を離し、振り返りながら微笑む密。その真紅の瞳からこぼれる涙が太陽の日に反射して、密自身を包んでいるようだった。それはまさに光彩陸離と呼ぶに相応しい程に眩しく見えた。

いつもあきれた様に笑っていた口元を、猫のように釣りあがった紅い宝石のような瞳を、冷徹に見えるが内心はとても熱かったあの女性を。

走り去る密を滲んだ視界で追いながら、玖狼は櫛を握り締め、彼女の姿を心の中に深く刻みこんだ。

池に着くと、辺りを見渡す。木々や草花も静かに揺れているだけで人気はない。前に来た時と同じで落ち着いた良い場所だ。玖狼は凜の方に振り返る。凜はここまで走ってきたのが相当にきつかったのだろう、完全に息が上がっていて今にも倒れそうだ。

「大丈夫？」

凜にそう言いながらも辺りを警戒する。もしかしたら昌虎と雪村は絶対に来ないとしても半蔵や太一達なら、と少し期待をしていたが彼らの姿は見られない。表情に出ているのだろうか、凜は呼吸を整えながらも眉を下げ申し訳なさそうに言う。

「い、今は私達だけでも無事に脱出できるように頑張りましょう」

「そうだ。皆の思いに応える為にも」

凜は胸元から首飾りを取り出して握り締める。



「強く、そして深く念じてみよう」

玖狼の場合はそうだった。

大事な人を守りたい、そう心の底から思ったときにあの刀が現れた。だから念じよう。

「帰るんだ。元の世界に」

「皆の想いに応える為に私は祈りましょう。玖狼の世界へ」

凜は目を瞑り黙祷すると、石が青く輝き始める。この光は玖狼が青洲池で見た光と同じで二人を包み始めた。すると足元に大きな穴が出現し、玖狼達は穴に吸い込まれる。

穴の中はあの時と同様に様々な時代の光景が、絵画の様に飾られては消えていった。

大きな船で大海原に行く冒険者達。

果てしなく続く外壁を作る民の姿。

壮大に降り注ぐマグマと噴煙にうろたえる人々。

玖狼は薄れていく意識の中で様々な光景を見つめていた。そして途切れそうになる意識が判然と戻された。

光景の中、紅い瞳の黒髪の女性が誰かに微笑んでいたからだ。幸せそうな、でも寂しそうな、でも、でも……。目の奥が激しく熱くなる。手を伸ばしても彼女には届かない、薄れいく意識の中で櫛を握り締めて玖狼は誓う。

『……………連れて行くよ、時を越えて君を』

玖狼は誓う。

1 - 1 8 密 (後書き)

どうも結倉です。

ここまで読み進めてくださった皆様には感謝です。

次回はよいよ1章最終回となります。

もう少し、もう少しだけお付き合い願います。

眩しい光が差し込み、目を細めながら辺りを見渡す。気がつくと思慣れた風景が目映っていた。周囲にまばらに生えている木々や花、穏やかな水面の上でスイスイと動いているアメンボ、遠くに見えるドーム型スポーツ設備。

「帰ってきたのか？」

そう呟いてから、ふと凜の存在を思い出す。

周囲を見渡し、木に背中を預けるようにして眠っている凜を見つめる。直ぐに歩み寄り、揺すり起こす。

「大丈夫？」

凜はその声に対し少し反応し、腫れた目を薄く開ける。その目から玖狼のようにあの穴で懐かしい光景を見たのかもしれないと思った。違う、百パーセント見たと思った。

「はい」

声こそ小さかったが、はっきりと耳に聞こえた。そして凜は聞き返す。

「玖狼こそ大丈夫ですか？」

その問いかけに自分も凜と同じように目が腫れてしまっていることを理解する。

「ああ、大丈夫」

玖狼は強がってみせる。本当は心身共、ズタズタだ。きっと彼女にはばれているだろう。それでも強がっていたかった。

「どうやら戻って来れたみたいだよ」

凜は立ち上がると、遠くのビルや家屋を見ながら言う。

「そのようですね、これから私はこの世界で生きていくのですね」  
少し寂しげに見えるが、蒼い眼ははっきりと強い光を帯びていた。

「私、この世界で頑張って生きていこうと思います。恐らく順応するまでに色々苦労もするでしょう。でも私は皆の為に頑張って幸せになるうと思います。一人の女性として悲しみ、喜び、学び、遊び、そして人を好きになって、母様のように優しく、みっちゃんのように強くなります」

名前の通り凜とした決意表明は澱みきった心の中であつても素敵に感じた。そして彼女を羨ましく思った。

「……とりあえず俺ん家に行くか」

正直、タイムスリップした時間から戻ってくるまでどれくらいの時が流れたのかは分からない。

きつと静香も心配しているだろう。玖狼は三週間、凜とタイムスリップしていたのだから。ひよっとすると、搜索願まで出されてしまっているかもしれない。

いや、そんな事はどうでもよかつた。今、玖狼の中を占めていたのは、彼女達の存在だった。そして彼女達を守りきれなかつた自身の不甲斐なさと後悔だけが心を蝕んでいた。

家路への足どりは重く、そして苦しかった。

家に着くと、ソファに猫のように横になつて埋もれたままの静香が右手を挙げて「おかえり」と言ってくれた。

「ただいま」と小さく返事をする、玖狼は直ぐに風呂を沸かし凜に入るように促した。二人とも戦場を駆け回ったせいであちこち汚れているし、玖狼にいたっては生傷があちこちにあり、着ていたシャツとズボンはもうボロボロになっていた。しかしここは凜に先に入ってもらふことにした。静香と話したい事があつたからだ。

玖狼は静香の隣に座り、静香に訊ねる。

「姉さん、今日って何月何日？」

「八月十五日」

「どうやら三週間の時間が流れていたようだ。それは玖狼が凜の世  
界で過ごしていた時間と同じ期間だ。」

「心配かけてゴメン」

一言謝る。

「うん」

静香はソファから立ち上がると、冷蔵庫の方へむかい中から麦茶  
を取り出す。

「信じてもらえないかもしれないけど、俺、凜の故郷にタイムスリ  
ップしてた」

そこから先は堰が切れたように、ただただ一方的に話した。

凜と共に過去へタイムスリップしたこと。

そこで口ひげを生やした頭領とその一座から凜を救ったこと。

御前試合で勝負した腕のいい生真面目で誠実な少年剣士のこと。

彼らと親しくなり楽しく過ごした日々。

戦争に巻き込まれたこと。

そして切れ長の紅い眼をした女の子のことを。

玖狼はしゃべった。玖狼の口は、たんたんと今までであった出来事  
を告げていた。楽しかったことが嬉しそうに聞こえず、哀しかった  
ことが悲しく聞こえず、ただ玖狼は自分の気持ちを感情無く朗読し  
ていた。その間、静香はテーブルに腰を置き、黙って話を聞いてい  
た。

そして玖狼の話が終わる。すると静香はソファの後ろに回り込み、  
包むように玖狼を背後から抱きしめた。

「頑張ったね」

その一言が優しくかった。また涙が込み上げてくる。頭を下げた顔  
を両手で覆う。

「うん……、でも助けられなかった……！ 昌さん達を……、雪村  
を救えなかった！ 密を救えなかった！ 俺は何も出来なかった！」  
悔しくて、辛くて、情けなかった。

「それは違うわよ。アンタは凜ちゃんを救ってきたじゃないの。今、彼女がこの世界で存在していることがなによりの証じゃないの」

静香は玖狼の頭を撫でる。そして、また抱きしめる。

「アタシはその密さんと昌虎さんだっけ？ その人達に感謝してるわ。だってアタシの大切な弟を守ってくれたんだから」

その言葉に胸の奥が激しく熱くなる。

「きつとアンタは好かれてたのね。アンタはその人達からさ、自分の命よりも大事だって思われてたんだよ。アンタが守りたかったように、あの人達もそれ以上にアンタを守りたかったのよ」

もう止まらない。膝に大粒の涙が降ってくる。

「だからアンタは感謝するべきなんだ。皆に助けられたことに対して」

勘違いをしていたわけじゃないと思う。しかし自覚はなかった。

自分は彼らに支えられていたんだ、と。

「俺は、俺は言っておげられなかった……」

あの人達に。あの女性ひとに。

「ありがとう、って……」

ポケットから朱色の櫛を取り出す。初めて気付いた。でも、もう遅い。なぜなら、この想いを伝える人とはもう会えないから。その気持ちに切なくなる。

そんな玖狼をみて、静香は再度玖狼の頭を撫でながら言う。

「そっかあ、話を聞いてて、なんとなく分かってたけど……」

そして少し間を空けて、小さく呟くように静香は続けた。

「好きだったんだね、その櫛をくれた女の子」

嗚咽交じりに玖狼は「うん」と頷き、答える。

「その女の子もきつとアンタが好きだったよ。そうでないとアンタにそれ渡さないよ。そうでなけりゃ、凜ちゃんに渡してる。きつとその子もアンタに忘れられなくなかったのよ」

今までそんな気持ちになったことがなかった。でも別れの時、はつきりと思った。別れたくない、と。でも彼女の笑顔がそれを許さ

なかった。きつと自分の気持ち表情に表れていたのだろう。彼女はきつとそれを分かつていて、自分を送り出してくれたと思う。しかし彼女は忘れて欲しくなかった。自身の事を。そう思うと胸が苦しい、とても都合のいい解釈をしていると思うが、そう思いたいと思っている自分に気付き、改めて恋をしていた事を実感して哀しくなる。でも、彼女達に救われた自分がいて、彼女等に報いる為、自分は精一杯生きていかなければならない。自分が凜に願ったように、自分も彼女にそう思われていたのだと思うから。

静香は玖狼から体を離すと、リビングから出て行く。出て行く直前に「夕飯よろしく」と右手を挙げひらひらさせる。

「つたく、人使い荒いよな」

でもやっぱり姉さんだ。ありがとう。

心の中で呟いておく。口調や素っ気無い態度なんかはやっぱり彼女に少し似ている。素直に言えない自分は、まだまだ子供なのだろうか。それとも、今回の出来事で少しは大人になったのだろうか。

玖狼はリビングの窓を開けて空を見上げた。

多分、未熟。まだまだ思慮の無いガキだ。これから先、まだまだ苦くて辛い想いを味わっていくのだろう。でもこれ以上の苦さは後にも先にもこれつきりにして欲しい。自分にはこれ以上、想いを背負っていける自信は全く無い。

だから、今度こそきつと守る。守りきる。

だから

だから、せめて今は、今だけは泣いてもいいだろうか？

この涙が流れきつたら、俺はきつと前に進んでいけると思う。

でも今は立ち止まって、

後ろを振り返って、

後悔して、

何度も何度も謝って、

感謝して、

そして、君の呆れたような笑顔を思い出して、ぐしゃぐしゃになる。  
ろう。

滲んだ眼で見る空は海の中のように歪んでいたが、相変わらず色だけはとてもきれいな蒼だった。

温かい湯に浸かりながら、ぼたぼたと涙を湯船に落とす。もう泣いてばかりの自分に嫌気がさしてくる。彼らの別れを、ただ唇を噛んで見守ることしか出来なかった。多分彼は彼女が好きだった。そして彼女も……。

本来ならば、私が残れば良かった。私が残って彼女が行けば、彼も悲しまなくてすんだはず。そう思った事もあったけれど、それでも彼は悲しい思いをするのだろう。優しい人だから。私は長年連れ添った親友を失った代わりに自由を手に入れた。でもそんな自由に価値なんてあるのだろうか？

「私はここに来てよかったのかな？」  
思わず口に出していた。

「いいのよ、ここにいて」



独り言に返事が返ってきたので、驚き顔を上げると、静香がドア越しに立っているのがわかった。

「あの馬鹿野郎もくよくよ愚痴ってたけど、凜ちゃんもかあ。まあ話はあのヘタレから大体聞いたわ」

ドア越しに聞こえる声は通りの良い声で、励まされている気がした。

「私は凜ちゃんじゃないから凜ちゃんの気持ちはわかんないわ。でもあなたを支えてくれた人達の為に、あなたは精一杯生きないと駄目。あなたはそれを分かっている。今は一人になって少し弱気になっているだけ。大丈夫、ここではアタシや玖狼がいるわ。凜ちゃんのことにはアタシ達を守るから」

「それじゃ駄目なんです！」

凜は声を張り上げる。ドア越しでも静香が驚いたのが、気配でわかった。

「私はもう守られてばかりじゃ駄目なんです。私の所為で多くの大切な人がいなくなってしまう。もう二度と失いたくないと思っただのに、結局今回も……。そして玖狼にまで酷く辛い思いをさせてしまいました。私が今の私のままでは、またいずれ玖狼に同じ思いをさせてしまいます。それだけは嫌……！」

湯船からお湯をすくい、顔についた涙を落とす。

「私は強くなりたいです。守られる存在ではなく、対等に並んでいきたいのです。玖狼やみっちゃんの隣に」

凜の言い分を聞き終えて、静香はドア越しに落ち着いた声で返してくる。

「そっか、それが凜ちゃんの選んだ道なのね。ならその通り進めばいいわ。アタシは凜ちゃんの味方だからね。なにかあったら相談しなさい。これは家長の命令よ。凜ちゃんにはしばらくうちで預かるから、私の言う事はちゃんと聞きなさい」

本当に兄弟揃って優しい。

「はい」

「あなただつて辛い思いをたくさんしてきたはずよ。だからこそ幸せになりなさい。そうなる義務と責任が、あなたにはあるわ。だから頑張りなさい。今は辛いでしょうけど、あなたはきっと幸せになれるよ」

静香はそういってバスルームから出て行つた。

凜は湯船に映る腫れた眼をした自分を見る。今も溢れ出る涙は止まらない、それだけ失つたものが大きかった。でもそんな弱虫な自分とはこれでお別れにする。

私は強くなる

彼のように

彼女のように

いつか自分の大切な人を守れるようになる

だからこの世界で私は自由に逞しく胸を張って生きていこう

首にかかった蒼い石を見つめ凜は誓つた

ワタシハマケナイ。

1 - 19 玖狼と凜（後書き）

どうも結倉です。

ようやく1章完結となりました。

如何だったでしょうか？ 拙作ではありましたが、ここまで読み進めてくれた読者様に感謝です！

それではまた2章（いつかは未定ですが……）で会いましょう！  
では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5524s/>

---

タイムパラレル

2011年7月17日03時29分発行